

---

# ドール      デリート   2

和 貴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドール      デリート 2

### 【Nコード】

N3371C

### 【作者名】

和 貴

### 【あらすじ】

僕達の保護者になってくれた連邦軍F C I部長のオヤジさんが狙われた。犯人は四年前に軍が極秘で抹殺したはずの子供達。でも、その中に僕達の知っているアーヴィン・オースティンが居た。何故、軍は彼等をそうしなければならなかったのか？生き残ったアーヴィンに再び射殺命令が下される！      デリートシリーズ第2弾。半年後のニア&マックが出逢った人物は……

## 第1話 告白

嫌な気分だった。

闇夜の中、自分の背の丈程もある草叢を彼は必死に掻き分けていた。

視界は頗る悪く、周囲を取囲んでいる草叢は思っていた以上に広い。

赤外線の暗視スコープは既に失っていた。

唯一、義眼である彼の右眼だけが暗闇での識別が可能だったが、障害を起こしたらしく映像が頻りに乱れて頼りにならない。

自然の要塞は幾度と無く彼の進路を遮り、足を掬った。

彼は独断である人物を密かに護衛していた。

今迄、彼は追い掛ける側だった。緻密な行動計算から常に相手の先手を取り、決して追われる側の立場に立った事など無かったのだが……

無防備な人物を密かに護衛すると言う護りの態勢が、一見簡単そうに見えてその実これ程まで難しいものだったとは夢にも思っていなかった。

そして、何者かに十数メートルもの崖から突き落とされ、追い掛けられている。

追って来る者は彼を突き落とした者とは全く別の気配だ。

ただ、その人物が自分と十分互角、或いはそれ以下の技量の持ち主だと直感的に覺っていた。

彼は本来の目的から遠去けられた事で焦りと苛立ちに冷静さを欠いていた。

すぐそこまで来ている

気配が跳ぶ。

彼の中で警報が鳴った。

頭上を振り仰ぐ。

小柄なシルエツトが雲の切れ目から覗いた月明りに浮き出される。三つ編みの長い髪と華奢な身体の線でそれが少女ものだと判る。そして、その右手には青白く光る短刀が逆手に握られていた。

（そんなモノで、本気で俺が殺れるとも思っているのか？）

彼は一瞬相手を見縊<sup>みくひ</sup>って油断した。

少女が短刀を振り下ろす。彼は太刀筋を見切ってかわした。

「！」

左上腕部に鋭い痛みが走る。

少女は既に見切られていた事が解っていた様だ。素早く短刀を切り返して擦れ違いざまに彼の腕を掠めていた。

少女は怯む事無く猶も短刀を薙ぎ払う。

青白い光が一閃する度に、空を切る鋭い音がして雑草が舞った。

「オヤジさんに何の用？」

少女が口を開いた。

凜とした声だ。

身長百六十前後の少女は、身長百九十以上ある彼と真っ向から向き合っても物怖じする気配一つ感じられない。

逆に彼の方が躊躇していた。

少女の声に聞き覚えがあったからだ。

（あの人がオヤジさん？ …… と言う事だ？）

幾度も短刀を間合いギリギリでかわしながら後退りする。

彼女の、その素早い粗削りで無駄の多い太刀筋にも、どこかで見覚えがあったような気がしてならない。

（この娘は何処かで……？）

つい、思い出す事に夢中になり、防御が疎<sup>おろそ</sup>かになった。少女はその隙を見逃さない。

ハッとして反射的に手が動いた。

火花が散る。

振り下ろされた一撃を辛うじて持っていた拳銃の銃身で受け止める。

少女の体重は知れていたが、体重を懸けて斬り込んで来るタイミングが絶妙だ。

その反動で彼は引金を引いてしまった。安全装置は既に外してある。

「きやう？」

少女が短く叫んだ。彼女の身体が仰け反り、力無く草叢の中に落ちる。

（しまった！）

全身の血液が凍り付き、心拍数が一段と上昇した。

（殺っちまった……か？）

しかし、全く手応えは無い。

（当たって……無い筈）

彼は肩で大きく息をしながら、闇に溶け込んだ少女の姿を探した。銃口は少女の倒れた方向に向けたままだが、今度は安全装置を掛けておいた。

草叢を掻き分けると、少女のか細い腕が見えた。

慎重に近寄り、少女の手首を捕ると脈拍の有無を確認した。

早いが、規則正しく脈打っている。

ほっと安堵あんどの息を吐く。そのまま視線を這わせた。微かに少女の胸が上下している。どうやら至近距離での銃声に驚いて失神した様子だ。

雲の間から月に掛かったコロニー（エア）が顔を出した。二つの月明りが少女の姿を仄ほのかに照らし出す。

詳細は不明だが、腰の辺りまである長い髪を三つ編みにした十七、八歳位の少女だ。

（この娘！）

やはり彼には見覚えがあった。

そして同時に背後でもう一人別の気配を察知する。

「動くなッ！」

僕は精一杯の低い声で怒鳴った。

でも、僕が彼に対して怖気付いているのを隠す事は出来なかった。彼は僕に背を向けてはいるけれど、僕の銃を構えている両手が震えているのに気が付いているみたいだ。

僕は背中を向けて静止している彼を観察した。

黒い髪に黒い上下の服装。闇に紛れるのなら造作も無い格好だ。それに拳銃まで持っている。

（やっぱり！ オヤジさんを付け狙っていたのはこの人なんだ！）

彼は静かに拳銃を足元に置き、軽く両手を上げながらゆっくりと彼女の傍<sup>そば</sup>から立ち上がった。

思ったよりも背が高い。

「うっ、動くなって……言ってるんだ！」

ごくりと喉が鳴った。緊張しているせいか口の中がカラカラになって喋り辛い。

狙っている銃口が彼の動きに合わせてぐっと上がった。

（うっ……でかっ）

二メートル近くはある。

立ち上がった彼の背丈に威圧されて、僕は腰が引けてしまった。

「人に銃を向けているのなら、もう少し落ち着いてみる」

彼が静かに言った。そしてゆっくりと振り返る。

「ほ、本当に……う、撃つぞ？」

声が震えて裏返る。おどろいているのがバレタだ。

（うっ、うわっ！ こっち向くな！）

僕はぎゅっと眼を閉じた。

誰だか判らないけど、視線を合わせたくない。

実際、僕は人を撃った事も、怪我をさせた事さえも無い。

（それでもニアを助ける為なら何だってやってやるさ！ そうしないといけないんだ！）

そう自分に言い聞かせて、小さく萎縮した勇気を必死になって奮  
い立たせる。

「構わない。その銃で撃てるものなら遣ってみろ」

投げ遣りに言い放った彼の口元が笑ったような気がした。

そして月明かりを背にして振り向く。

僕には逆光になって、彼が誰なのか解からなかった。

けれど、あからさまに挑発されてカッと頭に血が昇る。

「ば、馬鹿にして！ ば、僕が、う……撃てないとしても……お、思  
ってるの？」

半泣きになりながら僕は引金を引いた。

「！……あ、あれ？」

引金は何度引いてもガツチリと固定されていて動かない。

（どうして？）

あつという間に彼の手が伸びて、僕は両手の上から銃身を掴まれ  
た。

「う、うわっ？」

僕は彼の片手で両手ごとしっかりと拘束され、銃から手を放すこ  
とさえ出来ずに呆気なく引き倒される。

（殺される！）

全身が強張った。

恐怖で悲鳴さえ出ない。

「外してないぞ。安全装……」

彼の言葉を全部聴き取れなかった。

僕は彼が首筋に振り下ろした手刀で<sup>しゅとう</sup>敢え無く気を失う。

（サイバノイドと人間の……双子？）

彼は自分が倒した子供と少女の姿を見比べた。

クリーム色の自動車が街外れの小高い丘陵を登って行く。

この辺りは住宅も疎<sup>まば</sup>らで、周囲を緑に囲まれた閑散とした場所だ。

その中の一軒に車は進入した。

車から十七、八歳くらいの少女が降り立った。

黒いカチューシャで留めた長い金髪は、緩やかに波打って腰の辺りまで流れている。

肌は貫ける様に色白で、すらりとした体型はまるで九頭身のモデル並みだ。

整った小柄な顔には、エメラルドを想わせる碧い瞳を持ち、しつとりとした長い睫に包まれていた。薔薇色の頬に、溶けてしまいうな唇　恵まれた容姿は非の打ち所が無いと言っても過言では無かった。

袖を捲<sup>まく</sup>った白いシャツにベージュのパンツ。何処にでも見られるファッションだったが、彼女はそれを自分の容姿で一際洗練されたものに換えていた。

彼女は車両後部のハッチを開けて、両手一杯の買い物袋を取り出した。

見た目、細い両腕に抱えた荷物は到底彼女の力では持てないように思えたが、彼女はそれを苦にせず軽々と持ち上げた。

「部長、今日も来ちゃいました」

彼女の弾んだ声が、庭先で背を向けていた初老の男に掛けられる。

「おお、すまんなエルフィン」

植木を剪定<sup>せんてい</sup>していた老紳士が手を休めて応えた。

その温和な表情からは、彼が連邦中央統轄機構（FCI）の局長兼、第8課所属部長だと窺<sup>うかが</sup>えない。

エルフィンは鼻歌を歌いながら、足取りも軽く家の中に入って行った。

「また来たよ」

「あ、いらつしゃい」

サイバノイド（人造人間）に換装している僕は、ソファに据わったままで振り返る。

彼女が来るのを心待ちにしていた僕は、嬉しくなって胸が高鳴っ



た。

僕が自分の身体を失ってから、一カ月があつという間に過ぎていた。

特殊能力を持っていた僕は、身体を失っても双子のニアの身体を共有する事で、『僕』という存在を維持する事が出来た。

でも、幾ら双子だからと言っても、いつまでもニアの身体を借りている訳にはいかない。

ニアは一応女の子だし、総てに対して超鈍感な彼女が平気でも、僕の方が困ってしまう時だつてある。

だからオヤジさんは早くから僕の意を汲み取ってくれて、『僕』の受け皿になるサイバノイドの身体を与えてくれた。

通常、何かの理由で身体の一部を失つて生体、或いは機械化移植した人のことをバイオノイドと言い、身体の殆どを失つて、脳核に電子制御機能を移植してナノマシンと併用すればサイバノイドと呼ばれて識別されている。

半身がバイオノイドのエルフィンと違って、僕は完全体のサイバノイドだ。ナノマシンとニアの細胞を培養して造り出された脳核までダミー。本当の僕の細胞は一片さえこの身体には存在しない。

『僕』の身体なのに……

（だからなのかな？ ニアの身体とこの身体を行き来してはいるけれど、未だに思うように扱えないのは……）

普通なら、サイバノイドに換装すれば早い人で数日、遅くても二三週間で自分の身体として扱う事が出来るらしいのに、僕は未だに新しい身体に馴染めずに、ダンベルでリハビリ中だった。

力の加減が上手く出来ない。気を許すとダンベルであろうと飴細工のようにしてしまう。

『元々運動音痴のマックが、その簡単に扱える筈無いよぉ』ってニアは笑うけど、僕の身体はもう無くなっている。今はニアの運動能

力と同じ筈なのにどうしてなのかな。

（何だか情けないよ）

「ニアは？」

エルフィンがダイニングテーブルに買い物袋を置いて、部屋を回る。

「オースティンさんとデート」

開口一番に厭な事を思い出さされて、僕は不機嫌にぶすつとして言った。

ダンベルを握っていた手に無意識に力が籠った。

それは僕の手の中でぐにやりと曲がり、それを見て一瞬エルフィンが退いた。

（ちえっ、またやった……）

僕は頭を乱暴に掻いた。

エルフィンは、僕の失敗を見て見ぬフリをしてくれた。

僕がこの身体に何度も苦勞している事をずっと前から知っているからだ。でも、この彼女の優しさが僕としては逆に重く感じられて本当は厭なんだけどな。

「そう、まあゝた逃げられたのね……」

「え？ 誰が？」

僕の手が止まる。

「アーヴィンよ。ちょっと話があったんだけどね」

エルフィンは軽く頬を膨らませて腕組した。

（何の話かな？）

「……オースティンさんが来るようになってから、ずっと振られっ放しだね？」

僕は視線を逸らせて少し意地悪そうに言った。

「んゝ、そうね。まあ良いか。で？ マックはお留守番なんだ」

エルフィンはふふんと鼻で笑って僕を見た。

「そおゝだよっ！ 文句ある？ 僕、もう一回死にたかないもん！」

（鎌かけたの気付いたのかな？）

「今日は、何で行ったの？」

「HONDAのNS。四〇〇ccのツーストサイクル・レプリカだつてさ。旧世紀の超々骨董品だよ。何だつてあんな野蛮な物に……もつと、安全な物が他に一杯あるじゃない」

僕は不機嫌に言い放った。

リハビリ中で置いてきぼりを喰らったのは本当だし、いつもの事だけど、彼とニアが一緒つてのが気に入らなかった。

尤も、これがニアじゃなくてエルフィンだったらもつと嫌だろうけど。

（そりゃあバイクってカッコ良いし、僕だつて本当は乗ってみたいよ。けど、あのメチャクチャ運転荒いんだもん。一度だけ車に乗せて貰ったけど、怖くて眼を開けていられなかった。あの人の運転するバイクのタンデムシートに乗るだなんてコトは、僕にとっては論外だ）

「ふーん、マツクは興味無いのかな？」

エルフィンが僕の心を読み取ろうとしてぐつと僕に顔を近付けた。悪戯っぽい笑みを湛えて。

心臓が発作を起こしたようにドキリと鳴った。

思わず僕の顎が仰け反り、顔が火照った。

「あ……当たり前だろ？」

完全に見透かされていた。

僕の声が微妙に震える。

「に、してはそのバイクの事をよく知っているのね？ あゝあ、私も一緒に行きかけたかったなあ」

羨ましそうに言つて小首を傾げた。

緩やかにカールした長い金色の髪がさらりと流れる。エルフィンの何でも無い仕草に僕は視線を奪われた。そして、彼女の言つた言葉に我に返る。

「ええゝっ？何でさ。エルフィンもあの人に……？」

取り乱した僕を見て、エルフィン小さく吹き出した。

「なぐんで、嘘。それ、バイクでしょ？ 第一、人のデートに一緒に行ける筈ないわよ。まあ、本当にデート……ならね？」

意味有り気にウインクする。

「ちえ」

僕は彼女に良いようにあしらわれた気がして、赤くなりながらも口を尖らせて腐った。

（あ、そうか。エルフィンも免許習得してたんだ。でも皆、何であの人に優しいんだよ。あの人は……）

「マツク、爪！」

「え？ はっ、はい」

慌てて口元から右手を離した。

僕は無意識に爪を齧っていたんだ。

僕達の言う旧世紀では、車やバイクは人の手で運転していたそう  
だ。

今では車等乗り物には大抵人工知能A・Iが搭載されていて、人はただ行き先を入力すれば自動計算で目的地により速く、より安全に辿り着ける。

何も運転技術なんて全く必要ない。

けど、たまにいるんだよね。

あの人や、ニアみたいなオタク。

旧世紀にも随分居たらしいけど、バーチャル映像じゃなくって、実際に運転テクニクやスピードの体感スリルを愉しんでる人達。手動で自分の思い通りに運転出来るのだから、愉しいだろうかも知れないけれど、本人のちょっとした操作ミスとかで事故や怪我なんて珍しくない。時には死亡事故なんてニュースにも出たりする。それなりに命懸けのリスクは附いて廻る。

だけどそうまでして自分がハンドル握って運転したいものなのかな？

僕には理解出来ないや。

「エルフィン、良いかな？」

オヤジさんが一息入れようとして、庭から戻って来た。  
首にタオルを掛け、その端でしきりに汗を拭っていた。

冷房の効いた室内に入ると、オヤジさんは気持ち良さそうに声をあげる。

久し振りの時間が取れたのに、オヤジさんは今朝からずっと庭木の剪定に汗を流していた。

オヤジさんはあの夜に狙われてからというもの、外出を禁じられているにも関わらずに外へ出る機会が多くなったみたいだ。

勿論軍の関係者らしい人達がオヤジさんを遠巻きに護衛しているのは分っている。

オヤジさんもその事は承知している。

だけど、あの時オヤジさんを付けていたのは、オヤジさんも知っているオースティンさんだった。

なら事情を話して軍の人達に一言言えば良いじゃないか。

(……いや、やっぱり言えないか)

オースティンさん……本名アーヴィン・オースティン。

銀の髪と蒼い瞳を持ち、赤銅色の肌を持つ『グレネイチャ』と呼ばれる人種。

グレネイチャとは、宇宙世紀の初頭に一部のセレブ達の間で流行した奴隷難民達の事だ。

銀髪に蒼い眼を持った、人工的に掛け合わせて創られた亜人間。人間としての権利を求めての長い抗争を経て、やっとその権利を認められたものの、彼等の持つ銀の髪と蒼い眼、そして赤銅色の肌は優性遺伝の為、持て囃された反面忌み嫌われる事となる。

何世代も経った今でも争いを好む野蛮な種族と誤解され、見ず知

らずの他人から時折理不尽な思いをさせられている。

オースティンさんは、固有の種族と認められるに到ったにも関わらず、未だに『グレネイチャ』と呼ばれて、蔑まれている種族の一人だった。

彼は僕が自分の身体を失った時に、僕と一卵性双子であるニアが出会ったフリーの報道カメラマン。

直接彼とは面識が無かったから詳しくは知らないけれど、ニアが死にかけた時に偶然居合わせて助けてくれたそうだ。

自分の仕事の為だとはいえ、危険を犯してまで僕を救いにニアと一緒に来てくれた。

でも、僕の救出には間に合わなかった。

表向きはカメラマンだけれど、彼の銃の扱い方は、素人の僕が見てもチョツと齧ったって感じじゃ無い。

どう見たって熟練されたものだ。

僕が思うに、きっとオースティンさんは何処かのスパイか何かだと思うんだ。

その証拠に、オヤジさんだって彼に一目置いている。

（きっとそうだよ）

オヤジさんは、護衛に来ている軍の人達にはスパイのオースティンさんとオヤジさんが個人的に知り合いだって事がバレちゃいけないから、きつと黙っているんだ。

（それとも別の人に本当に狙われているのかな？）

自宅待機を命じられて幾ら退屈だからって、庭木の剪定なんか業者の人に頼めば良いじゃないか。

（なのに、どうして？）

僕からは、まるでオヤジさんが自分を狙ってくれとでも言っているようにも見えていた。

僕はいつの間にか無心になって親指の爪を齧っていた。

「はい」

エルフィンには慣れたもので、オヤジさんに手早く濃いめの日本茶を淹れた。

僕にはアイスココアを用意してくれる。

暑い時には冷たい物が僕達には良いように思うけど、オヤジさんは決まって熱いお茶を好む。熱い物を飲んだ後の汗が引いていくのが良いんだとか。

僕にはよく解んないけど。

「元気でやつとる様だな。ここの方にはよく来てマックとニアの面倒を見てくれているが、私用時間なのかね？それとも……」

オヤジさんが向かいの一人掛け用ソファに身体を沈めながら、エルフィンを見上げた。

「……の、方です」

彼女はオヤジさんの言葉を受け継ぐ形で答える。

オヤジさんは、やはりなと言った表情で少しだけ顔を曇らせた。

（仕事の話かな？）

僕は席を外そうと、オヤジさんとは逆にソファから腰を浮かせた。

「ああマック、そのままで良い」

オヤジさんは軽く右手を挙げて僕を止めた。

「え？ だって……」

僕はエルフィンを見た。

彼女は黙って軽く顎を引く。

「この前の事もあるからな。いい機会だ。少し事情をマックにも話しておかないと……」

そう言っ、淹れてもらった熱いお茶を啜る。

「この前って、あの晩の？」

「そうだ」

「でも、あれは僕達のカン違いでしょ？ あの時の不審者はオースティンさんだったでしょ？髪を黒く染めていたけど……違うの？」  
オヤジさんとエルフィンはお互いに黙って顔を見合わせた。

二人の様子から、勘違いしているのはどうやら僕とニアだけみたいだと察しがつく。

「わしは本当に狙われている。数日前から尾行されているのに気付いておった」

オヤジさんは静かに僕の言葉を否定した。

僕は神妙な面持ちで眉を寄せる。

「一週間前、ニユースでシュナイダー家の事件があったのを知らないかしら？」

エルフィンは何に知っていなくてもいいのよという目で僕を見るけど、僕だって一日中リハビリしている筈ないじゃないか。ニユースで社会勉強くらいするよ。

「知ってるよ」

僕は、それがどうかしたのと口を尖らせた。

「資産家のシュナイダー氏が、一緒に住んでいた娘夫婦と十歳と七歳になる孫までもが殺されたって言う話でしょ？ 確か、事件当時は金品目当ての強盗殺人かと思われたけど、金品には手出しされてはいなかった。しかも被害者の全員が素手で撲殺された疑いが持たれてる。その劣悪な手段に警察は違法改造されたサイバノイドか、一部の特殊能力を持ったエレメンタルによる怨恨か宗教テログループの犯行だとして捜査してるって。当主のシュナイダー氏は生粋の白人主義者だとか言われていたし……僕が知っているくらいなもの。それが嘘だったとしても、反発する相手は多いと思うよ。宗教だけじゃない。人種差別は相当根深いもの」

現に、ニアから離れて完全換装したサイバノイドの僕は、街中でも幾つかの区域には立ち入ることが出来ない。

『機械化人間お断り』の区域だ。

「確かにな」

オヤジさんは僕の言葉に頷いた。

「彼は白人主義者だったからな」

「からな……って、オヤジさん知っているの？」



「ああ。彼は四年前連邦の監察委員だった一人だよ」

「だったって？ それがどうかし……！」

僕はオヤジさんの言葉で、何となく話が見えてきた様に思えた。オヤジさんも四年前はその中の一人だったんだ。

「今頃になって……」

オヤジさんは溜息混じりに言って肩を落とした。

「部長、どういう事ですか？」

エルフィンがコーヒーを淹れたカップをテーブルに置いて、僕の隣に座る。

軽く僕の身体が彼女の方に傾いた。

彼女の付けている仄かな甘い香水が僕の鼻をくすぐる。

「オースティンが、元軍の人間だという事は二人共知っているな？」

「ぶっ！」

僕は飲みかけのアイスココアを思いつ切り吹いた。

「あつ！ ……もう、何やってるの？」

エルフィンが慌ててタオルを取り出し、僕の口元を拭う。

「何だ、マツクは知らなかったのか？ ニアは知っておったぞ？」

オヤジさんはテーブルに散った僕の吹いた跡を台拭きで丁寧に拭き取りながら、意外だという素振りをした。

「えっ？ そつ、そうなの？」

僕は拍子抜けした。

勝手に彼がスパイで本当はオヤジさんの敵なんだと思っていたから。

エルフィンは僕に黙って頷いた。

「彼を含めて六人居た。存在は決して公にはされなかったが、その六人を四年前、軍は事実上抹殺した……」

わしは個人的に……実は極秘裏に彼等を救い出すよう手を廻していた。上に知られれば極刑を覚悟で……あの後、わしへの報告は手遅れだったとしか受けておらんかった……だが、オースティンは少なくとも生きている。委員会の決議は執行された筈だ。言い換えれ

ば六人全員が生存していてもおかしくは無いとも考えられる。

しかし……あの状況下で我々全員を騙す茶番が可能だったとはどうしても思えんのだ。

わし等は立ち会わなければならなかった……

悪趣味だろう？ 幾らモニタを通してだとは言え、わしはとても直視出来ずにとずっと目を伏せておった。

四年経った今でも……」

そう言つてオヤジさんは言葉を呑んだ。

過去の出来事を思い出して、俯き加減のオヤジさんの眉間に深く皺が寄せられている。

ごくりと僕の喉が鳴った。

無意識のうちに指が口元に近付く。

(え……?)

「ち、ちよつと待つてよ。確か四年前つて……オースティンさん何歳？」

「十五歳。彼が最年少だったそうよ？」

エルフィンが切なそうに言いながら、僕の手を止める。

「あ」

慌てて手を引っ込めた。

彼女の碧い眼に軽く僕は睨まれる。

(……て事は、単純に計算しても、今十九?)

「とても十九歳には見えない。もっと年上かと思った」

どう見たつてあの落ち着きは二十代後半だよ。

本人がここに居たら、僕、ぶっ飛ばされそう。

「十五歳で既に軍の人間? ……つて、それつてもっと年齢が低い時から軍に居たって事? どう言う事? 学校には?」

僕はエルフィンとオヤジさんを交互に見た。二人共僕の視線を避ける様にする。

「彼が既にその年齢で何故軍の人間になっていたかは、直接本人に訊けばよからう。わしの口からは言えん事だしな。尤も、本人も話

してはくれんだろうが……」

その事を言えばオヤジさんの居る軍は認めたことになる。

全てを内密にして来たことを。

「話を元に戻そう。オースティンを含めた六人全員の死亡報告がされた後、委員会は解散。当時の長官も任期を待たずに引退した。わしとロイ、ヨ・ジュンの三人はそれぞれ持ち場を与えられたが、他の者は皆長官に倣<sup>なら</sup>って職を辞した。大半が定年間近を迎えていたからな」

そう言つて、もう一度湯飲みに手を伸ばす。

「でも、アーヴィン・オースティンは生きていた」

エルフィンがオヤジさんの後を続ける。

「そうだ。わしが極秘裏に指示を出していた部下の一人が勝手に手を廻していた。オースティンが生きていたとわしが報告を受け、上に発覚すればわしが一切の責を負う心算だと……」

別に彼等を助けてどうこうする心算は全く無かった。わしはただ彼等が助かれればそれでよかったのだ。何処かで生きてさえいてくれれば……

だが、実際に事はそれだけでは済まされない。当時のわしはそこまで思慮が及ばなかった」

「じれったいんだけど。それって、オヤジさんを狙ってる人達はひよつとして？」

僕の問い掛けにオヤジさんは黙って頷いた。

「薄々気にはなっていたのだが、ここ数年、とりわけこの数ヶ月に不可解な殺人が頻繁に起こっている。その中に紛れるようにしてリストに元委員会の連中の名前が挙がっていた。

偶然かとも考えられたが、今回のシュナイダーの件とわしの件ではつきりした。

多数の殺人は偽装か模倣犯による可能性が高いと考えられる。事実、何人もの実行犯を検挙したが、同一手口の事件は未だに続いている。真犯人が捕まっていない証拠だ。彼等は生きていて、わし等

に復讐している。

オースティンとて同じだ。当事者の一人だったのだから。わしに復讐するともおかしくはあるまい？ あの晩、マック達が居なかったら、わしは確実に仕留められていたのかも知れん」

「部長を狙っていたのに、ニアやマックが居たので出来なかった……と？」

エルフィンがすんなりとした細い脚を組み直して、オヤジさんの後を引き継いだ。

「かも知れんな」

（そうなのかな……僕達、何も役に立たなかったと思っていた。二人共、オースティンさんにあつという間にやつつけられちゃって、カッコ悪いとさえ思っていたのに）

僕は自分の不甲斐無さを反省して落ち込んでいたけど、オヤジさんにそう言って貰えてチョットだけ心が晴れて嬉しくなった。

「あの……待って下さい」

掌で包むように持っていたカップに視線を落し、考え込んでいたエルフィンが面を上げた。

「確かその委員会での決議は全員一致が原則になっている筈です。部長は委員会の決議に最後まで支持しなかったと私は窺っています。なのに何故可決されてしまったのですか？ それに、何故彼等が部長まで狙うのかが納得出来ません」

「わしは……」

オヤジさんは一呼吸於いた。

「わしは最後まで首を縦に振る心算はなかった」

「？ なかったって……？」

「その心算だった。彼等を信じていたかった……」

自然、声が小さくなり今にも消えそうだった。

（じゃあ、結局はその委員会に賛成しちゃったんだ）

「……何かあったのですね？」

オヤジさんは口を噤んでしまった。膝の上で両手を組み合わせて

顔を伏せる。その両手が小刻みに震えていた。今まで見たことも無かったオヤジさんの苦悩する姿に、僕は無条件で同情した。きつと何か訳があったんだ。

「部長」

「もう止めてよ」

詰め寄るエルフィン。僕は咎めた。

「何かあった。で、オヤジさんはこうして狙われた。で、いいじゃない。何も本人が思い出して言いたくない事を聞き出す必要が……」

「マックには無くても私にはあるの。残念だけど、命令なのよ」

言いかけた言葉をたたみ返された。彼女の事務的な口調にも力チンと癪に障る。

「そんな命令断っちゃえば良いんだ!」

僕は彼女に食って掛かった。

「何いい加減な事言ってるのよ? 私は仕事で来ているの。マックには解らないでしょうけれどね」

いつもより彼女が苛々しているのが伝わって来る。

「へえ〜ご立派な仕事だね? 例え身内に等しいくらい近い存在でも、疑わなくっちゃいけないだなんて」

僕は皮肉一杯に言ってやった。

でも、エルフィンだって辛い立場なんだろうな。彼女が声を荒らげる事なんか滅多に無いもの。僕だって何となく彼女の気持ち解る気がする。彼女の真一文字に引き結ばれた口元が僕にこれ以上何も言つなと語り掛けていた。

「部長の為でもあるのよ! 私だって好き好んでこんな……」

「止めんか」

オヤジさんは弱々しく言って面を上げた。

「このままわしが口を噤んでしまつては行くまいて……エルフィン、君は何処まで知っている?」

「私は……」

言い掛けて黙り込んだ。

僕は黙って二人の遣り取りを聞いていた。無意識にストローの端を噛む。

「その様子だと、知っているな？」

「本当なのですか？ 彼等の事と、奥様と娘さんの事で何か関係があるのでしょうか？」

僕には、縋るような彼女の碧い瞳が「そうであって欲しくは無い……」と、語っていた様に見えた。そして彼女は今にも泣き出しそうな顔になる。

「離婚されたそうですが…… 申し訳ありません。先に謝らせて下さい。別居されたお二人の消息を我々は未だに見失っております。私自身、勝手に搜索させて戴きましたが……」

「見付からなかった。そうだな？」

エルフィンがこくりと頷く。

オヤジさんは全て解つていると言いたげだった。

「見付かる筈はあるまい。彼女達はもう生きてはおらんよ…… 四年前に彼等に殺害された。わしが呼び出されて留守をしている間に」

「…… 何ですって？」

エルフィンが唸るように言った。

「何者かが仕組んだ罠だった。わしは彼等と呼んではおらん。そして、誰もわしを呼び出してはいなかったのだ」

「……」

ストローを所在無く噛んでいた僕は、そのまま動けなくなった。

## 第2話 疑惑

どれくらい走っただろう？

ニアはアーヴィンのバイクに乘せられて自然公園へと向かった。  
た。

幾度と無く風を切ってカーブを曲がり、林のトンネルを潜って行く。

（ああ、コレって本当のデートなのよね？ 今度こそ本当の……）

ニアはアーヴィンの後ろでしつかりと抱きついていて。

初めてニアが彼に呼び出されたのは、護身術の習得だった。

あれから一週間、昨日一通り終了したと彼に告げられていた。

（終わっても会いに来てくれるんだモノ。これって絶対だよ。それとも何かご褒美かなあ？）

ニアは邪な妄想に胸をときめかせていた。

不意に視界が開けた。

アーヴィンはそこでバイクを停める。

道路脇にあった自販機でジュースを買い、一本をニアに放ってよこす。

ニアは軽くジャンプして難なくキャッチした。

「えへ」

ニアは嬉しそうにアーヴィンの傍に、まるで猫の様に擦り寄って座った。

エルフィンが愛用しているのとは違う甘い香水が仄かに香る。

アーヴィンはニアが妙な誤解をしていることを覺り、退いてしまった。

身体も態と座っていた位置をずらせる。

「……お前、何か勘違いしてないか？」

「何が？」

キョトンとして切り替えます。

「いや、その、まさかとは思うけど……」

言い掛けて口籠くちもった。

日焼けをした様な赤銅色の肌をしているので定かでは無かったが、  
気持ち頬が赤くなっている。

「……何でも無い」

軽く咳払いをする。

「変なの？」

「変って、そりやお前の方じゃないか」

「へ？」

「何が「へ？」だよ。第一、女の子が「へ？」なんて言うか？ 普通……」

ニアの反応にアーヴィンは呆あきれた。

気を取り直して、アーヴィンは銃を取り出す。

そして、飲み終わったジュースの缶を空高く放り上げた。

狙いを定めて、立て続けに引金を引いた。

空中で缶は何度も弾かれる。静かだった山間に銃声が響き渡り、

野鳥達が慌てて逃げ惑った。

ニアは周囲に木霊こだまする銃声に耳を塞ぎながら、自分の思惑おもわくが見事に外れていた事を知って涙ぐむ。

「はああ？ 今日ほまさかとは思うけど……銃？」

（どおしてえ？ 今日こそデートじゃなかったのお？ ふえ〜ん）

「遣やってみる」

アーヴィンは新しい弾倉を交換すると、ニアに差し出した。

「嫌きらッ！」

ニアは膨ふくれて、ぷいとそっぽを向く。

「一般市民のニアをどうしようって言うのよ？ ここんとこ毎日呼び出して……」



ほんの少しだけ涙ぐんだ。

事実、ニアが学校から帰宅すると、アーヴィンが決まって門の所で待っていた。

ニアは素直に喜んだが、マックはストーカーだと言って嫌ったのも無理は無い。

「一般市民？　おいおい、お前、本当にそう思っているのか？」  
呆れた表情でニアを見詰めた。

しかし、これでは自分がニアに頼み事をするのには好ましい状況では無いと判断する。

（勘違いされても仕方が無い……　ってか？　それもまたミヨーナ方の勘違い）

アーヴィンは軽く溜息を吐いて肩を落とした。

「んね、このバイク乗っても良い？」

「はあ？」

ニアの立ち直りの早さに閉口する。

「……構わないが、後で俺の注文も聞いてくれよ？」

「はあゝい！」

ニアは機嫌を取り戻すと、すらりとした足を伸ばしてバイクに跨またがった。ギアをニュートラルに落してキーを廻す。

（……暢気なヤツ）

無邪気にバイクに乗って喜んでいるニアを暫らくアーヴィンは見詰めた。

既にニアは基本操作を完璧にマスターしている。

免許こそ習得していないが、ここだけの走行なら問題は無い。

風と一体になり、三つ編みにした髪を靡なびかせて走る姿に視線を奪われた。

（……綺麗だ）

素直に思った。

（問題はニアの外見と実年齢なんだよな？）

初めて知り合った半月以上も前、ニアの足はバイクから地面に届

かないほどの小さな身体だった。

訳あって、あつという間に外見だけが申し分なく立派に成長してしまった。

見掛けは十七、八歳だが、実際のニアの年齢はまだ十二歳。

ニアが幼く見えるのはその為だった。

（成長し過ぎだったの）

「……」

自分の視線が無意識にニアの曲線を追い掛けている事に気が付いて赤面した。

（なっ、何を考えているんだ。俺は……）

気持ちを切り替えようとして乱暴に頭を振り、手にしていた拳銃に視線を落す。

現在では本人の実力さえあれば満十五歳で車や飛行機等、あらゆる免許が取得可能だ。

しかし、銃剣等の所持は法律上禁止されている為、銃剣等に関してのみ規定年齢は設定されていない。言い換えれば、簡単な偽装さえすれば子供でも所持可能なのだ。

自分がニアに遣っている事は彼女に違法行為をさせ、自分の補佐として彼女を利用する事だった。

けれど、良心の呵責に責められている状況ではない。

そして時間も無かった。

あの月夜の日 Nia 達と出逢っていても、三島の置かれている状況さえ無ければ、そのまま何処かへ消えて二度と彼女達の目の前には現れない心算でいた。

先日起きたシュナイダー元監察委員一家惨殺事件の犯人と自分には深い繋がりがあると彼は睨んでいた。シュナイダーは四年前にアーヴィン達の抹殺指令を下した件に關与している九人の中の一人だったからだ。

この数ヶ月、失踪、変死、事故等で死亡した警察のリストに紛れ

るようにして九人の委員の内七人の名前が挙がっていた。

現時点での生存が確認出来ているのは、元監察委員長のラダー氏と三島の二人だけだ。

犯人の目的が復讐であるとするれば、委員長が真つ先に手を掛けられそうなのだが、委員長のラダー氏は三年前から認知症になっており、何度かのサイバー処置が行われたが既に末期症状になっている。

ラダー氏の状態から復讐に値しないと見なされているのだろうか。そう考えると、残っているのは三島だけになる。

自分とエルフィンだけで三島を護り切る事が出来るかどうか自信が無かった。

その為にはニアの協力がどうしても必要だった。

「教える」と言っても、重要なポイントとなるコツさえ教えていれば、後は実際に彼女の目の前で自分が実演して見せるだけで良かった。

ニアは黙ってアーヴィンの動きを見ているだけなのに、忠実に真似することが出来るのだ。けたはず 桁外れた反射神経から由来する適性なのだろうか。

或いはこれがニアの才能なのかも知れない。

三島の養子としてのニアが高度な戦闘能力を所有すれば、三島の護衛にこれ以上心強い人物は居ない。

しかし、それは同時にニアを危険な目に遭わせる事に他ならなかった。

しかも彼女が無事に三島を護衛する務めを果たしたその後も問題は山積する事になる。

軍や他の組織といった機関がニアの存在に眼を閉じてくれる様な所では無いからだ。

（俺はあの時、ニアを俺達の後任にするなと三島さんに食って掛かった。「しない」と言わなかった三島さんを俺は許せなかった。同じ過ちを繰り返しそうで……けど、今は俺自身がニアをそうしよう

としている。三島さんを助けたいが為に俺はニアを犠牲にしている。  
理由はともあれ、遣っている事は同じだ……）  
罪悪感に囚われる

アーヴィンはぐっすりと眠ってしまったニアを抱きかかえて戻って来た。

「わ？ どうしたの？」

玄関先に迎えに来た僕とオヤジさんは目を丸くして立ち尽くした。  
眠っているニアは土埃ちちほこりで真っ白だ。

「バイクで何度か転んだんです」

「怪我は？」

オヤジさんが心配そうにニアの寝顔を覗のぞき込む。

「ありません」

（あの四〇〇ccに乗って転んだのか？ よく怪我しなかったよな？）

僕はオースティンさんからニアを受け取ると、慌てて奥へと消えて行った。

オヤジさんも一緒に付き添ってくれる。

マック達の後姿を見送りながら、エルフィンがリビングのドアからするりと出て来た。

「アーヴィン、どういう心算？」

意味ありげな上目遣いつわめつかで彼を睨み付ける。

「ニアをあんな目に遭わせて」

アーヴィンは彼女の刺すような視線に、気不味そそうに眼を逸そらせた。

「ニアが望んでバイクに乗った様には到底思えないわ」

「いや、勝手に自分から乗った。公道では走行させていないし、別に問題は無い」

意外な返答にエルフィンは面喰めんくらってしまふ。

「そ、そう。でも、銃を教える必要は無いと思うのだけど？」

二人から微かに硝煙の臭いが残っている。

「必要だからこそ教えた」

「それもニアが教えてと言った？」

「嫌がっていたな……確かに」

アーヴィンは一呼吸措いて認めた。

「だから、ニアが欲しがっていたものを遣った……取引は嫌だが仕方が無い」

「えっ？ ……そっ、そう」

エルフィンは何を勘違いしたのか、少し頬を赤らめた。

アーヴィンは、それがどうかしたのかという目で彼女を見る。  
が、すぐに彼女の言わんとした事を察した。

「自分がそうだからと言って、俺までも一緒にするな」

アーヴィンは軽蔑した様な視線を彼女に送って、軽く鼻で笑った。

（何ですって？）

エルフィンはかっとなり、激しい瞳でアーヴィンを睨み付けた。

整った彼女の顔がゾツとするほど妖しく、美しく見える。

「ニア、綺麗になったでしょ？」

「君が化粧を教えたのか？」

「彼女が教えてと言って来たのよ。アレくらい、今時の小学生だって遣っているわ」

「余計な事を……」

アーヴィンは肩を竦めて子馬鹿にした様にせせら笑う。

「余計？ 女にとっては必要なのよ」

「女を武器にする君なら必要だろうな？」

「何とでも言いなさいよ！」

（何も知らない癖に！）

表情が険しくなる。

「外見よりも、先ずは内面から磨く事だな？」

アーヴィンは真顔に戻り、彼女の気を一瞬で殺ぐ程の眼で睨み返

した。

エルフィンが怯む<sup>ひる</sup>。

「失礼ね！ あ、貴方なんかに言われたくはないわ！」

（安っぽい女だなんて思われたくない。でも……）

エルフィンは気を取り直して、彼の視線に呑まれないよう態と強い口調で切り出した。

「昨日もその前もそう。貴方、ニアに何をしてい……！」

最後まで言わせて貰えなかった。

いきなり身体を背後のドアに押し付けられ、エルフィンが小さく叫ぶ。

「やけに絡むな？ 誘っているのか？ 俺を。汚いグレネイチャでも、任務とあれば已む無しか？」

息を呑んだエルフィンの碧い瞳が一瞬大きく見開かれる。

「当りか……ん？」

右の視界が一瞬乱れた。アーヴィンの右眼は義眼だ。

「ちよつと！ 止め……」

「しッ！」

アーヴィンはエルフィンを押え付けたまま、視線を左右に走らせる。

「相手を間違っているわ！ ニアの替わりは御免だわ」

そう言って右手で彼の首を捉えた。ぐつと指先に力が籠る。彼女の両の手足はサイバー化されている造り物だ。

「ニアの……替わり？ 何を言っている？」

「このまま貴方の首を折る事だって出来るのよ？」

頬は紅潮していたが、彼女の碧い眼は醒めていた。気道を強く掴まれ、思わず呻き声が漏れる。

「離して」

エルフィンの声は冷静だった。しかし、アーヴィンは猶も彼女から離れようとはしない。それどころか、余計に密着して来る。彼の体温が伝わるくらいに。

俯いたアーヴィンの顔が目の前にあった。

唇が触れそうな程に接近している。

「嫌！」

取り乱したエルフィンには顔を背けた。鼓動が早い。

「盗聴か盗撮されている」

取り乱したエルフィンの耳元で囁いた。

「え？」

アーヴィンから逃れようともがいていたエルフィンの動きが止まる。

「解るんだ。右目が微かな周波に反応するから」

エルフィンは振り仰いでアーヴィンの眼を見た。

彼との視線が、ほんの十センチと離れていない事に気付いて鼓動が猶も速まる。

（……義眼？）

左右の色も光の反射具合も微妙に違う。

一気に腕の力が萎えた。

反対に一層顔が赤くなる。

アーヴィンは黙って彼女の手を首から解き、視線をエルフィンの左腕に落とした。

右目の映像の乱れが著しくなる。

「これか？」

彼女の左手首を取った。

「うわっ？ オ、オ、オースティンさん！ なっ！ な、な、何遣ってるの！」

僕が戻って来た時、二人は僕が誤解しても仕方な無いくらいに密接していた。

「……そんなに笑うこと無いじゃない」

僕はぶすつとして言った。

オースティンさんはソファに身体を預けてリラックスしたまま、肩を揺らしていた。

涙眼になって必死に吹き出すのを堪えている。

でも、僕にとつてはあからさまに笑われているのと同じ事だった。エルフィンはあるから真っ赤になったまま、キッチンの奥に引込んで出て来ない。

僕からオースティンさんとの関係を誤解されたからだと思う。テーブルの上には、エルフィンの腕から取り出した盗聴器があった。

既に原型を留めない程に分解されて、その機能は果せなくなっている。

ニアを部屋に送る途中、部署から携帯で呼び出されたオヤジさんが用を済ませて戻って来た。

オースティンさんは視線をテーブルの上に落としてオヤジさんにそれと無く伝える。

「盗聴器か？」

オヤジさんの問い掛けにオースティンさんが真顔で頷いた。

「エルフィンの腕に組み込まれていました」

「どういう事だ？ エルフィンを監視しているとでも……」

「と言うより、三島さんの監視目的に思えますが？ ……心当たりは？」

「……いや」

オヤジさんはやや間があってから答えた。

「使用されていたサーバーは全くの民間企業経由ですが複数の偽装が認められました。これに使用されていたパスワードは軍が使用していた旧コードです。本体も市販のパーツの寄せ集めでしたが、こちらからは足取りは掴めませんでした」

「うむ……」

オヤジさんは唸った。



「先週、彼女はメンテナンスを受けたそうです。多分、其の時に……」

オヤジさんはオースティンさんの話に耳を傾けながらも、険しい表情で分解された盗聴器を見詰めていた。

「これで全てがバレてしまいましたね……自分の事も恐らく……ただ、自分の事を知っている人間が極僅かごくわずですから時間稼ぎにはなりますが……」

オースティンさんは何だか苛立ちを募らせている様に見えた。

僕は二人の会話を漠然と聞き流しながら、オヤジさんとの昼間の話を思い出していた。

不思議だった。

オヤジさんの目の前にオースティンさんが居る

（どうして二人共平気なの？ 普通じゃないよ。オヤジさん、彼をもう許してるの？ 家族が殺されてるのに、何でそう自然に、何も無かったように彼と話せるの？ 僕なら絶対に許せない。オースティンさんだって……おかしいよ。こんなの）

僕は勝手に思い込んで嫌な気分になった。

「？ どうした？」

急に立ち上がった僕に気付いて、オースティンさんが声を掛ける。

「別に。な……何でもありませんよ」

僕の声には怒気が含まれていた。

ダメだ。感情が表に出る。

「宿題を思い出ただけです」

慌てて言い訳を付足したが少し態とらしかった。

（バレちゃったかな……？）

僕は二階の自室へと引っ込んだ。

「マック、入るぞ？」

ドアが開き、オースティンさんが入って来た。

「なっ、何ですか？ まだ僕に用？」

爪を噛みながら机に向かっていた僕は、慌てて目の前にあった3D写真を閉じて、引き出しに隠した。

オースティンさんは目敏くそれを見つけて取り上げる。

「うわ、止めてくださいよ！ 勝手に見ないで！」

慌てて取り戻そうとして、聴いていたプレーヤーのイヤフォンを引っ張って立ち上がった。勢いよく椅子がひっくり返る。

僕はオースティンさんに掴み掛かったけど、その手をすっとかわされた。

勢いで顔から無様にベッドへダイブする。

3 Dには、エルフィンに良く似た女の子が映し出されている。

彼はふふんと鼻で笑った。

その態度に僕は神経を逆撫でされてムツとなる。

「へえ、彼女のファンなのか？ それとも……」

「見るなって、言ったのに！」

僕は真っ赤になって彼に跳び掛かった。

サイバノイドに換装していることさえ忘れて。

「わ？」

彼の長身が押し倒される。

「もう！ 勝手に……だから僕は貴方が嫌いなんだ！」

（何て意地悪で図々しいんだよ！）

僕は彼に馬乗りになって乱暴に写真を奪い取った。

「悪かったって。怒るなよ」

そう言っている目が笑っている。僕は更に馬鹿にされた様な気分になる。

「良い眼をしているな？」

「誰がです？」

僕は憤りを覚えながらも自分の耳を疑った。

「マックが……さ」

「はあ？」

「そのモデル、確か数年前に事故死したって事になっている」

「ええ、ティファ・フィニ……え？ なっている？ なっているって今言いましたよね？」

（生きているの？）

「？ 何だ？ 知らなかったのか？ 褒めて損したな。鈍いなお前、まだ気付いていないのか？」

そう言っつて、オースティンさんは僕の額を指先で弾いた。

「痛ッ！ 何？ 何で？」

僕の頭の中で疑問符が乱舞している。

「馬鹿鹿。謝り序でに教えてやるよ。ティファ・フィニはエルフィン本人だ」

「ええっ？」

心臓がドキドキした。

「オ、オースティンさん僕に嘔吐（おうと）しているでしょ？ そんな幼稚な冗談（じやうたん）に引（ひ）つ掛（か）る程僕は間抜け（まなけ）じゃ無いですよ」

手放（てはな）して悦（よろこ）びたいのをぐっと堪（こ）える。

（きつと、嘘（うそ）に違（ちが）いないんだ。僕の事を揶揄（からか）って面白がる心算（しんさん）なんだ）

「……あのな。一応、俺はマスコミ関係者（かんけいしや）だぞ？ 誰（たれ）が幼稚（ちゆうい）な嘔（おう）吐（と）くつて？」

オースティンさんは呆（だ）れた様に僕を見上げた。

そして急に真顔（まへん）になる。

「人を疑（う）うなどとは言（い）わないが、今のはマズイぞ」

（……叱（ち）られた）

気（き）不（ふ）味（み）くなつて視線（しせん）を逸（よ）らせる。

確かに、初めてエルフィンと出会（あ）った時もティファにそっくりだと思（おも）つたし、シヨップでこれを見（み）付（つ）けた時も彼女（かのじよ）に良く似（に）ているなとは思（おも）つてた。

あまりモノを買（か）わない僕（ぼく）が迷（まよ）うこと無く手（て）に入（い）れた。

でも、彼女はデビュ（デビュ）ー後（ご）僅（わずか）か半年（はんねん）足（た）らずで事故（じこ）に遭（あ）つたって……

「ある事件に巻き込まれて業界に居られなくなった。知らなかった方が良かったか？」

「えっ？　そ、そんな事は……」

（本当の事なんだ）

妙に顔が緩<sup>ゆる</sup>んで来るのが自分でも解かる。

「……！」

オースティンさんと目が合った。

彼はさっきとは打って変わって、意地悪そうにニヤニヤしながら僕の表情を見上げている。

（ばれちゃった。僕がエルフィンの事好きだった）

途端に顔から火が出るくらいに猛烈に恥ずかしくなった。

「もぉ……は、はぐらかさないで下さいよ。何の用ですか？　僕は貴方と話す事なんて無いし、ここにニアは居ませんよ？」

「また、「ニア」か。皆どうしてニアと俺をセットで考えるんだ？」

彼はウンザリといった表情をする。

「貴方自身がそうしているんじゃないませんか」

（誤解される様な事を）

僕はオースティンさんの身体から退いた。

彼はゆっくりと起き上がる。

「そう突っ掛かるなよ。まだエルフィンの事で怒っているのか？」

（気安く呼ぶな！）

彼女の名前を口にされて、何故だか頭に来る。

下降しかけていた怒りのテンションが、再びぐっと上がった。

「別に……用が無いなら出てって下さいよ。明日学校で模擬試験があるのに」

僕は乱暴に彼の背中を押して、部屋から追い出そうとした。

「ちよっと待った！　まだ用は済んでないぞ？」

彼は僕の力に抗った。

けど、僕の力に全く歯が立たない。

僕よりもずっと身体が大きいのに不思議だった。生身の人間って

こんなにも弱かったの？

「だから、何ですか？」

僕は面倒臭そうな聞き方をして、押していた手を離した。

「マツクはその……」

少し迷っている様な素振りで見線を僕から逸らせた。

「その、今はサイバノイドに換装しているが、もう、ニアの中には戻らないのか？」

「？　どういう意味で言ってるんです？」

「確かお前は換装していない時、ニアの虚像を使っていたよな？」

「……そうすけど？」

僕はニアが鏡とかガラスに映った姿を借りて、ニアの中から出て来る特殊な能力を備えている。だから本当の自分の身体を失ってもこつして存在することが可能なんだ。

「その時のお前の運動能力は、彼女に準じているのか？」

「ええ。実像はニア自身ですから……それがどうかしたんですか？」

「詰り<sup>つま</sup>は、ニアが二人になる訳か」

彼の表情が明るくなった。

勝手に何か解釈して納得している。

「けど、今ここでニアの虚像になれって言われても出来ませんからね」

「どうして？」

「ニアが眠っちゃったからですよ！　僕だっずっとサイバノイドのままじゃ居られないのに！」

いつもよりニアから離れている時間が長い。疲れて来ているのか、手足が重く感じられて辛い。

彼は首を傾げて僕に視線で問い掛けた。

「僕を受け入れてくれるニアの意識がないと、僕はニアの中には戻れないんです！　解って頂けたでしょうか？」

僕は苛々して言い放った。

「そうか」

「じゃあ、今度は僕に答えて下さい。さっきニアが二人って言いましたよね？」

「あ？ ああ」

オースティンさんは、僕とニアの二人で協力してオヤジさんを護ってくれと言った。

またさっきの不快感に包まれる。

彼がこのオヤジさんの家に居るって事だけで何だか気に入らないのに、どうして僕が彼の頼み事まで聞かなきゃいけないんだ？

「冗談じゃありませんよ！」

僕はきっぱりと言い返した。

「そんな危ない事、元だか何だか知らないけれど、プロの貴方がすればいいでしょ？ どうして素人の僕達が協力しないといけないんです？ 警察か軍に頼んでも良い。方法は幾らでもあるでしょう？ 現にオヤジさんにはもう軍の護衛の人達が付いているんだ。必要無いじゃないですか」

「……それが出来れば苦労はしない。今の所、犯行声明も脅迫されたとという物的証拠も残ってはいないからな。軍の護衛も先程解除された。俺が自由に身動き出来たのはここまでだ」

「じゃ、じゃあ……」

僕の顔色がたちまち悪くなった。

「俺だったら、三島さんを襲うならこれからだな」

オースティンさんは平然と言い放った。

「そんな……」

僕はぐくりと喉を鳴らした。

でもこれで彼がオヤジさんを護ってくれる側なのだと確信した。

「で、でも、それでも何とか出来る筈だ。前の事だっけそうだ。ニアにバイクや銃まで教えて。僕は静かに生活したいだけなんです。もう危険な事は嫌だ。嫌なんだ」

部屋の照明が僕の「気」に反応して勝手に光度を上げたり落したりを繰り返した。

僕はオースティンさんから眼を逸らす。

臆病な僕は、膝がガクガクして震えが止まらない。

「も、もうニアに近付かないで下さい……お願いですから」

（言ったあ！ やつと言えた。怖くてずっと言えなかったのに、やつと言えた）

でも、それは僕が成長して言えたんじゃない。

このサイバノイドの身体があつたからこそだ。

「……すまない。こつちにも事情がある。残念だがその頼みは聞けないな」

彼は肩を落として気の毒そうに僕を見た。

「あの、言い忘れてましたけど、別に貴方がグレネイチャだから言っているんじゃないからね？」

「おい、取って付けたような言い方するなよ」

彼の表情が少し緩んで苦笑した様に見えた。

（あれ？ 気にしていたのかな？）

「だって僕、外見で人を差別する心算はありませんから」

僕は口を尖らせた。

「きちんと言っておかないと誤解されたら気分悪いし……」

「でも協力は出来ない？」

「当然でしょ？ 今更何を言って……うわっ？」

突然僕の部屋の真下で何かが爆発し、家が激しく揺れた。

僕は立っているのがやつとだった。

下腹に響くような音と、ガラスが粉々に碎ける音。そして一階の窓から、真っ黒い黒煙と火の粉が勢い良く噴き出すのが見えた。

僕は動けなくなつてその場に立ち尽くしたけれど、オースティンさんは違つていた。

彼はもう僕の部屋から飛び出している。

連射式の大きな銃声がした。

「なっ……？」

銃弾が目の中の壁を貫通し、僕の身体を撃ち抜いた。

僕は弾の威力で身体ごと持って行かれる。

左肩と右脇腹に銃弾を受け、真っ赤な疑似体液が音を立てて勢いよく噴き出した。

僕のサイバノイドの身体は頑丈だけれど、可能な限り生身の人間に近い様造られている。

皮膚構造のデリケートさったら無い。

でも、今の僕にはこれが仇<sup>あた</sup>となった。しっかり痛覚も兼ね備えているのも。

気が遠くなりそう。

（ニア！）

僕は彼女を呼んだ。

きつとこの騒ぎで起きている筈だ。

「三島さん！」

廊下でオヤジさんと呼ぶ、切迫したオースティンさんの叫び声が聞こえた。



### 第3話 誤解

壁越しで感熱センサーが使えないにも関わらず、アーヴィンは隣の客室からマシンガンで狙われた。

銃弾が階下へ急ぐアーヴィンを狙う。

兆弾が火花と白煙を撒き散らせて彼を執拗に追った。

何処かに誘導されているようにも思える。

「？」

唐突に銃撃が収まった。

次の瞬間、目が眩む程の大量のエネルギー弾が足元の床を穿った。

アーヴィンは反射的に身体を投げ出して事無きを得た。

階下からも狙われている。

獲物を外したエネルギー弾は天井を貫き、床と天井には三十センチ程の穴が開いた。

隠し持っていた銃で、穿たれた穴から微かに感じられる気配に向かつて二、三発砲したが、相手も既に此方の動きを察している。

再度発砲して牽制しながら突っ切った。

（こいつ等……この前の！）

黒煙に撒かれながら、一気に階段の踊り場まで跳躍した。

が、着地と同時に別の角度から狙われ、瞬時に身体を伏せた。

踊り場の花瓶が砕ける。

アーヴィンは素早く両腕で顔をガードするが、花瓶から飛び散つ

た破片と水のような液体を頭から被った。

慌てて片手で顔を拭い、思わず嘔吐せ返る。

水だと思った物に刺すような臭いがした。

揮発性の引火物だ。

銃が使えない。

アーヴィンは舌打ちすると、左足膝下に隠していたサバイバルナイフを手にした。

至近戦に持ち込まなければ、ナイフでは到底太刀打ち出来無いのは百も承知だ。

火の手が上がった一階は黒煙で視界が利かなかった。  
発火した家屋が轟音を上げて燃え上がる。

「う……！」

一瞬、自分が巻き込まれた劫火じゅうかの記憶が過よぎった。

時間が遡さかのぼり、四年前の炎に包まれた自分がそこに居る錯覚さくかくを起こして立ち竦すくむ。

（何をやっている！ 動け！）

もう一人の自分が、怯ひるんで身動き出来なくなった自分を一喝する。  
近くで銃声が何度も聞え、エルフィンエルフィンの悲鳴と被かぶった。

はっとして、炎の呪縛から解放される。

「三島さん！ エルフィン！」

（応えてくれ！）

アーヴィンは声を限りに叫んだ。

遠くで緊急車両のサイレンが聞こえた。

オヤジさんは直ちに救急病院の集中治療室へと運ばれた。

幸運にも弾は全てが急所を外れていたけれど、多量の出血で緊急を要していた。

僕達はオヤジさんが運ばれた集中治療室を見下ろせるブースに居た。

よく研修の為に利用される所らしい。オースティンさんが病院の人と話をつけてくれて特別に入室許可が下りたんだ。

でも、そこにニアの姿は無かった。

「俺からは誰も確認出来なかった。エルフィン、君は？」

僕はオースティンさんに傷を診て貰っていた。

この病院は人間の治療のみで、サイバノイドの身体を診てくれる設備が無い。

以前の身体があった僕とは違って、普段病院のお世話にならなくなっていたから気が付かなかったけれど、この病院と同じようにサイバノイドを診てくれる所は意外と少ない事をこの時に知った。

脇腹の模造皮膚もぞうから乱暴にコードを引っ張り出される。

生身の身体なら、血管が神経に該当するのだろうか。痛覚は頸椎けいついにあるスイッチを切られていたから痛くはないけれど、何だか気持ち悪い。

で、少し身体を拭ぬぐった。

「こら、じつとしている」

「だって……」

「これ位ならすぐに済む。でも、後でちゃんと診て貰えよ？ 俺が出来るのは応急処置だけだ」

彼は電磁メスを工具箱から取り出した。

スイッチを入れると先端が青白く光り、それを僕の傷口の奥に入れる。

「うわ、うわ！」

火花が散り、僕の身体が不自然に痙攣けいれんした。

「我慢しろ、男の子だろ？」

「チョツとびつくりしただけです。こんな時に男も女も無いでしょ？」

小さい子供をあやすような彼の口振りに、僕はムツとして生意気にも口応くちうえする。

「……そうだったな」

オースティンさんはそう言って表情を和らげた。

でも、僕は何故だか彼に素直になれない。

ふと見上げて、エルフィンと眼が合ったような気がして慌てて顔を逸らした。

心臓がドキドキする。

オースティンさんから彼女の事を聞いてしまってから、僕は彼女を直視出来なくなっていた。

でも、やっぱりエルフィンの視線が気になって僕はもう一度彼女を盗み見る。

エルフィンはじつとオースティンさんの顔ばかり見詰めていた。

（何だ……見ていたのは僕じゃなかったのか）

がっかりした。僕は彼女の視線が気になったけれど、オースティンさんに僕の気持ちがばれているから猶更だ。なおさら

「エルフィン、どうした？」

オースティンさんは手を動かしながらも、彼女の視線にずっと気が付いていたみたいだった。僕の事を知っている筈なのに何も無かった様に振舞っている。

（てつきり、冷やかされると思ってた）

僕の治療が一区切り着くと、手を休めて面を上げる。

「……顎あごに大きな傷のあるサイバノイドの大男。私と同じ歳位のグレネイチヤの少年もいたわ。あと外で二、三人の気配……それから

……」

彼女は答えるのを躊躇ためらった。

「それから？」

彼は手を止めてエルフィンを見上げ、促す様に言った。

蒼い眼が彼女を映し出す。

（何なんだよ？ この空気は！）

息が詰まりそうだ。何だか僕は居辛くなった。

「四年前の、少なくともそれ以前の……アーヴィン・オースティンが居たわ」

「何だつて？」

「黙ってる！」

聞き返した僕の言葉を彼は一喝して遮さえぎった。

当の本人には既に見当が付いていたみたいだった。

少しも動揺していない。

「駄目ね。当たり前だけど、私ではとても太刀打ち出来なかったわ。怖くて動けなかった……悔しいわ」

エルフィンの碧い瞳から大粒の涙が毀れた。

彼女も全身の数箇所<sup>ところ</sup>に傷を負い、サイバー化していた右腕を固定されていた。それでも、あの状態で懸命にオヤジさんを護衛していたのが窺える。

よくサイバノイドを相手に助かったよ。

オヤジさんが命を落とさなかっただけでも彼女に感謝するべきだ。  
「エルフィンのせいじゃない。相手が悪かったただけ……」

オースティンさんは大きなリバテープを僕に無造作に貼り付けて立ち上がった。

僕が小さく呻く。

「自分を責めるな」

そう言つて、彼は彼女の肩に手を置き静かに頭を振つた。  
何だか自分を責めているようだった。

（その手を離せ！）

僕の視線が彼の手<sup>て</sup>に注がれた。  
そしてまたも不愉快になる。

「そうだよ！　こんな事になったのは元はと言えば全部オースティンさんのせいだ！　貴方が来たからニアが……ニアを！　ニアを早く捜してよ！」

取り乱した僕にエルフィンの平手が飛んだ。

僕は不意を衝かれてよろめき、先程まで座っていた長椅子にもう一度へたりと座り込む。

あれからニアの姿が忽然と消えていた。何度も僕は彼女の中に戻ろうと意識を同調させてみるけど全然反応が無い。

遺体が見付からない上に、僕がまだ生きているって事は意識が無いまま拉致された可能性が高い。

あのニアが……信じられないけれど。

「何すんだよっ！」

僕は殴られた左頬を手で押さえて彼女を睨み付けた。

「マック！」

今度はエルフィンにいっかつ一喝された。

彼女は僕に何か言い掛けたけれど、それをオースティンさんが左腕で遮さへきった。

僕の視界はオースティンさんの後姿で一杯になった。

彼が彼女と僕の間割わりつて入ったからだ。

オースティンさんは振り向くと、今度は僕の両肩に手を置きながら身体を折り、ぐつと顔を近付けた。

真まっ直ちぐに僕の眼を見て、穏やかに諭さとすように話掛ける。

「マツク、落ち着け。ニアは勿論捜し出す。もう時期三島さんの護衛が来る。連中が来なければここを離れる訳にはいかない……解とるな？」

「……解とかってるよ……そんな事……」

僕はバツが悪くなつて彼の手を振り払い、顔を逸よらした。

視界がじわりと揺らいでばやける。

（嫌だ。こんな顔、オースティンさんに見られたくない！）

ぐつと下唇を噛みしめた。大声で泣き出したい気分だ。けど、そんなカツコ悪い事出来ない。（どうしよう）

オースティンさんが何者かの気配に気付いて、背後にある左右二ヶ所のドアを振り返った。

静かに立ち上がると軽く左肩を引く。

後ろ手に廻した左手が素早くシャツの裾すその中に入ると、腰のベルトに挟はさんでいた銃把じゅうばがちらりと見えた。

少し遅れてエルフィンも視線を走らせた。二人の「気」が張り詰められる。

外で大勢の人の気配がした。

序ついでで僕われの泣き出しそうな気分も一瞬にして消え去ってしまう。

「……違ちがうな」

そう独り言のように言うと、オースティンさんは銃を握にぎっていた手を離した。

「エルフィン、マツク、聴いてくれ。三島さんは多分もう一度狙われる」

オースティンさんは周囲に気を集中させながら、振り返らずに言った。

「そんな……だつて、ここ病院だよ？」

僕が先に口を開く。

「病院だろうと連中には関係無い」

「もう、私には無理よ。こんな腕じゃ銃だつて満足に扱えない」

彼女も気を配りながら、心細そうにアーヴィンを見る。

利き腕の右手首が大破してまともに指が動かせないでいた。

アーヴィンは振り返つて彼女の腕に視線を落した。

「の、ようだな。連中に生半可な拘束は望めない……か。E S 7 4とGUMを使い」

オースティンさんは小声で軍の専用らしいコードを伝えた。

「E S 7 4ですつて？ ……それつて、ここに居るマツクも私も死ねつてコト？」

エルフィンが怯えて訊き返す。

何だか判らないけど、エルフィンの反応からして対サイバノイド用に造られたモノらしい。それも、拘束目的じゃなくて強烈な殺戮兵器みたいだ。

二つ目の「GUM」は何となくどんな物だか僕にでも想像がついた。

「いいや。仕掛ける「場所」を考えろ」

エルフィンが閃いたようだ。

彼女の様子にオースティンさんは黙つて頷いた。

「来た」

オースティンさんが言ったタイミングで左右の入り口が同時に開かれる。

「動くな！ 警察だ！」

武装した警官隊が通路を塞ぐ形で現れ、一斉にライフル銃を構え

て僕達を取り囲んだ。

このブースに窓は無い。

あるのは左右の出入り口のドアと治療を視察する為に張られた壁一面の強化ガラスだけだ。

銃口で僕達を捕捉ほそくしながら徐々にその輪を狭めて行く

「……」

僕は言葉を失くしていた。

サイバノイドの僕には生身の人間の目では見る事が出来ない赤外線も見える。

幾つもの赤くて細い光の糸が、総てオースティンさんの頭と胸に向けられていた。

勿論、右眼が義眼のオースティンさんとはとくにその事に気付いている。

……絶対に逃げられない。

「大丈夫だ」

目の前で起こった非日常的な出来事で啞然あぜんとする僕に、オースティンさんは落ち着いて静かに言った。

そして、座ったままの僕の頭にぽんと軽く手を置くと、僕達から離れた。

歩きながらゆっくりと大きく両手を上げ、頭の後ろでその手を組む。

その姿勢を保ったままで指揮官らしい人の所へ行き、一言、二言、三言交わした。

すかさず数人がオースティンさんを取り囲み、素早くボディチェックをして拳銃二丁と手足にしてあった何かの装置数点を押収した。その間、銃口は少しも逸らされる事無く彼を捕らえている。

少しでも不審な行動が認められれば即射殺されそうだ。

緊迫感が僕にも伝わる。

喉かわが渴かわいてカラカラだ。

（これは、悪い夢？）



バーチャル映像でもなければゲームでもなかった。

僕の目の前でオースティンさんは振り返る事無くそのまま彼等に連行されて行く

「ま……待ってよ！ どうしてオースティンさんを連れて行くのさ？」

慌てて追い掛けようとした。エルフィンに右腕を捕まれて引き止められる。

「どうして？ オースティンさんはずっと僕と一緒に居たよ？ 悪い事なんか出来っこないじゃないか」

彼女は眼を伏せて首を横に振った。

「オースティンさん！」

（待ってよ。これから僕はどうすればいいの？ ニアが居ないのに、この上貴方まで！）

僕はじつとして居られなくなり、エルフィンの手を振り解いて彼の方へ駆け寄ろうとした。

「うわっ？」

すぐ目の前の床が白煙を上げて弾けた。

威嚇で足元を撃たれたんだ。

思わず両腕で顔を庇って立ち止まる。

「止せ！ 子供に発砲するな！」

僕に銃口を向けた一人の銃身を掴んで、オースティンさんが止めに入った。途端、あつという間に彼等に囲まれ、無抵抗のまま容赦無く何度も殴られる。

「放してよ！ オースティンさんが……」

僕はエルフィンに後ろから抱き締められ、拘束された。

「うーっ！ 放せええ！」

僕は彼女の腕から逃れようと悪足掻きする。

目の前でオースティンさんが膝を折って崩れた。

それでも彼等は暴行を続けている。

エルフィンが直視出来ずに眼を逸らす。

そしてもう一度、僕が逃げ出さない様に凄<sup>ひど</sup>い力で押<sup>お</sup>え付けた。

「何だよ！ 何でオースティンさんが殴<sup>う</sup>られんだよ！ 止<sup>と</sup>めに入<sup>い</sup>っただけじゃないか！」

僕は引き揚<sup>あ</sup>げて行く警官達の後姿に向<sup>む</sup>かって泣<sup>な</sup>きながら大声で叫<sup>こ</sup>んでいた。

誰<sup>たれ</sup>かが独房の電子錠を外している気配にアーヴィンは目を覚<sup>さ</sup>ました。

「痛……」

殴<sup>う</sup>られた衝撃でまだ頭<sup>あたま</sup>がくらくらしている。

右の義眼は自己修復中で、ザーという音と砂嵐のようなもの以外何も見えない。

『君は軍の手配中の容疑者と非常に酷似している。任意同行して貰<sup>もら</sup>おう』

そう言<sup>い</sup>われてアーヴィンは従<sup>したが</sup>ったのだ。

（容疑者でも罪人扱いかよ……ま、当<sup>あた</sup>の本人<sup>ほんにん</sup>だけど）

顔を顰<sup>しか</sup>めて顎<sup>あご</sup>を撫<sup>な</sup>でる。取調<sup>しうてう</sup>べ中<sup>な</sup>何度も暴行を受けて、左の奥歯<sup>おくは</sup>がグラグラしていた。

エルフィンの腕に仕組まれた盗聴器を発見した当初から、遅<sup>おそ</sup>かれ早<sup>はや</sup>かれこうなる事は判<sup>は</sup>っていた事だ。

（……あつた）

左の胸ポケットに入れてあつた目薬<sup>めがね</sup>を片手<sup>ひとて</sup>で弄<sup>いじ</sup>った。

ブラッディ・アイ。

使用すれば文字通り瞳<sup>ひとま</sup>が真紅に染まる点眼タイプの覚醒剤だ。

使用して、ただ眼<sup>め</sup>が赤くなるだけでは無い。視神経に直接作用して人間の本来持っている反射神経の速度を高<sup>たか</sup>め覚醒させる薬物だ。

六年前に開発されたブラッディ・アイは、使用後から代<sup>しろ</sup>謝するまでの間、どんな色の瞳<sup>ひとま</sup>でも鮮やかに紅く染まる事から一時的にファ

ツシヨンとして若者の間で流行し、本来の効能からスポーツ選手やプロドライバーの間で広く持て囃はやされていた。

ただ、使用者によつては幻覚や、視神経を酷使用する事で極度の頭痛や吐き気を伴う副作用が報告されており、その症状が現れる確立が非常に高い為に厚生技術省から不認可の指定を受けていた物だった。

（市販の容器に移し替えておいて正解だったな。どうやら単なる目薬だと思つたみたいだ）

アーヴィンはブラッディ・アイをニアに試しに使用した時のことを思い出した。

『ニア』

アーヴィンは手招きをしてニアを呼んだ。左手に何か持っている。  
『はい。なにに？』

ニアは何を勘違いしたのか、瞳をキラキラさせて彼の許に来る。  
ジャンプをして両手を広げ、無邪気に彼の首に跳び付いた。

『うわっ？ こっ、こら……悪擲わるふりかけ掬くは止せ』

ニアの屈託くつたくの無い笑顔と、腕に触れた柔らかな胸の感触にアーヴィンは珍しく動揺した。

『良いか？ 気分が悪くなるかも知れないが、少しの間の辛抱だ……上を向いて』

そう言われてニアは照れた。上半身を軽く振よじる。

『いや〜ん、そんなことお……ん』

言われた通りに顔を上げ、眼を閉じる。気持ち唇を窄すぼめて。  
『いつ？ ……ちよつ、ちよつと待て、勘違いするな』

アーヴィンは、頬を赤らめながら上を向いて迫つて来るニアの額を押えた。

『大丈夫よ。オヤジさんやマックには内緒にしてあげてからあ』

『何ワケの解からない事を言ってる？ ほら、眼を開ける』

『そんなあ。こんな時は眼なんて……』

ニアは猶も照れて赤くなる。

（止めてくれ。こっちまで恥ずかしくなる）

『馬鹿。何かに考えてる』

つられてアーヴィンも頬が少し赤くなったが、ニアに気取られないよう冷静さを装う。

何かを持っている左手を激しく振る。

手の中で水音が聞こえた。

『へ？』

『口まで開けるとは言っていない』

『だあーって、上見たら開かない？』

『もう、黙ってる』

調子を狂わせながらも、アーヴィンはニアの頭を片手で包むように固定すると、彼女の瞳に紅い目薬を点した。

『くっ……沁みるよ』

大袈裟に涙を流して乱暴に目を擦る。

『本来の濃度よりも50パー以上希釈してある。あまり強く擦るな。角膜に傷が付く』

『うーっ』

ニアが必死になって眼を擦っている間に、アーヴィンは拳銃から弾倉を抜き出して別の弾倉に差し替えた。

暫くは薬がニアに効いているかどうかをじっと静観する。

『……くっ！』

俯いていたニアの肩が震えた。

呼吸が次第に荒くなり、乱れ勝ちになる。

『気分はどうだ？』

（駄目か？ 希釈し過ぎたか……）

そう思った時、ニアが顔を上げてアーヴィンを見た。

『……少し……でもそんなに悪くは……無いよ』

（効果有り）

ニアの瞳が鮮やかな真紅に染まっていた。

アーヴィンはそれを確認すると、銃口をニアに向ける。

「アーヴィン？」

ニアの顔が怯えて引き攣った。

「集中して避けてみる。ペイント弾だが肌に直接当たれば痛いし汚れるぞ」

「ええーっ？」

本来の濃度半分以下に希釈して使用したが、彼の予想通りニアは期待を裏切らなかった。

今、手にしているのは、ニアに使用した希釈液などという生易しいものではない。

激しい頭痛と嘔吐に、彼は過去幾度と無く苦しんだ。

願わくは、この薬を使用する機会が無いことを祈っている。

これは緊急時の切り札の心算として所持していた。

誰かが電子扉を開けて中に入ってきた。

気配と靴音で二人だと確認出来る。

アーヴィンは呻きながらもゆっくりと上体を起こした。

「気が付いたかね？」

振り返ると何処かで見覚えのあった男が立っていた。さほど背は高くはないが、ガツチリとした広い肩幅に黒髪の髭面だ。アーヴィンは地球の東洋で見た鍾馗という神様を思い出した。

（確か、陸軍に居た幕僚の……）

容姿上、強烈な印象を持っていたのですぐに分かったが、名前までは思い出せない。

（へえ、こんな所に天下りかよ）

「アーヴィン・オースティン。報道カメラマンか……男前が台無しだな」

彼は事情聴取の報告書を手に、殴られて人相が変わっているアー

ヴィンを見下ろした。

彼が軍に在籍中、アーヴィンとは何度か面識があつた筈だが、幸いにも彼はその事にはまだ気付いていない様子だ。

「何の……用だ？」

顔を顰めて鬱陶しそうに言った。口の端が裂けて腫れ上がり、まともに喋れない。

「通常ならば、許可は下りないが……面会人だ。三島部長のご子息を連れて来た」

「はあ？ ご子息？」

（居たか？ そんなの？）

アーヴィンは首を傾げ、胡散臭そうに眉を寄せて彼を見上げた。

「オースティンさん……」

僕は所長の陰からおずおずと出て来た。

両手に氷水の入った洗面器とタオルを持って。

「よお」

オースティンさんが軽く笑った。

口には出さなかったけれど、「何だ、お前か」と言われたような気がした。

「良いかね？ 時間は厳守したまえ」

「はい」

僕は所長に頭を下げる。

彼は僕を残して席を外した。

再び嚴重な電子錠の掛かる音がする。そして、監視カメラのマイクが切られ、映像でのみ僕達を監視する為に予め取り付けられてあつた画面にプログラムの文字が表示された。

オースティンさんは目視でそれを確認すると、僕に向き直った。

「相変わらず、ファースト・ネームで呼ばない……か。まっ、いいけど？」

「え？」

彼に指摘されて初めて気が付いた。

僕が無意識に彼の事を遠去けている事に気付いていたみたいだった。

オースティンさんは僕の手から洗面器を受け取ると、それに直接顔を浸けた。

氷の入っていた冷水が瞬く間に彼の血で濁る。紫色に内出血して腫れ上がった右の脛と左の口元を軽く押えるようにして拭き取った。左の脛も裂けていて、タオルにも血が滲んだ。

（うわ、痛そう）

「ニアは？」

僕は顔を顰めた。そして、思いも因らなかった彼の質問を聞き返す。

ここに来るまで、彼に素直に謝ろうと思っていた。

僕のせいでこんなにひどい目に遭って……非難されて拳の二、三発を覚悟の上でここに来た。

でも……

「何だ？ まだ音信不通か」

（まただ）

「……人を携帯みたいに……言わないで下さいよ」

僕は機嫌を損ねてムツとなる。

人が真剣になっっている時に……

（やっぱり、オースティンさんとは合わないや。こんないい加減な人とは……）

「あー？ 怒った？ 悪い、悪い、痛ててっそんな心算じゃ無かったんだけどな」

「じゃあ、どんな心算ですか？」

僕は膨れて突っ掛る。

「そう言うなって」

オースティンさんは軽いノリでそう言ってくすつと笑った。

「で、何しに来たんだ？」と蒼い眼が問い掛けている。

僕が単に氷水の差し入れだけに来たんじゃないって事はお見通しだった。

見透かされていて何だか物凄く嫌だ。

（やっぱり謝るのは止めだ）

冷水で幾分腫れが引いて来たオースティンさんの顔を見ているうちに、僕の気が変わった。

それに、訊きたい事もあった。

「何故、オヤジさんの奥さんや娘さんを殺害したんです？ あんなにお世話になっていた人を」

僕は容赦無く<sup>ようしゃ</sup>単刀直入に切り出した。

殴られた痕<sup>あと</sup>に触れていたオースティンさんの手がぴたりと止まる。「み、妙な言い逃れは出来ませんよ？ ちゃんと当時のセキュリティ・カメラに貴方の仲間が……確か、キヨウとか言う人達が映っていたそうですから。貴方が元軍の人だという事だっ僕はとっくに知っているんだ！」

オースティンさんの瞳が大きく見開かれ、彼の態度が豹変した。

「……どう言う事だ？」

血相を変えて彼は僕の胸倉を掴み上げ、激しく揺さぶった。

（こっ、怖い！）

「こっ、こっちが訊きたいよ！」

「どうしてそういう事になっている？」

僕を掴み上げた手に一層力が籠<sup>こも</sup>った。

「くっ……し、知らないよ！ は……放してよ！」

僕達の遣り取りをカメラで監視していたサイバノイドの看守二人が慌てて駆け込んで来た。

無抵抗のオースティンさんは、あっという間に羽交い絞めにされて壁際に貼り付けられる。そしてもう一人が僕を外に出そうと促<sup>うなが</sup>したけれど、僕はそれを拒否した。

「大丈夫です。少しだけ、もう少しだけ話をさせて下さい」

（僕だってサイバノイドだ。彼が本気を出さない限り大丈夫さ……



多分)

看守の人達も、すぐに分かってくれて事無きを得た。

「……知らなかった」

オースティンさんはかなりショックだった様だ。監視員から解放されてもそのままの状態で居た。視線が定まらずに泳いでいる。

「オースティン……さん？」

「どうりで三島さん宅に誰も居なかった筈だ」

「って……貴方達は四年前にオヤジさんの家で……」

「灯台下暗し……か。三島さんのプライバシーにまで首を突っ込む心算は無かったから、ノーマークだった……」

小声で呟いたオースティンさんと目が合った。

彼は黙って真っ直ぐに僕を見る

澄んだ蒼い瞳が、戸惑っている僕の姿を映し出した。

「やって……無いんだ。そうなんだね？」

何だかホツとした。

「オヤジさんが言ってた。当時……僕は何の議題の件かは知らないけれど、貴方達の件を中々承諾しなかったオヤジさんは、委員会からかなりの圧力を掛けられていたって。

だから、もしかしたら貴方達が遣ったと見せ掛けた偽装だったのかも知れないって。」「わざわざカメラに映るようなヘマはせんだろう」って。そうも言ってた」

「さあ、それはどうかな？」

オースティンさんはそっぽを向いて僕を軽くあしらった。

「え？」

思いも寄らない彼の言葉に僕は困惑した。

「そいつは案外本当かも知れない。マックがどれだけ俺達の事を知っているかは知らないが、奴なら有り得るかも」

「何故？ キョウっていう人、貴方達のリーダーだって聞いているよ？」

「だからさ。当時、俺達はもう六人全員で行動を共にするような任務は無くなっていた。お互いにサポートし合うのはとくに卒業していたんだ。俺とトムは……キョウとはいろんな面で合わなくて、滅多に顔を会わせる事さえ無くなっていた。」

「あの、トムって……確か貴方のファイルにも「トム」って有ったよね？」

「あれが奴のI・Dさ。サイバノイドに換装する事も出来たのに……」

そう言った後、軽く僕を睨み僕の頭を小突いた。

「痛い」

「おい、勝手に人のファイルを覗くな」

「はぁーい。でも、内容は見ていないよ」

（だって……たま々見えちゃったんだもの）

僕は口を尖らせて返事をする。

「当たり前だ。プロテクタ掛けているのに、そう簡単に外されて堪<sup>たま</sup>るかよ」

「でも、仲が良かったんだね。そのトムって人と」

「俺が？」

彼は意外そうな顔をした。

「うん。だって、いつも一緒だったんでしょ？ 彼と。だから仕事でも一緒に……」

「まあ、確かにそう言えなくも無いか。勿論任務上での相棒でもあったがそれだけじゃない」

「？」

「相方は何の為に居たと思う？」

「それは、お互いのサポート……って、さっき言ってたじゃない」（何言ってるのさ）

「初めは……だ。本来の目的はお互いの監視」

「監視？」

僕は首を傾げた。

「ああ。逃亡の阻止と、相方がミスを犯した場合の事後処理だ」

「どういう事？」

「相方を殺害後、任務を引き継ぐ」

「殺害つて、そんな……」

「勿論、俺達はそんな馬鹿事は出来なかったし、そんな指示には従えなかった。他の連中はどうだったかは知らないが……今思えば、奴は親友と呼べるのだろうな」

（親友……）

ぐさりと何かが胸に突き刺さった。

僕にはそう呼べる友達はまだ居ない。

「あつたの？ そんな事が」

「ああ。何度も……上に事が発覚すれば即、二人共処刑され兼ねない程のな」

オースティンさんはそう言つと、過去を思い出すかのように遠い眼をした。

「しょ、処刑つて……オースティン……さん？」

通常の生活からは全く聞き慣れない言葉を平然として言うオースティンさんに、僕は慌てた。

（この人は一体何をしていたんだろう？）  
変だ。

今まで、彼の事なんかどうでも良かった僕なのに……

「あ？ ああ、すまない。話が逸れてしまったな」

オースティンさんは気を取り直して話を続けた。

「キョウは何かと言えばすぐに荒事で事を片付けたがるような奴だった。元々ガタイもあつたし、それなりの実力もあつたからな。それに、薬物の副作用で少しおかしくもなっていたんだ。ブラッディ・アイで」

「その薬の名前、聞いたことがあるよ？」

「ま、四、五年前に流行っていたからな」

僕の反応に彼は相槌あいづちを打つ。

「奴はいつも自分の力を試したがっていた。新しい武器や格闘の技なんかを覚えてしまうと、その力がどの程度通用するモノなのかを実際に試してみる……試さずには要られない性分だった。他の連中はキョウに追従<sup>（しゅうぞう）</sup>したけれど、俺達二人は自然に離れて行つたって感じかな？ 尤も、キョウがメンバーの中で一番腕が立つし、指導者の立場でもあった。奴に背けばそれなりに報復<sup>（ほうふく）</sup>があったから……」

そう言つて彼は視線を自分の右腕に落とした。

掌をじつと見詰め、ゆつくりとその手を握つては開いて見せる。

僕はその動きが何処かぎこちなく、まるで精度の悪いロボットのように見えた。

彼の右の手首も肘<sup>（ひじ）</sup>も壊れている事に気が付く。

「……手、どうしたの？」

今まで傍目<sup>（はため）</sup>から見て彼の手がどうかなっているのかなんて解らなかつたし、気付こうとも思わなかつた。

でも、こうして間近で見れば、彼の手が普通でない事くらい判る。

「俺は元々右利きだ。レクチャーだとか言つて、皆の目の前で壊された。二ヶ月は何も……ペンすら握れなかつた。五年以上も経っているのにまだ時々痛む事がある」

「そんな……ずっと貴方は左利きだと思つていた」

（知らなかつた）

「そんな事も有りだつたんだよ。俺が一番年下の癖に生意気にも奴に反抗していたからな。」「反抗すればこんな目に遭う」他の連中へのいい見せしめさ。今思えば俺も馬鹿だよな。もう少し利口になつていれば利き腕を壊される事なんてヘマは無かつたのに。その前にも何度か奴とはあつたんだ。まあ、ワケありだね。

三島さんと出逢つたのはその頃だ。トムと二人でキョウに遣られて動けずに非常用通路で蹲<sup>（つすくま）</sup>っていた。その時に俺達を見付けて介抱してくれたのが三島さんだった。

不思議だつたよ。あの通路は普段誰も利用しないのに……

最初は三島さんも医療の知識が無くて、医療用ソフトを片手にテ

ーピングのやり方や包帯の巻き方やらと格闘してくれたよ。流石に外科手術は無理だったから、靱帯が切れた俺の肘は結局そのままに……ま、骨折と同じで放置していても日が経てば自然治癒で一応動けるようにはなるんだけどな？」

「そんなの……イジメじゃない」

（酷いよ！）

僕はオースティンさんから視線を逸らせて声を詰まらせる。

「かもな？」

僕が泣き出しそうな顔をしていたのに気付いたオースティンさんは、努めて明るい口調に切り替えてそう言った。

「軍に医務室とかは無かったの？」

「あつたさ。でも、俺達は居る筈の無い人間だ。本来なら、俺は三島さんや軍の大人達に出合う事さえ許されていない。何度も三島さんに助けて貰いながら、俺達の事がバレやしないかいつも怯えていた。バレれば俺達は処刑される……まるで野良犬か野良猫みたいに三島さんには見えただろうな。三島さんが俺達の存在を知る立場の人間だと分かったのはずっと後になってからだ」

僕はじつとオースティンさんの話に耳を傾けていた。

いつの間にか、普段のいい加減なオースティンさんの姿は僕の頭から払拭されていた。

こんなに彼と話したのは初めてだ。

僕はいつも……いつだって彼の事を解ろうとはしなくて……表面だけで彼の事を誤解していた。

（何も分かっていなかった。いや、分かつともしなかったのは、僕だ）

「どうした？ ……あ、いや。詰まらなかったな？ こんな話」

すっかり氣勢を殺がれて消沈してしまった僕を見て、彼は勘違いしたみたいだった。

「いえ、そんな……」

（……そうじゃ……ないんだ）

だ、誰かあ！

頭の中で悲鳴に似た声がした。

「えっ？ ニア？ ……ニアなの？」

僕は咄嗟とつとに椅子から立ち上がる。

「聞こえたのか？」

すぐに彼女の許に行こうとした。その腕をオースティンさんが掴む。

「！ 何をするんですか。放して下さいよ」

尤も、サイバノイドの身体を幾ら拘束しても、僕自身実体像もつとを持つていないI・Dだけみたいなのだからいつでもこの身体をすり抜けてニアの許へ行くことが出来る。

「俺を連れて行けないか？」

彼の言葉に僕は耳を疑った。

## 第4話 インターセプタ

「オースティンとか言う男、多分軍が捜している人物本人でしょうね？ さつさと引き渡しちまったらどうですか？」

アーヴィンの聴取を終えていたライナスが、戻って来た署長に声を掛けた。

デスクに向かい器用に片手でペンを廻して弄もれあそんでいる。

時刻は深夜に入り、彼の背後では検挙された若者数人が警官と揉み合っていたり、酔っ払いの相手をしている者がいたりと賑にぎやかだ。

「いや、まだだ」

署長は首を横に振った。

「ですが、発見次第引き渡すようにとの要請がありましたよね？」

「ああ」

「だったら……」

言い掛けた時、目の前の電話が鳴った。ライナスは慌てて受話器を取る。

彼が用件を終えても、まだその場に署長が立っていた。

「……何処かで……見覚えがあった気がするのだ」

「？ オースティンがですか？」

「ああ……」

「そりゃあカメラマンですからね。事が起これば我々の行く所に出没してもおかしくはないですよ？」

ライナスは何を言っているんですと言わんばかりに肩を竦めた。

しかし、署長は眉間に深い皺しわを寄せてずっと押し黙っている。何かを思い出そうとしている様だったが、素もとが強面こわもてなのでその迫力にライナスは退いてしまった。

「引き渡すと言っても……彼は本当に該当人物だったのかね？」

「それが……さっぱりですね。『アーヴィン・オースティン（偽名

を使用する可能性有）十九歳で性別が男のグレネイチャ。身長百九十二。右利き」 氏名及び軍が作成した身体的特徴では合致しますが、奴の利き手は違う。とにかくたったこれだけで軍からの資料が顔写真さえ無いなんて……指紋、網膜、DNA等の電子データ、どれか一つでもあればすぐにしょっ引けるのですがね。決定打に欠けているんですよ」

ライナスは首を横に振る。

「ま、あの通りの強<sup>したた</sup>かさは持っていますからね。叩<sup>たた</sup>けば幾らでも出て来そうですが？」

「それにしても、お前達もやり過ぎだぞ？」

「それは本人に言ってお下さいよ。ああやっても一向に口を割ろうとしないですからね。大体、自称「一介のカメラマン」が軍に追われている事自体怪しいですよ。奴さん、軍の施設に潜入でもしてヤバイ写真を撮りでもしたんですかね？ あ、いつその事俺達で口割らせますか？」

嬉しそ<sup>こが</sup>うに拳<sup>こぶし</sup>をもう片方の手で握り、指の関節を鳴らす。彼はヤル気満々である事をアピールした。

「まあ待て。言う事が無ければ言えんだろう。それこそ、告発でもされたら……」

「またですか？」

ライナスはうんざりして言った。

（綺麗事だけではどだい無理なんですよ。実際に動く末端の者にはね）

目の前の画面にメールの表示が点滅した。

「軍からです。署長宛ですよ？ ……プロテクタが掛かっています」署長は足早にライナスの傍<sup>そば</sup>に寄った。

画面を覗き込むなり手早く解除パスワードを入力する。

「ちよつ、ここで？ ……見えてしまいますよ？ 良いのですか？」  
「構わん。さして大した内容では無かろう……」

そう言っ<sup>て</sup>画面に視線を落した署長はそのまま押し黙ってしまった



た。

「……」

そこには、非公開のまま削除されていた四年前の資料のアーヴィン達六人のプロフィールが映し出されていた。

「これは……どう言う事だ？」

署長はそれきり絶句する。

「？」

ライナスは訳が解らずに画面と署長の表情を交互に見た。

画面に映った子供達は幼さが残っているにも関わらず、皆一様に目付きが鋭く生意気そうだった。

一目で其れなりの特別な訓練を受けて来た事が窺<sup>うかが</sup>える。

「全員まだ子供ですね。おーお、憎ったらしそうなクソガキ共。皆良い面構えだ」

ライナスが画面を見て嬉しそうに言った。

「確か、お前も何年か前まではそうだったと聞いているが？」

「はあ……まあ、そう言われればそうなんですけどね？」

真顔の署長からの容赦無い突っ込みに、ライナスは赤面して頭を掻いた。

「ん？ こりゃあ四年前のデータじゃないですか」

自分で墓穴を掘ってしまったライナスは、ファイルの記録が古いのに気付き、助かったとばかりに話を逸らせた。

「当時噂になっていたのはこの子供達だったのか……」

署長は呟くように言った。

「知っているんですか？ このガキ……いや、子供達の事を」

「ああ噂だけは耳にしていた……まだ十五歳になったばかりの子まで居たのか……うん？ このグレネイチヤの少年は……」

ライナスと署長は一番最年少の子供のプロフィールに視線を奪われた。

二人の頭の中で、少年の顔が先程拘置所で会ったばかりのアーヴィンの顔と二重に映し出される。

署長が黙って画面に映っている最年少の少年のプロフィールに年齢数を追加して入力した。

少年の顔が瞬く間に現在のアーヴィンの顔に変貌する。

「っしやアービングゴ！ こいつ……署長、奴ですよ」

ライナスはデスクを叩き、満面の笑みでガッツポーズをした。

「俺を連れて行けないか？」

オースティンさんは僕の腕を掴まえてもう一度そう言った。

「しょ……正気ですか？ 無理ですよ！ 誰かを連れて行った事なんて無いし、そんな危険な事を試して見ようと思った事も有りません！」

僕は必死に首を横に振った。

今にも口から泡が吹き出しそうだ。

「だったら、今ここで試して見れば良い」

「そんな、簡単に……」

僕は呆れて一瞬だけ言葉を失った。

「……止めて下さい！ 僕と、生身の身体が揃っている貴方とではワケが違うんだ。無事に貴方を連れて行けるかどうかなんて分からないし、仮に連れて行くことが出来たとしても、何処へ入るんです？ 二人でニアの中に入る心算ですか？ そんなのきつと出来ませんよ」

「マツクはニア以外、誰かの中に入れるのか？」

僕はもう一度首を振った。

「いいえ。今までに互換性を試して見た事は有りますけど、ニアとこの身体にしか入れませんでした」

「サイバノイドになら、お前は誰にだって換装出来るだろう？」

「この身体には本来の僕のI・Dが組み込まれています。それに、換装する時はいつも目の前にあるから。離れた所からの換装はなかった事はないんです。だからきつと出来ません」

僕はきっぱりと言い切った。

「試してもいないのに？ 俺のI・Dを持つサイバノイド（ドール）なら向こうにある。」

「そういう問題じゃないんです。個として既に起動しているサイバノイドに換装出来ると思っっているんですか？ 無理ですよ。大体、万が一に貴方のドールに換装出来たとしても、今度はどうやって戻って来る心算ですか？ 戻れなかったら仮死状態になっている貴方の身体はどうなるか判らない……駄目です。僕には出来ません」

頑<sup>かたく</sup>なに首を振る僕を見て、オースティンさんは深い溜め息を吐いた。

「……なら、お前がニアと二人で連中を何とか出来るのか？ いや、何とか出来なくて良い。連中から逃げ出してニアを救えるのか？」

「そ、それは……」

言葉に詰まった。

恥ずかしくて自分でも情けないけれど、僕だけでは無理だと直感的に思う。

オースティンさんは僕の様子を見て、静かに言った。

「本当は、俺が行ってどうなる事でも無いんだ。俺が全員の後輩だし、一番の根性無しだったからな。実際、サイバノイドであつても元は仲間だったんだ。その連中に俺が銃を向けられるのか、正直言っただけでも分からない。自信は無い……偉そうな事を言っただけで済まなかったな。けど、お前達を逃す事なら出来るかも知れない。チャンス位ならきつと出来る」

嘘偽りの無い、彼の率直な本音だった。

そのくらい、僕にだっただけで判る。

「オースティンさん……」

（貴方は今、危険な賭けをしようとしているんだよ？ それでも？）

僕は彼をじつと見据えた。

彼の蒼い瞳には、死への期待も生への執着さえも微塵に感じられない。

僕はどうするべきなのかを判断し兼ねて戸惑った。

（何を考えているの……？）

「決心が付いたか？」

オースティンさんは冷静に言った。

まるで僕にはそれを拒絶する事が出来ないのを判っているように。

看守がマックを迎えに来た。

「時間だ。さあ、出て貰おう」

中はしんとして静かだ。何の気配も感じられない。

「……？ ええと、マック君だったかな？ 時間だ。早く出なさい

……マック君？」

看守は訝<sup>いぶか</sup>って中を覗いた。

「！」

簡易ベッドに突っ伏して倒れているマックの姿と、壁に寄り掛かって崩れかけているアーヴィンの姿が目飛び込んだ。

「きつ、救急車！ 救急車！ だっ、誰か早く呼んでくれ！」

「おい、ダグからの連絡はまだなのか？」

「はい」

「まさかあいつ等へマでもしでかして……」

「シッ！」

受け答えしていた男が、喋りかけていたもう一人の男を遮った。

二台のパトカーがサイレンを鳴らしながら通り過ぎて行く。

暗闇の中に浮かび上がったカーナビが、目の前を通過したパトカーを二つの赤い三角の光で表示した。

車内にパトカーの通信内容が入って来る。

どうやら三島邸を襲った犯人である自分達を搜索中のようだ。

「……遣り過しましたよ」

「よし、出せ」

エンジンの始動する音が響いた。

野太い男の声と、やけに揺れる床にニアは目を覚ました。

まだ頭がぼんやりする。

覚えているのは大きな爆発音と、真っ白い布が目の前にあった事。そして強烈な薬品の臭いだった。

（ここどこ？）

ニアは大きな薄暗い箱の中に閉じ込められていた。どうやら大型トラックのコンテナ内に居るようだ。傍に何人が居るが、不思議と人の気配がしていない。

（ニア、もしかして何処かに運ばれてるの？）

ニアは少し頭を擡げた。

手足は別に縛られてはいない。床に寝転がされているだけだ。

「気付いたようです。どうしますか？」

（誰？ ニアの事言ってる？）

ニアのすぐ傍にいた一人が、先程のリーダーらしい男に報告する。無意識に寝返りをうつ。

下になって隠れていた右腕が出た。

「この子、インターセプタ持っていますよ？ 右のリストだけです  
がレプリカじゃない。これは軍が使用していた本物です」

「ああん？」

太い声の男がニアの方を窺っている気配がした。

「ふん、本体が無いんじゃないやあ使えねえ。廃棄処分品が残っていてどこぞで流出したモノだろう？ 今時そんな古臭いインターセプタを遣える奴はいない。放っておけ。また薬臭がしておけばいい。バラス迄は傷付けるなよ？」

「はい」

感情の無い返事をした男は、ニアの右手にあるインターセプタを気にしながら、薬品の準備をする。

インターセプタ。

対サイバノイド戦用に開発された白兵戦用迎撃シールド。本体はヘッドセットの様に頭部に装着する。使用者の脳波シンクロと同調させて増幅し、両の手足に装着している端末に伝達させる。平たく言えば、サイコ・エネルギーシールドで使用者本人を保護する防具だ。

これとブラッディ・アイと呼ばれる覚醒剤 点眼する事で視覚神経に直接作用し、一時的に運動能力を高める目薬を併用することによって、生身の人間でもサイバノイドと互角に戦闘が可能になる。軽装備の上、機動力もある為に六年前に開発され汎用される方針だったが、覚醒剤であるブラッディ・アイの併用が必要だった為、当然の事ながら中毒患者が続出。その後使用全面禁止でお蔵入りになった代物だ。

開発当時、アーヴィン達が主要モニタとして起用されていた事は言うまでもない。

現在では、シエルアーマーと呼ばれる重装備のアーマースーツでしか対応出来ないが、これでは身動きが制限されてしまい、とても使えたものではない。尤も、サイバノイドにはサイバノイドを向かわせるのが現在の通常対応となっている。

（バラす？ 誰を？ ……ニアを？）

ニアは驚いて飛び起きた。

顎あごに醜い傷を持った大男が舌打ちする。

「もう代謝しちまったか」

男の手が伸びてニアを捕まえようとした。

咄嗟とつさにその手を掻かい潜くぐり、擦れ違いざまに男の脇腹の急所を突き

上げるようにして殴った。

「痛っ！」

悲鳴を上げたのはニアの方だった。

手が伸び切らない内に硬い金属に当たり、手首を捻ひねりそうになった。

瞬時に手を引いて事無きを得た。

「痛ったあゝい！」

小さく叫んで手を振った。

気付くのが遅れたらニアの手の方が先に駄目になっていただろう。

（サイバノイドなの？）

ニアは未だに生身いまの人間とサイバノイドの区別が付かない。

脇腹を殴られた男は唸うなってよろめいた。

「何のマネだ？」

「そっちこそ！ 人攫ひっさらい！」

口では負けていないが、ニアの掌は極度の緊張でじつとりと汗ばんでいた。

自分の倍近くもある背丈と何倍もの横幅の大男に凄まれているのだ。

しかも生身の人間とは訳が違う。

相手は人造人間のサイバノイド。本気を出さなくても、力の加減次第でニアの腕など簡単に押し折られてしまう。

リハビリをしていたマックでその威力は立証済みだ。

コンテナの両脇に逃えていたシートから、二人の人影が立ち上がった。

「お前達は良い。小娘一人に手出しは無用だ」

傷の大男は薄ら笑いを浮かべて、ゆっくりと近付いて来る。

（嘘おお？）

ニアは恐怖で涙眼になった。ひたすら逃げの一手だ。このままではいずれ捕まってしまう。

サイバノイドと張り合うなどと言う無謀な事はサイバノイド同士でやって貰いたい。

「おら、どした？ さっきの威勢は。ああ？」

大男は面白がってニアを追詰める。

腕を掻い潜かぐって何度目かに読まれて足を引っ掛けられた。

「きゃんっ！」

ニアがバランスを崩したのと、車がバウンスして揺れたのが

ほぼ同時だった。

つんのめってシートに座っていた仲間の一人に頭から突っ込んでしまった。

二の腕を掴まれてあっという間に捕えられた。

傷の大男とは違って、背格好は今のニアと同じくらいだ。

（冷たい？ …… こっちもサイバノイドなの？）

その掌に体温が感じられない。

はっとして腕を引いたが全く微動だにしなかった。

（動けない？）

丁度、車がトンネルに進入し、車内が明るく照らし出された。

ニアはその男の顔を見上げてドキツとした。

少し長めの銀髪に赤銅色の肌。そして蒼い瞳をしたグレネイチャの少年。

やや俯き加減で表情が全く無かったが、彼の面影に見覚えがあった。

心臓の鼓動が早くなる。

ニアはその鼓動が彼に気付かれはしないだろうか、顔を赤くした。

「アー……」

言い掛けて言葉を呑み込んだ。

（アーヴィン？ …… 違う？ でも、そっくりだ）  
錯覚かと思った。

よく、人種が異なると誰を見ても同じ人に見えると云われているが、この時もそうかと思った。

しかし、ニアの目の前に居るのは、彼女の良く知っているアーヴィンに似た、自分と同じ年くらいの少年だった。

「何だ。つまらねえ。もうお終いか？」

大男が彼の手から強引にニアを引き離す。

「痛い！ 痛い！ ちよっと！ 止めてよ！」

左手首を乱暴に掴まれて悲鳴を上げた。



ニアの身体はそのまま高々と宙に吊り下げられる。

「ぎゃあーぎゃあー喚くな！ このまま腕を引き千切ってやるのか？ ああ？」

耳元でそう言つて、大男はもう片方の手でニアの顎を強く掴んだ。対向してくる車両のヘッドライトがコンテナ内に漏れ、ニアの瞳を時折金色に光らせる。

ニアは気丈にも大男を睨みつけ、空いている右手で男の手に爪を立てた。

さつきの少年とは違つて、仄かな体温が感じられた。

この大男はエルフィンと同様半身がサイバー化されているようだ。裸足の両足を必死になつてバタつかせ、足掛りを探す。

「おお、がんばる、がんばる」

大男が抵抗するニアを蹴し立てる。

右の手首が何だか熱い。

気のせいかな、真つ黒だったリストバンドが仄かに発光して見える。大男は薄ら笑いを浮べ、宙吊りにしたニアの身体を舐め回すように視姦した。

「うっ？」

不意に、ぬるりとした生暖かい物がニアの頬を撫でた。

全身に鳥肌が立つ。

ニアは悲鳴を上げて両足をバタつかせる。

滅茶苦茶に何度も大男の腹や胸部を蹴った。

まるで金属がコンクリートを蹴っている感覚だ。しかし、今のニアは大男から離れたい一心だった。足が駄目になつてもどうなつても構わなかった。

「！」

偶然かも知れなかったが、渾身の一撃が見事にヒットして、大男は堪らずにニアの手を放して倒れ込んだ。

車が大男の倒れた側へ振られ、横転しそうになる。

運転手が悪態を吐きながらハンドルを切つて最悪の事態を回避し

た。

（い……今、ニア何したの？）

「こ、このガキ……」

大男の顔色がどす黒くなり、ただでさえ<sup>いか</sup>厳つい形相がたちまち醜悪になる。

ニアは車のシートにしがみ付いて怯えた。

「止めだ、止めだ！おい、この辺に確か廃屋になった工場があったな？」

振り返って運転している男に尋ねる。

「はい。あと2キロ行った所に」

運転していた男が感情の無い声で答える。

「生かして連れて行くのも面倒だ。そこでバラしてやる！どうせもう時期三島を殺った連絡も来る」

「ええっ？」

（オヤジさんが……）

瞬時に彼等が自分達の保護者である「オヤジさん」を狙っている連中だと悟った。

ニアの脳裏に三島とアーヴィンの顔が浮かぶ。

（どうして？）

後方から、車のヘッドライトで照らし出される。

乱暴に突き飛ばされ、ニアは勢い余って二、三回頭から突っ込んで転んだ。勿論アーヴィンから教えられた通り受身をしているので怪我は無い。

廃屋になって随分と経っているのだろう。

転んだ拍子に埃が土煙と混ざり合って辺りにもうもうと立ち込める。

咳き込みながらも素早く起き上がって逃げ出そうとしたが、先回りしたアーヴィンによく似た少年と、もう一人の少年に退路を断た

れる。

もう一人の彼もアーヴィンと同様、銀髪に赤銅色の肌と蒼い瞳を持ったグレネイチャだった。

正面からはニアを突き飛ばした大男が、薄ら笑いを浮かべて近寄って来る。

その後ろでは、車から降りた運転手の後姿が見えた。

彼は人一人が入るのに十分な大きさの円筒形の容器を準備している。

（冗談じゃないよう）

ニアは自分がそこに投げ込まれるのだと覚った。

（どうする……？）

ニアは身構えたまま左右に視線を奔らせた。鼓動が早い。

「へへ……」

大男が刃渡り五十センチ程の鉈なたのような分厚い刃物を鞘さやからすりりと引き抜いた。

（マジなの？）

ニアはそれを目にして一瞬怖気づいた。

不意を衝かれて、後ろから二人に意図も簡単に捕らえられた。

両腕と肩を体温の無い冷たい手でがっちり押え付けられる。

両方から腕を伸ばす様に左右から引つ張られた。胸を張って十字架に掛けられたような姿勢になる。

「血を見るのは十日前のシュナイダー以来だな。奴は撲殺してやったが、お前は大事な商品だ。綺麗に切断してやるよ」

そう言って大男は刃の部分で舐め、薄ら笑いを浮べた。

（ヤバイよ……何とかしなくちゃ）

ニアの顔が蒼白になる。

何度も肩を引いて乱暴に腕を抜こうとするが、二人ともしっかりと捕まえていて逃れられない。以前、アーヴィンから教わった、相手の親指の付け根から切る様にして手首を抜く方法も試して見るが、サイバノイド相手には全く効果が無い。

逆にニアの手が痛くなった。

「っ！」

また右手首の辺りが熱くなって来た。

両肩を突き出すように押えられているので、手首までは死角になっ  
ていて見えないが、恐らくまだ発光しているのだろっ。

「覚悟は出来たか？ うん？」

冷たい刃先が、顔を逸らせたニアの首筋に軽く押し当てられた。

青白い刃に堅く目を瞑ったニアの横顔が映る。

刃先がほんの軽く触れた所から、何かが滴り落ちた。

ニア自身痛みは感じられなかったが、それが自分の血であることは  
すぐに解る。しかし、解った所で身動きが取れない為、どうする  
事も出来ない。

心臓の鼓動が一層速くなり、胸から飛び出しそうだ。

大男の目が怪しげに光った。

ニアの真正面に刃物が討ち下ろされる。

「いやぁ！」

硬く眼を閉じて顔を背けた。紙一重でピンクのＴシャツが下着と  
と切り裂かれ、肌が露になった。

偶然ではない。

大男は計算してやったのだ。

「あゝ、何すんのよ！ お気に入りのブラだったのに！」

肌を曝した事よりも、ニアにとっては気に入った下着が駄目にさ  
れた事の方が大切だったらしい。

大男はニアの反応に一瞬戸惑った。

「変な小娘だな。まあ良い。一思いには逝かせねえ。車内での事も  
あるしな。先ずはその腕を肩から頂こうか」

大男は薄ら笑いを浮かべて、再び刃物を大きく振り上げた。

（誰かぁ！）

手首が熱い。恐怖に硬く眼を閉じて、堪らず悲鳴を上た。  
咄嗟に身体を低く落としながら右腕を渾身の力で拭った。

アーヴィンそっくりの少年がニアの片手で軽々と投げ飛ばされ、大男の刃は空を切る。

少年は五、六メートル先にある壁際に山積みにしてあった空のドラム缶にもの凄い音を立てて頭から突っ込んだ。

見た目はどうであれ、殆どのサイバノイドの骨格は軽量とはいえ合金だ。ニアの倍以上の体重があった筈なのに、どうして投げ飛ばすことが出来たのか不思議だった。

（動く！ どうして？）

ニアは流れるように身体を反転させながら、もう一人の少年の上段を狙って廻し蹴りを放つ。

重心のバランスが崩れていた彼はまともに喰らって倒れ込んだ。

「えっ？」

ニアは二人のサイバノイドから逃れた自分の両手を交互に見詰めた。

相当な質量を持っている彼を防具無しで蹴ったのに、全くの無傷だ。

しかも痛みさえ感じられない。

（どうなってるの？）

右手首にしてあったリストバンドが仄かに光っている。

『……なら、どうすれば真面目に取り組めるんだ？』

中々自分の指示に随したがおうとはしないニアに憔悴こころしずみしたアーヴィンは、片手で頭を抱えてボヤいた。

その彼の手首に、この黒いリストバンド（インターセプタ）があった。

ニア達と再会したあの日以来、アーヴィンの両手首にはずっとそれがある。

ニアはそれが気になっていた。

『何？ これ』

『何でも無い』

ニアが手を伸ばして触れようとしたが、アーヴィンは手を引いてそれを許さなかった。

一見、黒いチタン合金の時計が腕輪バングルのようにも見えた。文字盤が見当たらないし、左右の手首にあるので時計では無さそうだとした。やはり腕輪なのだろうか？

ニアは、アーヴィンがアクセサリを身に着けるような人物では無い事を知っている。

『ねえ、これ何？』

もう一度訊いてみた。

『リストバンドさ。見て解らないか？』

そう言っではぐらかした。

まさかこれが軍の開発した対サイバノイド用サイコシールドであるインターセプタの末端だとは言えない。

『嘘』

『嘘なんて言ってない』

アーヴィンはシラを切る。

『なら、片方頂戴』

『ええっ？』

慌てて口を噤くんだ。

その彼の反応にニアは一層怪しむ。

『タダのリストバンドじゃなかったの？』

意味ありげな上目遣いで睨み付けた。

『あ？ ああ……そうさ。タダのリストバンドだ。けど、左右両方揃っていないと意味無いだろう？』

アーヴィンはニアに嘘を見透かされやしまいかと内心穏やかではなかった。

『それとも、彼女に貰ったとか？』

もう一度上目遣いで軽く睨んだ。半分鎌掛け、半分焼きもちだった。

「……彼女？ どの彼女だ？」

意表を衝かれてつい真顔で受け答えしてしまった。

「えっ？ どの……って？」

「……」

気不味い空気が辺りを満たした。

## 第5話 持てる力

「お前、それ……」  
「？」

大男はニアの顔と右腕のリストバンドを交互に見て、信じられないという表情をした。

ニアは自分の手首から視線を離して大男を見上げる。

「それが、使えるのか？ …… 単独のリストだけじゃ役立たねえつてのに」

「これが何だか知ってるの？」

ニアは自分が殺されそうになっていた事も忘れて大男に問い掛けた。

「それは……」  
言い掛けて我に返った。

「じ、冗談じゃねえ！ 知っていたってお前に教える義理はねえ！」

（ニア！）

「え？ マック？ …… 痛っ！」

いきなり頭の中でマックの声がした。

ニアは顔をしか顰めて頭痛に耐える。

（うわ？）

僕がニアの中に戻った途端、ニアの右手にあつたリストバンドが一層強く光り輝いて、辺り一面を照らし出した。

リストバンドはそれ自体が鼓動しているように淡い黄緑色に輝き、

ニアの身体を包み込んだ。

「きゃん？」

ニアの体がすうっと宙に浮かび上がった。

まるで無重力に居るみたいに。



「何だ？ 何が起こった？」

大男がニアの様子に驚く。

「ちよつとおお！ 何これ？ マックなのお？」

ニアは手足をバタつかせた。

（うわ、何持っているの？ 早く（インターセプタ）外して！ それに何だよその格好はア！）

僕は慌てた。

目の前に敵が居るのに隙だらけだ。

これじゃあ殺つて下さいと言っているのと同じじゃないか。  
しかも、胸まではだけで。

（何やってんだよ！ 恥しいとか思わないのかよ？ もお！）

（別にイ。勝手に遣つて来てイキナリそれは無いでしょ？）

（べつ、別に……って……）

僕は啞然とした。

僕に対してだけなのか、それともニアには羞恥心なんて欠片も無  
いからそんな事が言えるのだから全く理解出来ない。

「ふう〜んっだ」

ニアは手早く破れたＴシャツの裾を臍<sup>へそ</sup>の上で結んだ。

（助けを呼んだのは自分だろ？）

僕はムツとなった。

（何ですってえ？ アンタなんか呼んじやいないわよ！）

お互いがムカツと来る。

「インターセプタの末端にこれ程のパワーは無いぞ。どう言う事だ  
？」

大男が宙に浮かび上がったニアを仰<sup>あお</sup>ぎ見て呟いた。

「へえ〜これって、インターセプタって言うんだあ」

（んな事言ってる場合じゃ無いよ！ うわああ！ 来たアあ！）

大男は隙だらけのニアに刃<sup>や</sup>を振り下ろす。

ニアは身体を屈<sup>かが</sup>め、両腕をクロスさせて顔を庇<sup>かば</sup>った。

刃はニアの身体までは届かなかった。

僕達二人の力で発動したインターセプタの強力なシールドが張り巡らされていたからだ。

刃を何度も狂ったように振り回して打ち下ろすが、結果は同じ事だった。

ニアの身体を通して、僕は何となくこの「インターセプタ」の使い方が解った気がした。

インターセプタの光に包まれたまま、ゆっくりとニアの身体が床に降りる。

まるで無重力空間に居るみたいに。

ニアに投げ飛ばされた少年ともう一人の男が左右から飛び掛つて来た。

咄嗟に僕はニアの身体を通して彼等に向かって左右に手を翳した。

（止まれ！）

翳した両の掌に「氣」を高めて集中させると、二人の動きがピタリと止まった。

そのまま翳した手を水平に薙ぎ払う。

二人の身体は何かのトリックにでも掛かったみたいに引っ張られ、崩れたドラム缶の山に物凄い勢いで飛ばされた。

「やった！」

ぐつと拳を握る手に力が籠る。

（ちよおつとお！ 勝手にニアの身体使わないでよ！）

ニアが怒った。

「助けて遣ったのに、それはないでしょ？」

僕は横柄に言い放った。

（今の僕は以前の僕じゃない……これ……これが僕の力なの？ 全身にパワーが漲って来る……す、凄い……何て凄いんだ！）

僕は自分の思い通りになる力と、このニアの身体に軽く興奮気味だった。

（何ですってえ！）

ニアの声が悲鳴のように聞こえた。

「しゃらくせえ！」

大男の両肩が開き、体内に装備していた機銃を撃って来る。

弾は全てインターセプタのバリアに命中した。

その威力はインターセプタに保護されていたニアの身体ごと吹っ飛ばす。

そのまま廃屋の古惚けた壁面に激突して大きな穴を穿った。

機銃の硝煙と埃で辺り一面にもうもうと白煙が立ち込める。

煙に咳込みながら、ニアの身体を支配してしまった僕はすつと力強く立ち上がった。

でも次の瞬間、大男の背後に円筒形の水槽が置かれているのを見てしまった。

僕は息を呑んだ。

「彼等に勝てるかも知れない」その驕おごった自信は、物の見事に一瞬にして粉碎されてしまった。

言い表しような無い不快な感覚に、思わずよろめいて二、三步後退った。

僕が、その用意された水槽が何を意味するのかを理解してしまっただからだ。

（イヤだ……）

僕は無意識に首を横に振っていた。

『タスケテ……』

全身に激痛が奔って、僕の身体は中の溶液と入り混じり、文字通りに分解された……僕の身体を失った時のあの忌まわしい記憶がフラッシュバックして鮮明に蘇よみがえる。

『タスケテ……』

（イヤだ！ もうあの中には入りたくない！）

心臓の鼓動が早くなり、息が詰まって苦しくなった。

恐怖で押し潰されそうになり、全身ががくがくと震え出す。

『タスケテ……』

（駄目だ。ここで後ろを見せちゃ駄目だ……殺される前に殺れはいんだ……そうさ、殺れればいいんだ！今の僕になら出来る……きつと出来る！）

（マツク！何を言ってるのよ？自分が何を言ってるのか解ってるの？）

僕の中のニアが叫んだ。

けど、もう遅い。

僕は完全にニアと入れ替わってしまっていた。

僕は怯えながらも大男を真正面から上目遣いで睨みつけた。

別に上目遣いをしようとしてやったんじゃない。ただ、僕との身長差があり過ぎたからそうなったただけなんだけど、大男はそれが気に入らなかつたらしい。

「ほおお、俺から逃げ出さねえとは良い度胸じゃねえか。上等だ」

大男が唸った。

高い所から僕をクズか何かの様に見下して余裕たつぷりにニヤリと笑う。

（逃げるな……逃げるな僕……）

僕は暗示を掛ける様に心の中で何度も同じ言葉を繰り返す。

（逃げない。僕は逃げない……逃げるものか！）

呼吸が荒くなり、全身が軽く痺れる様に麻痺した。

「うわああああ！」

僕は向かって突進していた。

「舐めるなあ！」

大男のゴツイ腕が大きく振り翳されると、向かって来た僕に容赦無く振り下ろす。

身体が軽い。

僕は幾度と無く大男の攻撃をかわし、相手の力を受け流した。

ニアがオースティンさんから教わって来た全てをこの身体に覚え込ませている。

僕はニアの力を引き出しさえすれば良いだけだ。

「痛っ……」

アーヴィンは一瞬、何が起こったのか把握出来ないでいた。気が付くと、物凄い勢いで投げ飛ばされていたからだ。

彼は頭から無様にドラム缶の山に突っ込んでいた。

投げ飛ばされた衝撃で視力が中々回復して来ない。

（……これは「俺」……なのか？）

次第にノイズ雜<sup>ま</sup>じりだが映像が結ばれて行く。

目の前に自分の片手を翳<sup>かざ</sup>してみた。

少年の手があった。

日焼けをした様な赤銅色の肌が一層手を細く華奢<sup>けあしや</sup>に見せる。

そこには何年か前の自分が居た。

「アーヴ！ 何をしている？ いつまでも寝てんじゃねえ！」  
ぎょっとして跳<sup>と</sup>び上がりそうになった。

頭の中で大男 キョウの声が響く。

（そうか、俺のI・Dを持ったサイバノイド（ドール）に換装出来たのか）

アーヴィンは上になったドラム缶を押し退けて立ち上がろうとした。

途端に何かが自分の上に落ちて来た。

彼は、再びドラム缶の中に埋もれる事になる。

落下して来たのは、自分と同じグレネイチャの容姿を持った少年と、彼よりも年上の東洋系の男の二人だった。

「トム……なのか？ それに、イェン」

言った自分の声の高さに驚いて、思わず喉<sup>のど</sup>に手を当てた。

変声期前の声だ。自分のものだとは言え何だか猛烈に気恥ずかしくなった。

一体、いつ頃の自分の姿をコピーしているのだろう。

他のメンバーを捜して辺りを見廻したが、残る二人が見当たらない。

（ダグとラジエットは三島さん……か）

二人が三島の殺害に向かったであろう事は解っていた。既に手は打っており、エルフィンに策は伝えてある。

不本意ではあったが、自分があれ程嫌っていた軍の力を頼る以外、今は三島を護る為には外に手段は無かった。

（けど、どうしてキョウ自身が行かない？）

キョウの性格から考えても腑に落ちなかった。

自らの手を汚し、人殺しを一種のゲームとして楽しんでいたキョウが、あるう事がダグ達他の者に一任している。

アーヴィンは心の片隅に何か引つ掛るものを感じていた。

「アーヴ、退け！」

トムが無表情で言った。感情が全く無いのがコピーA・Iのサイバノイド（ドール）の特長だ。

「あ？ ああ」

落下した衝撃でアーヴィンがトムの上に入れ替わって乗る形になった。

慌ててトムの上から退く。

（トム……）

胸が熱くなった。

少し掠れた少年の声。

二度と耳にすることは無いと諦めていた懐かしい声が聞こえた。

本来のI・Dを持たないドールであったとしても、彼にとっては四年前そのままのトムの姿だった。

アーヴィン達はドラム缶の山を脱出した。

そして、思っても見なかった光景を目にする。

（あれは……インターセプタ？）

白煙に包まれて鉄筋製の廃屋が次々に壊されて行く。

その中で闘っているキョウとニアの姿があった。

体格も、パワーの上でも全く話になる筈の無いニアが、見覚えのある強烈な発光体に包まれて、大男のキョウと対等に相手をしている。

ニアは優れた敏捷性を発揮してはいるものの、紙一重でキョウの圧倒的なパワーにモノをいわせた攻撃を何とかかわしている状態だった。

何度もキョウを捕まえて動きを封じ込めようと試みてはいるが、ニアの手ではキョウの太い腕は捕まえられない。

捕まえ損ねる度にニアの身体は投げられ、廃材の山に放り投げられ、叩き付けられた。

（本当にニア……なのか？）

何度目かに立ち上がったニアの凄惨な顔付きは、アーヴィンでも退いてしまいそうになった。

微かな笑みを浮かべている口元と鼻からは流血し、その瞳には狂気に似た光が見て取れる。

その右手にインターセプタが拍動するように光を放っていた。

（ニアがリスト単独で作動させた？ ……！ まさか、マックと入れ替わって……）

アーヴィンの推察通り、マックが死からの強い脅迫観念と「インターセプタ」のパワーでニアと交代し、彼女を内に封じ込めてしまった状態だった。

何度もキョウに投げ付けられ、その度にニアの身体は廃屋の柱や壁、資材等に叩き付けられる。

喩えインターセプタのサイコシールドで保護されていても限界はある。

外見上では異常が無くても、内部にはかなりのダメージがある筈だ。

ずっと強い衝撃が続けばニアの体が持たない。

（拙いぞ。あのままではニアが……）

『助けて……』

アーヴィンには聞こえる筈の無いニアの声が、悲鳴のように聞こえていた。

「くそお！ トム！ アーヴ！ イエン！ コイツを撃て」

ニアに梃子ていす摺りながらキヨウはアーヴィン達に命令を下した。

「うつ！」

目の前が真っ赤になった。

同時に強烈な眩暈めまいがアーヴィンを襲う。

恐らく、キヨウの言った言葉がキーワードになっているのだろう。立って居られず、思わず両眼を押さえてひたまつ跪いた。

それまで蒼かったアーヴィンの瞳が瞬またたく間に真紅に染まり、ニアの身体を包んでいる光と同じ光が彼の身体を覆おおう。

（ブラッディ・アイ！ …… インターセプタか？）

トムもイエンもアーヴィン同様に内蔵されていたインターセプタを発動してはいるが、アーヴィンとは違って覚醒剤のブラッディ・アイによる副作用など微塵みじんも見受けられ無い。

素早くイエンが銃の安全装置を外した。

トムも彼に倣ならう。

（ヤバイ！）

自分の意思に反して、勝手に右手が拳銃を抜いている。

キヨウに腕を壊こわされる前の自分のE・Dをコピーされていた。

視界にグレーのフィルタが降りて、ターゲットを捉とらえる白いクロスポイントが現れる。

アーヴィンは辛うじて動く左手で自分の右手を押え付け、本来のA・Iに抗あひがった。

トムとイエンがニアに向けて発砲した。

ニアの身体が吹飛ばされ、辺りに硝煙しょうえんが立ち込める。

アーヴィンはキヨウの命令を振り切ろうとするが、身体がコントロール出来ない。

キヨウが不自然な動作をするアーヴィンの様子に気が付いた。



「どうしたアーヴ？ 不具合か？」

「！」

目の前が真っ暗になった。

急に身体がずしりと重くなり、制御出来なくなった。  
耐え切れずに崩れるように倒れる。

（A・I機能を落としたのか？）

脳裏にサイバノイドに換装したマツクの顔が浮かんだ。

（……誰かがこの眼を盗み見ている）

アーヴィンは機能を落された時に、何処からか自分の眼を使って  
状況を覗き見ている者が居る事に気付いた。

逆に相手のセキュリティに介入するウィルスを送る

程無くして立入っていた者は接続を切った。

（誰だったんだ……？ このドールに仕組まれているって事はトム  
達も同じか？）

心の隅に引つ掛りを感じながらも、アーヴィンは自分のドールを  
設定起動させた。

キョウからの制御機能解除にやや時間を要したが、これでアーヴ  
インは彼の操作から解放される。

（ボディはミューズ・バイオロジカル・テクノ社製か。しかもイン  
ターセプタ内蔵ときた。おまけに……）

アーヴィンは右目を覆ったまま、荒い息を吐いた。

四年経った今でもこの薬物は彼の体質には合わない。

ブラッディ・アイのお陰で視界がぐらぐらして定まらないし、気  
のせいか気分まで悪くなって来た。

立ち上がったアーヴィンに気付いたトムとイエンが振り返る。

一番驚いていたのは他ならぬキョウだった。一瞬の隙にニアの蹴  
りが鳩尾に入り、キョウは苦痛に身体を折った。悪態を吐いてニア  
に向き直る。

「……トム、イエン。二人でキョウを食い止められないか？」

無駄だとは思ったが、思い切って言ってみた。

「アーヴ？ 俺の聞き間違いか？ それともお前がおかしくなったのか？」

無表情のトムが小首を傾げる。

（駄目か）

トムがアーヴィンのこめかみに銃口を向けた。

彼の表情には躊躇<sup>ためら</sup>いの断片さえ窺<sup>うかが</sup>えない。

元々、ドールには感情や表情までは表現出来るほど繊細には造られてはいない。

ドールとは文字通りの意味で、本来のオリジナルからのI・Dをコピー<sup>ただ</sup>しただけの唯<sup>ただ</sup>の機械人形だ。

「その、どっちでも無い」

ゆっくりと両手を上げかけていたアーヴィンの左肘が動いた。

素早くトムの腕を銃ごと撥<sup>は</sup>ね上げる。

トムの手から銃が& a m p ; # 2 5 4 4 5 ; (も)ぎ取られた。

イエンが銃口をアーヴィンに向ける。

立て続けに撃った二発の銃弾がスローモーションになって見える。

勿論、インターセプタを使用している二人にとっても同じ事だ。

二人は全弾を撃ち尽くすと拳銃を捨て、脚部に内蔵されていた長剣<sup>さやばし</sup>を鞘走<sup>さやばし</sup>らせてアーヴィンに襲い掛かった。

アーヴィンは素早くバック転で間合いを取るが、着地の瞬間にバランスを崩して足元がふらついた。

電子脳が揺れているのか、それとも自分の視界が揺れているのか定かでは無かったが、モノが二重にダブって見える。

「二人共……止める！」

視界が極度に揺らめいて、立っているのがやっとだった。

この状態でまともにトムとイエンの二人を同時に相手出来るとは思わなかったし、争いたくも無い。

（アーヴの奴、どうしちまったんだ……）

キヨウは三人を目の前にして呆然と立ち尽くした。

（制御装置を切っているのにどうして動いている？）

二人に一方的に押されて後退しているアーヴィンを怪訝（けげん）そうに見詰めた。

（……そういや以前、誰かに聞いたことがある。人の魂が同じI・Dを持ったドールに憑依（ひょうい）するって話……あれは迷信じゃなかったのか？）

「トム！ 俺だ！」

アーヴィンは彼等の刃（やいば）を何度もかわしながらも必死に訴える。

イエンの一振りが足元を狙う。

かわされた刃先が床に刺さって固定され、イエンの動きが止まった。

アーヴィンはタイミング良く剣の側面を真横から蹴った。

剣の刃が真つ二つに折れる。

本来、人間の持つことが出来る以上の力がサイバノイドにはある。一般のサイバノイドは力を抑制するリミッタが内蔵され、法的にも厳重に規制されているが、この場に居合わせているどのドールにも抑制装置などの仕様（せいしやく）は施（ほ）されていない。

アーヴィンはバランスを崩したイエンの右頬に、左のストレートをお見舞いした。

イエンの身体は廃屋の外壁（うが）を穿（う）って外に放り出された。

トムが水平に大きく剣を薙（な）ぎ払った。

アーヴィンは彼の渾身の一振りをかわそうとしたが、間に合わない。

アーヴィンは決して武器は手にしないと固く誓っていた誓（ちか）いが脆（もろ）くも崩れた事で顔を顰（しか）めた。

尤も、アーヴィンの換装しているドールに表情機能は無いので、心の中で顰（しか）めたただけだ。

アーヴィンは剣の柄に手を掛け、鞘（さや）から半身（はんみ）を出してトムの剣を

受け止めていた。

「どうした？ 抜かないのか？」

無表情のトムが言った。

「……」

「丸腰で俺に勝つ心算か？」

「だったら？」

「舐めるなッ！」

トムの剣に加わる力が一段と増した。

振り下ろされる度にアーヴィンは鞘から出さない半身の剣で受け止める。

何度も火花が散り、金属の鋭い音がした。

逆上したトムの剣先が、アーヴィンの剣を絡めるようにして弾き飛ばした。

剣の切っ先が目の前に迫って来る。

「この……」

アーヴィンを仕留めた心算だったトムの声が呻くように漏れた。彼の両手がトムの剣を左右からがっちり挟み込んでいた。

けれど、変声期より以前の小柄だった姿をしたドールのアーヴィンと、既に体格の良かったトムとでは力の差は歴然としていた。

トムは全体重を掛けて剣を押した。切先がアーヴィンの額を傷付ける。

真っ赤な擬似体液が模造皮膚から溢れ出し、眉間に流れる。

轟音がして、二人の居るすぐ傍の壁が大破した。

放り出されていたイエンが飛び出して来る。

気合と共に、折れて寸足らずになった剣をアーヴィンの頭部目掛けて水平に薙ぎ払った。

アーヴィンはトムの剣をまだ両手で挟み込んでいて身動きが取れない

イエンの折れた剣が目の前に迫る。

金属の鈍い音がした。

アーヴィンは動けないにも関わらず、イエンの剣を自分の口で受け止め、噛み砕いていた。

勿論、人造人間のドールとはいえアーヴィンが無傷で居られる筈は無い。

左右の端が裂け、口中が疑似体液で真っ赤に染まった。

口中の剣の破片と疑似体液を乱暴に吐き出す。

アーヴィンは剣を引き抜こうとするトムの力を利用して手を放し、すかさずイエンの鳩尾に左の足刀を放つ。

「く」の字に曲がったイエンの後頭部に鋭く踵を落した。

イエンは腹部から青白い放電を出して不自然な動きをする。

頭部を遣られて機能制御にエラーが発生した。

トムは自分の力を利用してよろめき、尻餅をついた。

アーヴィンはトムの剣を握った手を逆手に捕って、彼の動きを封じ込めようとした。

剣はトムの手から滑り落ち、床に突き刺さる。

背後からイエンの踵落としが来た。

アーヴィンは捕えていたトムの鳩尾を蹴り、自分もその場を離れた。

イエンはトムごとアーヴィンを狙っていたからだ。

凄まじい轟音と白煙に包まれて廃屋の床が抜け、イエンの身体が地下に呑み込まれる。

トムはアーヴィンに蹴られて背中から壁にぶつかった。

剥き出しになっていた支柱の一部が肩に刺さり、串刺しの状態になる。

一時的に身動きが取れなくなった彼の背後に素早く廻り込み、右腕を固めた。

トムは唸り声を上げて捕らえられた自分の右腕を自らが折り、アーヴィンの拘束から逃れた。

痛覚の無いドールだから出来る芸当だ。

尤も、こんな無謀な事をする者を見たのは、彼の知る限りでは二

アの次に二人目だった。

「おおお！」

「トム！」

不覚にもアーヴィンに捕らえられたのが気に入らなかったようにも見えた。

トムは突進して挑み掛かって来る。

アーヴィンは崩れかけた廃材を足懸りに昇り、廃屋の天井付近まで追詰められて行った。

「止めるッ！」

（無理なのか？）

何度目かのトムの拳と蹴りがアーヴィンの上段（＝顔）を狙う。

素早く腰を落して軸足になっているトムの足首を内側から払った。バランスを崩したトムが十メートル近くある天井付近の梁から落下した。

轟音と大量の埃がもうもうと立ち込める。

彼の質量が見た目とかけ離れている事が解る。

アーヴィンはトムを追って、回転を加えて身軽に飛び降りた。

落下したトムがニアの方へと向かったからだ。

「うわ？」

床に着地したと思った途端、金属で補強されていた筈の何十センチもの厚さのコンクリートの床が抜けた。

事前に階下に爆薬が仕掛けられていたのかと思う程の凄まじい破壊力だ。

そのまま身体がイエンと同様、地下室に呑み込まれる。

先にトムが落ちた事で床の強度が脆くなっていたのかも知れない。

（何てエ質量だ……）

予測不可能だった出来事にアーヴィンは慌てた。

（これがサイバノイドの姿なのか？ 嚴重に規制を掛けなければならない理由はコレなのか？）

サイバノイドが開発されたのは、ほんの数年前の事だった。

身体の殆どの機能を失い、バイオノイド処置が不可能になった場合にのみ適応される処置。脳核に電子制御機能を移植して、ごく僅かな本人の細胞とナノマシンを併用させるがその大半は所詮機械に他ならない。

この処置方法が確立されて以降、当然の事ながら死亡者が激減した。

しかし、近年になって一部の世論にサイバノイドの全面廃止を呼び掛けた動きが目立って来ていた。

その理由の一つに、「死」という概念が希薄になり、命の尊厳が軽んじられ始めて来た事が挙げられる。

殺人事件には決まって頭部を破壊する凶行が続発した。

脆弱な肉体を自らが放棄し、高価なサイバノイドに換装する事が若者の間で一種の流行にさえなりつつあった事も問題視されていた。もう一つに、医学倫理上許される事の無かったオリジナルのサイバノイドのコピーが現れ、問題が起こるようになった事が挙げられる。

このコピーが当初、「ドール」と呼ばれていた。

ドールが現れたのはある意味必然的だった。

サイバノイドには機械と同様、何年かに一度のメンテナンスが必要だ。

その際に培養保存されていた本人の細胞機能が汚染されずに正常に働いているかどうかを見極めるテストが実施される。

このテストを行う為のダミープログラムを持っているのがドールだ。

使用者一人々に合ったオーダーメイドのサイバノイドを造る為にはかなりの金額を要する。しかもメンテナンスもとなれば更に費用は懸かる。

国が多額の費用を負担して援助するとは言え、やはり一般市民が

サイバノイドに換装出来るのはまだ先の事だ。

当然、オリジナルである使用者が何らかの理由で死亡すれば、それまで保存されていた細胞やドールは法律上破棄処分となる。

場合によっては使用者が換装すれば良いだけの待機状態になっていたドールも稀に存在していた訳だ。

法の網を潜<sup>くぐ</sup>って生身の人間が他人の臓器を売買するのと同じく、ドールとなったサイバノイドも臓器と同様の道を歩む事になる。

I・Dの全く違う他人のドールを手に入れて自分がサイバノイドとして成りすまし、換装する。

但し、購入者の気を惹くように、違法にチューンナップされていたり、銃や刃物等凶器を内蔵していたりと、悪質に改造されたものばかりが出回り、これらが犯罪に深く関与されているのも否めない事実だった。

今、アーヴィンが換装しているドールは、違法に流出された物でもなければ規制を掛けられている正式なドールでもない。人間を意図も簡単に殺戮<sup>さうりく</sup>する道具としてのドールだ。

「……」

（生身の人間が嫌う筈だ）

アーヴィンは眼を伏せた。

自分を含めた彼等全員が死亡しても猶、殺戮の道具として扱われている事実を知り、哀れに思った。

トムはサバイバルナイフを取り出し、唸り声を上げてアーヴィンに襲い掛かった。

容赦の無い攻撃にアーヴィンの左腕が折れ、右膝が裂けた。

模造皮膚の中からショートした火花が散る。

ナイフが何度もアーヴィンを狙って弧を描き、空を切つて一閃した。

全身至る所を切り裂かれるが、それでも致命傷にはならない様に



必死でガードする。

サイバノイドのマックの身体ほど精密では無かったが、疑似血液が勢いよく噴出する。

トムの顔にアーヴィンの返り血が散った。

薄暗い所であれば猶の事、人間のそれと同じに見える。

換装しているアーヴィンにとっては、まるで局所麻酔を全身に処置された状態だった。

自分の身体として動かす事も物に触れたりする感覚も認識出来るが、痛覚だけが無い。

局所麻酔なら、今までに幾度と無く体験して来た。

勿論、治療の為の処置で一時的なものだ。麻酔が切れた後の代謝後も暫らくは鎮痛剤を投与しなければ、猛烈な激痛に襲われる。

不思議な感覚

夢だとも思いたかった。

いや、夢なのだろう。

現に自分の身体はマックとまだあの拘置所に居るのだ。

痛みは無いが、精神的に与えられるダメージはそれなりに大きい。

## 第6話 ドール

（きゃあああ！）

頭の中でニアの悲鳴が聞こえた。

一瞬の間、僕は意識を失っていたみたいだ。

何だか周りの様子が変だ。

僕はやっとの思いで廃屋の壁にめり込んだニアの身体を引き剥がした。

目の前に映ったものは、同じグレネイチャのサイバノイドに一方的に攻撃され、刃物で切り刻まれているあの人のコピーI・Dを持ったサイバノイド（ドール）だった。

（仲間割れ？）

最初はそう思った。

でも、オリジナルじゃないドールにそんな事が出来るだなんて聞いた事が無い。

大体、人間の持つ複雑な感情までは忠実に復元されていない筈だ。

（だったらオースティンさんは……？）

「うっ……」

突然、胸に不快感を持った僕は堪らずに吐き戻した。

床にどさりと真っ赤な塊が落ちる。塊は床に平らになって飛散した。

（……血の塊！）

僕はそこで初めて正気に戻った。

これはニアの身体だ。

僕の身体じゃ無い。

右手の甲でぐいと口元を拭った手が止まる。

手には勿論拭った血が付いていたけど、その腕にも全身にも……至る所に内出血の痣が無数に出来ている。

（……ごめん）

僕は自分を見失い、インターセプタとか言う装備の威力に頼り切  
って無茶をしていた。

これがニアの身体だという事さえも忘れてしまつて……

（ニア、ごめん……）

彼女の身体を傷付けた後ろめたさに苛まれる。

どうしてかな？　僕はずっと謝つてばかりだ。

（マック！　彼を助けて！）

（彼？　……あの、オースティンさんそっくりの？）

（うん）

僕は躊躇った。

『……本当は、俺が行つてどうなる事でも無いんだ。俺が全員の後  
輩だし、一番の根性無しだったからな。実際、サイバノイドであつ  
ても元は仲間だった。その連中に俺が銃を向けられるのか、正直言  
つて自分でも分からない。自信は……無い……偉そうな事を言つて  
済まなかった。けど、お前達を逃す事なら出来るかも知れない。チ  
ヤンス位ならきつと出来る』

頭の中で、オースティンさんが言つた言葉が蘇った。

『お前達を逃す事なら出来るかも知れない。チャンス位ならきつと  
出来る』

最後に言つた彼の言葉が何度も頭の中を駆け巡る。

幸い、大男はオースティンさんに気が向いている。

（逃げ出すのなら今だ！）

これ以上ニアの身体を傷付けたくは無かつたし、既に闘争心の欠  
片さえ失ってしまった僕は恐怖に駆られていた。

（あの人、きつと殺されちゃうよぉ！）

（そんな……僕だつて、怖いんだ。行けばこっちが殺されるよ）

僕は二、三步後退ると彼等に背を向けた。

（マック！　あの人を見殺しにする気？　許さないよ！）

「あつ！」

身体中が燃えるように熱くなった。それこそ、ニアの身体が融け

てしまいそうなくらいに。

僕は思わず両腕を抱えて跪いた。

（彼を見捨てる心算なの？）

ニアの怒りが伝わって来る。

（待って、落ち着いて。今しか逃げるチャンスは無いんだよ？）

（駄目、駄目だよ！ そんなコト絶対に許さないからね！）

解ったのかな？ あの少年がオースティンさんだつて。

けど、ニアは人間とサイバノイドの区別さえ出来ていない筈なんだ。そのニアに、ドールの少年が換装したオースティンさんだと判る訳無い……多分……

（ニア、何をそんなに怒っているのさ。あれはタダのドールじゃない？）

僕は猶も平静を装ったけれど、無駄だった。

「え？」

それまで自在に操ることが出来ていたニアの身体が、急に云うことを効かなくなった。

耳鳴りもする。

金縛りつて、こんな状態なのかな？

（ニアを馬鹿にしないで）

すぐ目の前の床が裂けた。そこから凄い勢いで人が飛び出して来る。

悲鳴を上げながらも、ニアの右手が動いた。

飛び出して来た人はニアの渾身の一撃を喰らい、そのままの勢い

……いや、それ以上の勢いで優に十メートル以上もありそうな吹き抜けの屋根を突き破った。

「……」

僕はただ呆然として大きな穴が空いた天井を見上げていた。

あまりの速さに僕は何も反応出来ないでいた。

（い………今のは………ニアがやったの？）

トムの片手がアーヴィンの顔面を驚掴みにしていた。

アーヴィンは彼の手から逃れようと必死にもがいているが、ガツチリと捕らえられたままで逃げ出す術が無い。

「このまま握り潰してやる！」

アーヴィンの頭部がメキメキと物凄い音を立てて軋む。

今にもアーヴィンの眼球が飛び出して頭部が砕かれてしまいそうだ。

（マズイ！ このままじゃ……）

アーヴィンのA・Iが異常を来たし、視界に映像が入らない。

「トム！ 俺だ！」

「！」

アーヴィンの必死の呼掛けに応えるようにして、一瞬トムの動きが鈍った。

アーヴィンは隙を突いてトムの片手を両手で掴むと、中段（胴体）を両脚で蹴って逃れた。

十分な間合いを取る。

万力のように締め付けられていたA・Iは、自動修復機能をフルに発動させる。

アーヴィンの視力は回復したが、それでも視界が揺らめいているのは治らない。

「ドールが……？」

キョウは惚けたようにアーヴィンを凝視して呟いた。

彼の制御機能を停止させてからそれ以降、利き手が何故か左手に替わっている。

トムのフェイントを掛けたローキックが来る。

アーヴィンは一步退いてかわす。

トムはローキックを引かずにそのまま重心を移して廻し蹴りの体勢に入った。

彼よりも逸早くアーヴィンは上段の回し蹴りを放つ。

トムは辛うじて蹴りが顔面に決まる瞬間、体勢を崩してかわしたが、前のめりになって倒れた。

キヨウはトムの動きに精彩せいさいさが無くなっている事に気付いていた。「トムまでもか？ ええい一体、奴等に何が起こったんだ？」

キヨウは苛立ちいらだ、自分の周囲を警戒する事を怠おこたった。

「動くな！」

甲高いかんだか、凜とした少年の声が庫内に響いた。

アーヴィンは顔を伏ふせたまま、彼の左前方に居るキヨウに拳銃を向けていた。

キヨウの方を向いていないのに銃口は正確に彼の胸元むねもとを捉とらえている。

アーヴィンは視界の焦点を絞しぼらずに広範囲を見ていた。これなら周りの状況も瞬時に把握し、対応する事が可能だ。

アーヴィンの正面で、手を突ついて立ち上がるうとしているトムの動きが止まった。

「う……」

アーヴィンの赤く見えている視界が霞かすむ。

瞬まばたきを何度しても同じだった。

（タイム・アップ……？）

眩暈めまいは依然続いていたが、無理をしてもこの時を逃せば次は無いと直感的に覺さとった。

徐々にではあるが、同調していた意識が消えかかっている。

アーヴィンは自分の身体が危険な状態に陥おちいっている事を本能的に感じていた。

不意を衝つかれたキヨウの顔が歪ゆがむ。

「……どういう事だ？」

「俺が知りたいね。三島さんの奥さんと娘さんを何故手に掛けた？」

「お前…… I・D が……」

キヨウの両目が大きく見開かれる。

「答えるッ！」

苛立つ様に叫んだ。

アーヴィンの口調は彼の声質と容姿には全くそく適わないものだった。  
おもて面を上げてキヨウに真正面から向き合った。

蒼い筈の瞳が、使用されたブラッディ・アイによって真紅に染ま  
っている。

彼の気迫に吞まれてキヨウは気後れした。

はため傍目から見れば、子供に銃を向けられて脅迫されている大男だ。

「クソッ……」

（ザマあ無えな）

キヨウは毒づきながらも軽く両手を挙げた。

「言えよ！」

アーヴィンの狙った銃口がキヨウの胸から眉間みけんへと移動する。

（他の連中には銃が向けられなくても、この俺には向けられる……  
か）

命令一つ取つても、素直には「はい」と答えなかった昔のアーヴ  
インそのままだ。

真っ紅な彼の瞳が自分に逸それる事無く、真っ直ぐに向けられてい  
る。

（しかも、ご丁寧に俺が奴に組み込まれていたインターセプタを作  
動させちゃった……）

今、ガタの来ているアーヴィンとここで戦つても、自分に勝算が  
有るようには思えなかった。

力の差は歴然としていたにも関わらず、キヨウは彼の気迫に完全  
に吞まれている。

（馬鹿だな俺は……）

キヨウは自らを嘲笑あざわらった。

「……気に……」

「？」

アーヴィンは目を細める。

「……そうさ、気に入らなかつたんだよ！ 何もかもが！ 全部が！」

投げ遣りに答えた。

「……たつた、それだけで？」

「ああ！ 皆、俺達には腫れ物か何かを見るような目で見た！ そんな目でしか俺達を見なかつた！」

「そつしたのは誰だ？ 他人からそんな眼で見られるようにしてしまつたのは自分じゃないか！ 自分の力に驕り高ぶつて必要以上に傷付けて……相手を恐怖で抑え付け支配しようとしたのは誰でもないキヨウ、お前自身だ！」

キヨウは悪怩<sup>わるひ</sup>れて眼を逸らせた。

「……ああ、俺だ。そうさ、俺がした事だ。なのに三島は……」

「三島さんは違つていた……？」

「そうだ。でも、あの二人は同じだつた。いや、娘の方は別の意味で少し違つていた」

キヨウはそこまで言う<sup>い</sup>と眼を伏せた。

「……堪らなかつた。いつその事三島の存在さえ煩わしく、鬱陶しくさえ思つた」

両膝を着いて力無く項垂れる。

「どうしようもなかつた。無闇に連中を止めれば今度は俺が舐められる。恐喝、暴行なんぞ当たり前。俺達が遣つて来た事は数え上げればキリが無い。今更どうやって止められた？ だが三島の娘だ。相手が悪い」

「だから殺つた……か？」

アーヴィンはキヨウの言葉を引き継いだ。

キヨウは黙つて顎を引く。

「後でセキュリティのデータを書き換えておいた。俺達は此処へは来なかつたとシラを切り通す心算だつた」

「三島さんを甘く見るなよ。唯の事務職だとも思つていたのか？」

（あの人が昼行灯と呼ばれていた訳を……こいつ……何も判つちや



いない)

「だからあの日のうちに三島も殺る心算だった」

「馬鹿な……大切な人の存在さえ目障りめざわりだったのか？ ほんの一握りでも自分達を解ってくれようとしている人が……居てくれる事さえお前は拒絶したのか？」

キヨウは声も無く肩を揺すって笑っていた。

「その挙げ句がこのザマだ。時を同じくしてアーヴ、お前とトムが起こした傷害事件で俺達の存在が明るみになった。」

「待ってくれ。俺達は傷害事件なんか起こしていないぞ！」

「表向きには警察沙汰になっからていなかったただけだ。四年前、お前とトムは数人の男共に絡まれていたグレネイチャの女を逃がした事があつた筈だ」

「あ？ ……ああ」

思い当たる節があつた。

アーヴィンとトムはよく夜中に抜け出しては、峠で車やバイクの運転技術を競い合っていた。

そこで知り合った何人かと夜更けに一緒に居た時、四、五人の男達に絡まれていた自分達と同じグレネイチャの女性を助けたのだ。

一緒に居た者達は彼等が大人で人数でも不利だと二人を引き止めたが、二人は見てみぬふりをする事が出来なかった。

格闘技の有段者になると、それを喧嘩等で行使すれば逮捕されるが、アーヴィン達は充分な技量を持つているにも関わらず、有段者である登録の一切を受けてはいなかった。

『軍にバレル心配は無い。絶対にアシは付かない』

アーヴィン達はそう思っていた。

「そいつ等の一人に軍のお偉いさんの馬鹿息子が居た。俺達の事もある。元々俺達の処遇しよぐうを持て余していた軍は、手っ取り早く金も時間も掛からない処分する方法を選んだのさ。俺は自分の身体と仲間を……失くしてから……解つた。だが、後戻りは出来ない」

(……罨?)

アーヴィンはキヨウを見詰めながら眼を細めて訝った。  
偶然にしては余りにもタイミングが良すぎる。

既に自分達の抹殺が目的ならば、理由はどんな些細な事でも事足りる。

(俺達は嵌められたのか……?)

アーヴィンはキヨウを狙っていた銃口を逸らせた。

「どうしてそう思う? 後悔はしたくない。で、そのままなのか? それで終わりなのか?」

以前、初めて会ったニアの特殊な能力に少なからず危機感を覚えたアーヴィンは、ニアを殺そうとした。

その自分の姿とキヨウがダブって見えた。

「アーヴ、俺は人が死んじまうとその魂が自分のI・Dに近いサイバノイドに憑依する事があると聞いた。そんなモノは唯の迷信だと思つて馬鹿にしていた。けど、俺の目の前にいるドールは俺の知らない間にI・Dを持っている。どういう事だ? もしかしてお前、死んじまったのか?」

「いや、まだだ。ま、似たような状況にはなっている」

(もう時期本当のお迎えが来るかもな?)

「そう……か。お前とはずっと擦れ違つてばかりだった。お前は気が付いていなかったみたいだが、質量や力に任せていた俺達よりもお前は遥かに格闘・操縦技術どれを採つても素質があつた。今更だが、俺はお前のその技量に嫉妬していたんだ。」

お前が俺達の所に来た頃は、俺は指導員の補佐を勤め始めた頃だった。連中にお前が俺よりも優れている事を見抜かれたくない。その一心でお前を潰しに掛かったのも事実だ。丁度、お前はトムと同じくグレネイチャだ。お前達を俺がどう扱おうと、連中はそれだけで納得した」

「こんな所で懺悔かよ! らしくないッ!」

アーヴィンはカッとなってそっぽを向いた。

(……？ 何だ？ コイツ、本当にあのキョウなのか？)

アーヴィンは自分の記憶に残っている、残虐で冷徹なまでのキョウの姿と、目の前に居るキョウの姿が同一人物だとは思えなくなっていた。

「この前、三島の屋敷に忍び込んでお前の姿を見かけた時、俺は自分の目を疑った。もう一度、生きているお前に会えれば良いが……」  
「俺は御免だ」

あっさりと拒絶されてキョウは苦笑した。

「そう言ってくれるな。指導者側にも立場って言うものがある。決して弱みを見せられない。掴まれない。俺の場合連中が足枷あしかせだった。俺はそんな脅迫観念から自分自身を演じていた。結局はいつの間にか本来の自分を見失ってしまった。本当の俺は……」

キョウが言い掛けた時、廃屋の上空をヘリの轟音が通過して、彼の言葉を遮やぶった。

まるで、それ以上言うなと止められたように

二、三機は飛んでいる。それも、低空飛行で。

強烈なサーチライトで廃屋ごと照らし出された。

表の方も俄かに騒がしくなってきた。

(やつと、片付いたか……)

安堵あんどにも取れた溜息がアーヴィンから漏れた。

眩暈やわは和らいだものの、今度は耳鳴りのような症状が出始める。

(……いよいよヤバイ……な)

「無事だったかね？」

背後から聞こえた声の主が、毛布に包まっていたニアの肩をポンと叩いた。

「きやつ？」

いきなり見知らぬ人に肩を叩かれて、コンコンと咳き込んでいたニアは飛び上がった。

ニアに戻っていた僕には面識があった。

あの髭面ひげつらの警察署長さんだ。

「お？ …… おう？ こ、これは失礼。君は行方不明になっていた三島部長の双子の……娘さんの方だな？ 流石にマック君とそっくりだ。そう言えば、マック君はここにいる筈が無かったな」

署長さんにとっては、一度僕と面識があったから、そっくりだったニアに親近感を持ったのだろう。

彼は不寐ふしつけに話し掛けた事を詫わびた。

「ニア……です」

慌わづてて口元を拭ぬぐった。

口の中がまだ血の味で一杯だった。

（？ 誰？）

ニアは軽く会釈えしゃくはしたものの、訝いぶかって警戒けいかいする。

見掛けは強面こわもてで悪役こわもてで感じだけけど、この人は警察署長さんなんだけどなあ。

外見でかなり損しているよ。

「この辺りの地区の警察だよ。顔色が良くないが大丈夫かね？ すまないが……私達に付き合っこわもてて貰もらいたいのだが良いかね？ それも急いで」

「……はあ」

「大至急行せつばって貰もらいたいのだ」

切羽詰せつばった内容なのに、言い方が落ち着き過ぎて変だ。

「？」

ニアは署長さんに促うながされて、スポーツタイプの白い覆面車ふくめん両へと向かった。

そして、開いたドアの前で立ち止まり、何気なく後ろを振り返る。

僕達を襲ったサイバノイド達が両腕を後ろに拘束されて、丁度護送車両に乗車しているのが見えた。

幾ら、ドールだからと言っても、僕達と大して歳が変わらない少

年達だ。

その一番後ろに、オースティンさんが居た。

彼だけは全身がひどく壊れていたせいか、何も拘束されてはいなかった。

まともに歩けない為に二人の警官に支えられている。

あの大男は既に別の車両に乗せられていた。

神妙な面持ちおもてで何か独り言を呟いている。

「アーヴィン……」

ニアが独り言のように呟いた。

（駄目だよ。そんな小さな声じゃ届かないってば……）

事後処理に辺りは喧騒けんそうとしていた。

引つ切り無しに通信が入り、照明とパトライトに照らし出されて警官が慌ただしく行き来する。

すぐ傍に居ても、大声を出さないと聞こえない位の騒音だ。

なのに

（……え？）

絶妙のタイミングでオースティンさんが此方を振り向いた。

その視線の先にはニアが居る。

（どうして？ ニアの声が聞こえたの？ 聞こえる筈……無いのに）

彼の唇が動いた。

何かを伝えているように。

「何？ ……聞こえない」

彼は警官に急ぎ立てられ、押し込められるようにして車両の中へと消えた。

乗車する瞬間、気のせいか僕には彼が微笑したように見えた。

彼が換装しているのは感情や表情の表せる筈の無いドールなのに

……

僕はぐっと胸が締め付けられた気がして堪らなくなった。

（『アリガトウ』……なんて。どうして……どうしてそんな事言うんだよ）

嫌な予感がする。

彼の後を追って、二人のサイバノイドの警官が乗り込むと、護送車の観音開きになっていた後部ドアが無情にも閉まった。

「……聞こえ……ないよ」

ニアの視界が滲<sup>にじ</sup>んだ。

ドアを持つニアの手がぎゅっと強く握り締められる。

（止めてよ……僕までも暗くなっちゃうじゃない……）

連れて行けとオースティンさんはそう言った。

だけど、本当に出来るとは思っても見なかった。

彼に手を貸したのは僕だ。元に戻れなくなるかも知れないのはお互いに解っていた筈だ。

なのにどうして『アリガトウ』なんて言えるんだよ。

（……何だよもう！ 勝手に……勝手にそんな事言うなよ！）

彼の消えて行ったドアを見詰めているうちに、僕は何故だか無性に腹立たしくなった。

そして僕は彼を元の身体へ還<sup>かえ</sup>そうともせずに、それが出来ないと決め付けて諦めている自分にも腹が立っていた。

（……残酷なのは僕だ。このままオースティンさんを見殺しにするの？）

急に護送車の周囲が騒がしくなった。

周辺を取り巻いていた警官は何事かと警戒する。

僕ははっとして事の成り行きを見守った。

「逃走か？」

「車を廻せ！ 横付けにして進路を断て！」

護送車のドアが乱暴に開けられ、後から乗り込んだ警官二人が放り出されると、再びドアが乱暴に閉まり、内側から鍵<sup>かぎ</sup>が掛けられる。運転手が悲鳴を上げて車両から逃げ出した。

「中にはドールしか居ないのか？ 手引きをしている者がどこかに

居ないか？」

指揮していた武装警官が口から泡を飛ばしながら怒鳴った。

「はっ！ まだA・Iを落していないのが一体……」

投げ出された警官が腕を庇<sup>かば</sup>いながら答える。

「居たのか？ 何故切らなかった？」

「我々が最後に連れて来たドールです。既に酷く壊れていましたので被害者ではないかと」

「何だとお？」

辺りに緊張が走った。

「そこ！ 除ける！」

「何をやっているッ！」

「来るぞ！」

怒声が行き交う。

大半の警官が護送車を遠巻きにして車を楯<sup>たて</sup>に拳銃やライフル銃を構え、逃走を阻止しようと身構えた。

一触即発の雰囲気

（？ 何これ）

僕は、我に返った。

車の中が見える筈無いのに、僕には中で何が起こったのかが見えていた。

僕自身が無意識のうちに勝手に意識を飛ばしているんだ。

目の前に、拘束され制御機能を落とされて横たわった四体のドールがあった。

うち、二体は先に乗せてあったものらしい。

彼等には見覚えが無い。

オヤジさんを狙っていた人達だったのかも知れない。

全身が酷<sup>ひど</sup>く焼け爛<sup>ただ</sup>れて未だに白い煙を引いて燻<sup>くすぶ</sup>っている。彼等のA・Iは既に焼切られていた。

その四体の傍らにオースティンさんが立っていた。  
今にも倒れそうな身体を車に凭れ掛らせて、黙って彼等を見下ろしている。

(……涙?)

オースティンさんの紅くなっている眼から何かが毀れていた。  
泣いているのだろうか?

でも、肩が震えている訳じゃない。

しかも、全く表情の無い彼の眼から……

(僕の見間違いなのかな……?)

そして、オースティンさんは彼等の上に覆い被さるようになして、  
力無く倒れ込む

(あっ!)

僕は息を呑んだ。

一瞬、護送車が落雷に遭ったのかと思った。

窓という窓がオレンジ色の爆風で吹飛ばされた。

内部の急激な圧力に車両が揺れ、あっという間に炎が車体を包み込んだ。

炎が護送車の燃料に引火して誘爆し、黒煙を禍々しく巻き込みながら巨大な火柱となって明け方の夜空を照らし出した。

ドールの自爆

けれど、その場に居合わせた人達は、I・Dの存在しないドールが自爆をしたとは誰も考えつかなかった。

僕とニア、そして大男のキョウを除いては

「きつ、貴様ア!」

キョウと同乗していた警官が、その光景を見て彼の胸倉を乱暴に掴んで締め上げた。

「お、俺じゃねえ! 俺は何もやっちゃいねえよ!」

キョウ自身が一番驚いていた。



「嘘を吐け！ あの中にはI・Dを持ったサイバノイドは居なかったんだぞ！ お前がやったとしか考えられん！ 時限装置か何かを持たせたな！ それとも他に……」

「本当だ！ 絶対に何もやってねえよ。信じてくれよ！」

オレンジ色の巨大な炎が、五体のドールを乗せていた護送車を呑み込んだ。

ニアはその光景に目を瞠<sup>みは</sup>って立ち尽くす

僕はその一瞬の時ですら、心の片隅で未だにオースティンさんに心を開こうとはしない頑<sup>かたく</sup>な何か……意地みたいなモノが蟠<sup>わたかま</sup>つていたのに気が付く事が出来なかった。

……彼なんか、何処かへ行つてしまえばいいんだ。

消えてしまえばいい……そんな自分勝手な気持ち<sup>くすい</sup>がまだ燻<sup>くすい</sup>つて残っていたんだ。

オースティンさんはそんな僕の気持ちを察したのだろうか？ だから仲間と一緒に自分までも消し去ったのだろうか……？

『馬あー鹿、そんなんじゃないよ』

僕はオースティンさんにそう言われたような気がした。

魂が抜けたように呆然<sup>ぼうぜん</sup>としたまま、ニアは拘置所からオースティンさんが運ばれて行つた警察病院へと連れて行かれた。

途中、オースティンさんが意識を取り戻したという病院からの連絡があった。

（助かったんだ）

ほっとした。

彼が自力で還<sup>かえ</sup>れたのか、僕が無意識に手を貸したのかは分からないけど、とにかく戻つて来られたんだ。

（良かった）

「どおして？ ……ニアはワケが分かんないよう」

ニアは車のシートの上で膝を抱えてて丸くなった。そしてべそを

掻<sup>か</sup>きながら呟いた。

## 第7話 命令

僕達が（正確にはニアだけなけど）病院に駆け付けた時、オースティンさんは既に集中治療室（ICU）から個室に移されていた。

点滴を受けてベッドに横たわったオースティンさんは顔色も悪くかなり衰弱していた様に見えた。

素が痩せているためか、余計にやつれて精悍さを欠いている。

署長さん達は近くの待合室に残り、入室を遠慮してくれていた。

「アーヴィン！」

「来るな！」

ニアが駆け寄ろうとして歩を止めた。

ニアの羽織っていた毛布がぱさりと床に落ちる。

オースティンさんはニアが近付く事を許さなかった。寝返りをうつてニアに背を向ける。

「頼む。今は来ないでくれ」

押し殺した彼の声が、妙に震えていた。

「何？ 泣いて……るの？」

覗き込むようにしてニアが訊ねる。

「……さいよ。あっちへ行行って！」

彼の苛立ちが僕達に伝わる。

邪険にされてニアは膨れたが、諦めてオースティンさんを気遣い、

何度も振り返りながらも、部屋を出て行こうと彼に背を向けた。

「ニア、マックは……居るのか？」

（はっ、はいっ！）

僕は飛び上がった。

って言っても、ニアの中にいる僕の姿が彼に見える筈ない。

「うん、居るよ」

（うわっ、居ないってどうして言ってくれないんだよ）

ニアの即答に僕は慌てた。

こういう時にニアは気が利かない。

僕は自分勝手にニアを呪<sup>のろ</sup>った。

「……出て来いよ」

彼の声ですぐに判った。

（……怒ってる）

それは僕がオースティンさんを見捨てたから？……多分、きつとそうだ。彼をもう駄目だと諦めて、生死の間を彷徨<sup>さまよ</sup>わせてしまっただから

（だけど、どうやって戻って来たんだろう……？）

「どおして？ ニアはあっちに行けって言っのに、マックは……」

彼の言い草にニアが膨れた。

「良いから早く」

オースティンさんは弱々しくベッドから上体を起こして振り向いた。

彼の紅い瞳がニアの姿を映し出す。

「アーヴィ……その眼！」

彼に何が起こったのか詳細を知らないニアが、両手で口元を押えて驚いた。

だけど、その事を知っていた僕でさえニアと同じ反応だった。

彼をドールに換装させたのは僕だけれど、それはオースティンさんのI・Dだけだ。

なのに、有りもしない薬物で彼の瞳は真紅に染まっている。

（何故？ どうして？）

「まだ、充分に代謝出来ていないだけだ。もう時期元に戻る」

（代謝？ 何の事？ 意識不明で倒れただけじゃないの？ ……あの眼、あの眼はサイバノイドの彼の眼じゃないの？ どうしてアーヴィンが……）

彼の紅い眼をじっと見詰めて、ニアが僕に問い掛けた。だけど、僕だって理由が判らない。

不思議でならなかった。

僕達の頭の中で、紅い瞳をしたオースティンさんと、自爆したドルの瞳が重なり合う。

「……何て格好だ」

オースティンさんは溜め息雑じりに呟くと、ニアの姿に目を伏せた。

眼の遣り場に困っている。

胸の真ん中で切り裂かれたＴシャツもあちこち破れて素肌が丸見えだ。

穿<sup>は</sup>いていたジーンズも同じ目に遭っていて、片方の股が裂け、赤いチエック模様の下着が見えていた。

「俺の事はいい。それよりも……」

「僕？」

背後から声を掛けた。

窓に映ったニアの姿を使って出て来たから、そうなってしまっ

一瞬だけ彼の動きが停まった。

「相変わらずだな。驚かすなよ」

リアクションが少なかったから、彼が本当に驚いたのかは判らなかった。

オースティンさんはニアを見た時と同様の反応をした。尤も、彼女の姿のままなんだから当たり前かも知れない。

僕は慌てて緩<sup>ゆる</sup>んでいたＴシャツの前を結び直すと、ニアが落とした毛布を拾って肩まで引き寄せた。毛布の下で、見えていた下着の端をジーンズに押し込む。

「こっ、これは……」

僕はしどろもどろになった。

「解っている」

僕達に何があったのかを知っている彼に、言い訳は無用だった。

「えー？ ニアは解んないよ」

間の抜けた返事が返って来る。

「煩い！……少し黙っている」

オースティンさんは素っ気無く言い放った。

「ぶっ」

オースティンさんに叱られて、ニアはまたも膨れる。

（そう言えば、状況が全く呑み込めていないのが居たね。ここに）僕は改めてニアを見た。何箇所も破れているジーンズは仕方ないとしても、結び目の緩んだＴシャツから胸の丸味がはみ出している。オースティンさんに指摘されているにも関わらず、身嗜みさえ気にしていない。

普段の素がそのまんまだからと言ったって、見つとも無いよ。

「胸、はみ出してるよ」

言った僕の方が耳まで真っ赤になった。

「えっ？ あ……えへへ……」

僕に言われて、やっと両腕で胸を隠す。

「笑ってごまかすなよ。もお。恥ずかしいとか思わないの？」

（女の子なのに）

そりゃあほんの一瞬で幼児体型から女の子の姿になっちゃったんだから、自覚症状が薄いのは理解出来る。

精神的にもギャップが激しいと思うけど

「毛布に包まってあっちに行ってる」

「イイッだ！ ふんっ！」

ニアはぶいとそっぽを向く。出て行く気は無さそうだ。

「ったく。撥ねっ返りが……」

舌打ちしてそう言くと、オースティンさんは困った顔をして左手で顔を覆った。

このままニアの姿で居るとオースティンさんが話辛いかと思った。で、ニアのマトリックスを男性型にして本来の僕の姿に変換させる。

目の前で変わって行く僕の姿に、オースティンさんの視線が釘付けになった。

男性型になつても、胸とウエストの括<sup>くび</sup>れが無くなつただけで他は殆ど変化が無い。

僕の失くした本当の身体とは違って、基がニアの身体を用いているから、僕の姿はそれなりに見られる身体つきだ。

急激な代謝で全身汗だくだった。

僕は肩で荒い息を吐<sup>つ</sup>きながら、額<sup>ひたい</sup>に張り付いた前髪をかき上げる。汗が床に滴<sup>したた</sup>った。

「ニアを気にしても無駄ですよ。僕に何か？」

僕はピンクのＴシャツを脱ぎ捨てた。どうせ衣類の目的を果たしていない。

「……そうだな」

仕方ないかという素振り<sup>そぶり</sup>で、彼は首を傾<sup>かし</sup>げて肩を落とした。

「……」

そのままの状態<sup>じょうたい</sup>で中々話を切り出さない彼に僕は少<sup>すこ</sup>しだけ苛<sup>いら</sup>立ちを覚えた。

「話があつたんじゃないんですか？」

「……」

「オースティンさん？」

暫<sup>しばらく</sup>らくの間、彼は硬い表情でずっと押し黙っていた。

僕は、彼の右手<sup>みぎ</sup>がぐつと強く握り締められている事に気が付く。

（何か……迷っているの？）

「オースティンさん？」

もう一度呼び掛けた。

「あ？ ……ああ」

やっと呼<sup>よ</sup>掛けに応えてくれた。

そして、徐<sup>おもむろ</sup>に話し始める。

「マック、俺は……俺は今迄ずっと夢を見ていた」

「？ ……何を言っているの？」

僕は眉<sup>まゆ</sup>を顰<sup>しか</sup>めて彼を見詰めた。

僕の心配している様子を見取<sup>みと</sup>ってか、彼は表情を和らげる。

「いや、実際は夢なんかじゃない。現実の話だ。俺がずっと夢だと思いついたただけさ。」

マツク、俺はお前達が「ゲーム」として楽しんでいる世界の中のキヤクターだと思っても良い。拘置所で話した事は嘘じゃない。それだけお前達の現実界とは掛け離れていたって事さ。

特に、俺の場合はグレネイチャだ。ヤバイ任務に失敗して死のうが殺されようが構いなしだ。俺がああのメンバーに加えられた時、そこに居合わせていたグレネイチャは俺を含めて八人居た。で、半月後のある日、たった二日も経たない内に気が付けば俺とトムの二人だけになっていた……これが解るか？」

「それって、他の皆は死んだって事？」

オースティンさんは黙って静かに頷いた。

「多分な……任務でいつ死んだっておかしくは無いし、キョウに殺られてもおかしくは無かった。実際の所、奴には何度も殺されかけて死線を彷徨った事だって一度や二度じゃない。別に死んだとしても悲しんでくれる身内だって居やしない。けど、今までは不思議とどんな目に遭わされても「死にたい」とだけは望んだ事が無かっただけ……」

そこまで言うと、オースティンさんは視線を逸らせて俯いた。

「俺は二度と逢うことが出来ない仲間に出逢った。もう一度逢いたいと願っても叶（かな

う）筈がない仲間と逢った。」

彼等の行き先が何処なのか、俺には見当が付いていた。死んでも猶「ドール」として利用され、操られる彼等を見るのは耐えられなかった。これ以上の侮辱は許せなかった。だからあの時一緒に、今度こそ……俺はやつと死に場所を見付けられたと思っただんだ」

アーヴィンの脳裏にトムの横顔が過る。

辺り一面が灼熱の炎で燃え盛っていた。

全身が炎の照り返しで、熱い感覚を通り越して痛みの感覚しか無



い。

「借りは……返したぞ。アーヴ……」

トムは軽く微笑んで重いハッチを閉める。

ぐったりとして意識が朦朧<sup>もうろう</sup>となっていたアーヴィンの耳に、彼の最後の声が微かに、しかしはつきりと残っていた。

だが、その後でハッチ越しに彼が言った言葉が解からない。

何故だか聴き取れていた筈なのに、思い出せない。

もどかしさだけが募<sup>つ</sup>る。

（待ってくれ！ トム、何て言った？ 俺に何を言った？）

「もう、思い残すことは無いと思って覚悟した。なににお前は何故俺を連れ戻した？ いつ……俺がいつ助けてくれと頼んだんだ？」

僕は今にも彼に掴み掛かられそうになった。

足が震える。

見る物全てを射貫<sup>いぬ</sup>く真紅の瞳と、彼の気迫に僕は怯<sup>おび</sup>えているんだ。

（そんな事……判らない）

僕はどうすれば良かったのか、どうすべきだったのかさえ覚えてはいない。

「……やって、無い」

「何だと？」

オースティンさんは怒ったように言い捨てた。

（うつ……こ、怖い……）

「僕は……な、何も……何もやっていないよ」

声が震え、ごくりと喉が鳴った。

「嘘だ！」

鋭く僕の言葉を否定した。

「だったら、どうしてこの俺が生きている？ こんな事、お前にしか出来ない。他に誰が居るって言うんだ？」

「ほ、本当だよ。僕は、……僕はあの時貴方を見捨てたんだ」

僕はそう言って耳を塞ぎ、その場に屈<sup>かが</sup>み込んで蹲<sup>うつすくま</sup>った。

心音が耳の傍で大きく聞え、呼吸が荒くなる。

「心の何処かでいつも……いつも貴方の事が嫌いで許せなかった。貴方なんか居なくなれば良い。消えてしまえば良いとも思った。

エルフィンと親しく話が出来る貴方を羨ましいと思ったから……いや、違う。本当はニアを取られると思ったからだ。僕のニアを取られると思ったからだ。僕は、貴方に嫉妬していたんだ。だから何もしていない。きっと何もしていなかったんだ。僕じゃ無い！」

（その筈なんだ……多分そうだよ）

「マック！」

ニアが鋭く怒鳴った。

「言わないでよッ！……わ、解かってるんだ。僕の独り善がりだつて事。だけど……だけど、どうしようもないんだ！仕方ないじゃないか！」

感情の波が自制心という堰を切って壊した。

僕はそれまで抱いて来た想いを、洗い浚い彼に投げ付けてしまった。

「……」

僕はニアとオーステインさんに眼を合わせられなくなって、顔を背ける。

（……僕は何て酷い言い方をするのだろう。こんな言い方しか出来ないなんて。こんな事を思っているだなんて……）

「……そうか」

少し間を置いて、ポツリとオーステインさんが零した。

それから、気不味そうに言った。

「なら、良い……怒鳴って悪かったな」

「謝る事なんか無いよ。酷いよ！マック！」

ニアが僕を責める。

「ニア」

オーステインさんがニアを止めた。

「俺だつて奴等に襲われた時、すぐ傍に居たお前達じゃなく三島さんを選んだ。その結果がこれだ。三島さんもマツクもエルフィンも皆負傷した。そしてニアは……お互い様さ」

そう言つて後ろめたそうに視線を落す。

「そんな事当たり前でしょ！ 狙われてたのはオヤジさんなんだから！」

イジケてしまった僕には、そう言つたニアがもの凄く鼻持ちならない女の子に見えた。

（ニアには僕の気持ちなんて判らないんだ……判る訳無いよね？）

「そう、言つなつて」

いきり立つニアを、彼は宥めた。

「どうして？ ……どうして僕なんかを庇うの？ 僕は貴方に今まで酷い事をして来たし、言つたりもしたんだよ？ 僕の事が許せなくても当然でしょ？ なのに……」

気不味い雰囲気が漂う。

「俺はマツクに嫌われていようがいまいが全然構わない」

オースティンさんは静かに言つた。

「それは……僕が子供だから？ それとも、貴方とは関係の無い無用な存在だから？」

（馬鹿にして）

カッと頭に血が昇つた気がした。

「いや」

僕に視線を合わせたまま、ゆっくりと首を横に振る。

「何にも解かつていない子供だから？」

（やっぱり馬鹿にしているんだ。僕の事を）

僕は猶も突つ掛かつた。

「違う。それだけ俺の事を意識しているからだ。無関心からは何も生まれては来ない。けど、今が例え嫌いだというマイナスであつても意識さえしていれば、何かのきっかけでプラスになる可能性はある。まあ、そのまま現状維持つて事も有り得るが……」

「僕は貴方の事を嫌って……嫉妬していたのに、僕の事、貴方は嫌いじゃないの？」

「マツクの全てが好きかと聞かれれば、答えは「NO」だ」

「……やっぱり」

僕は彼の言葉に項垂れ、<sup>うなだ</sup>がっかりと肩を落とした。

「おい、勘違いするな。好きな所もあれば、嫌いな所だってある。その比率がどうなっているかだ。誰だってそうだろう？　けど俺は、

マツクの事を良い様に思っている心算だ」

オースティンさんは穏やかにそう言った。

気持ち、彼の表情が緩んだようにも見えた。

「どうやらその感情は俺に対しての嫉妬からじゃないな。もっと別のモノが「嫉妬」に摩り替わったみたいだ」

「え？」

「お前なら解るさ」

そう言って、彼はふらつきながらもベッドから降りた。そして、座り込んでいる僕に近寄って右手を差し出す。

（……許してくれるの？　僕の事を……）

「あ……」

僕とニアはオースティンさんの紅い瞳が元の蒼に戻って行くのに気が付いた。

まるで感情の起伏が引き潮のように退いて行くのと同じみたいに、吸い込まれそうな蒼い瞳。

エルフィンのの碧い瞳も勿論綺麗だけど……どうしてかな。何だか凄く落着くんだ。

ニアが惹き付けられたのも解るような気がする……

（？　あ、あれ？　……どうしたんだろう？）

目の前のオースティンさんが歪んで見えた。

「お、おい泣くなよ。どうしてマツクが泣く？　先に泣かれたら俺はどうすれば良いんだ？」

僕の顔を覗き込んだオースティンさんが戸惑った。

「え？ 泣いて……って、僕が？」

頬ほほに手を当てて見る。

指先が暖かいモノで濡れた。

（本当だ。言われるまで気が付かなかった）

「……さい」

微かに僕の唇が動いた。

「え？」

「アーヴィン……ごめんなさい」

目頭めがしらが一層熱くなり、潤うるんだ僕の瞳から涙が溢あふれた。

「……やっと、ファースト・ネームで呼んだな」

暖かい大きな手が僕の頭を軽く包んだ。

僕はニアが見ているのに構わずに彼に縋すがり付いて大声で泣いた。

今迄僕は、上辺だけで彼の事をいろんな意味で拒否し、否定し続けて来た

でも、本当はその逆だったんだ。

余りにも、その気持ちに気付くのが遅かったから。

ニアに先を越されて悔しくて素直になれなくて……だから……  
今までの彼への蟠わたかまりが涙と一緒に溶とけて流れて行くような気がする。

彼が助かって良かったと心から思った。

この気持ちに嘘は無い。

「……マックが泣いてる」初めて見たよ。マックが泣いてるの」

ニアは想像もしていなかった僕の涙に暫く呆然としていた。

「ずるゝい！ マックばかり！」

ニアが我に返った。足を踏み鳴らして悔しがる。

「べゝだ」

僕はニアに向かって舌を出した。

アーヴィンが苦笑する。

一人の男の人が、ドアをノックして紳士的に入って来た。  
和やかな雰囲気も彼の入室で打ち消されてしまう。

濃紺のスーツを着た、ガツチリとした体格の男の人だ。  
その身のこなしには一分の隙も無い。

一目で普通の人じゃない事が判る。

「……もう少し、駄目ですか？」

アーヴィンが頼み込むように言った。

彼には男の人が誰だか判っているみたいだった。

「残念だが、我々には時間が限られているのでね」  
態とらしく袖を引いてちらりと腕時計を覗く。

「そうですか」

アーヴィンは片手で優しく僕を引き離して立ち上がった。

軽い立眩みに左手で顔を覆い、よろめいてベッドにすんと腰を  
降ろした。

「オ……アーヴィン！」

「……大丈夫だ」

不安そうに氣遣う僕とニアに、彼は顔を覆ったままで応えた。

（あ！あの時の！）

僕はこの男の人が誰なのかを思い出した。

髭の署長さんの所に居た刑事さんだ。

「軍はお前さんの身柄を引き渡せと随分前から言っている」

そう言つと、徐に懷から拳銃を取り出した。

アーヴィンの表情が曇る。

「そんな物をここで、この子達に見せないでくれ」

「以前、軍の関係者だった俺達の署長は、お前さんをいつまで経つ  
ても軍に引き渡そうとはしない。軍からのメールを受け取ってから  
は猶の事だ。寧ろほとぼりが褪めるのを待っているみたいにな」

態と僕達に見えるように、ゆっくりと安全装置を外す。

軽い金属音に、ニアの肩が敏感に反応した。

「聞いているのか？ おいッ！」

アーヴィンはニアのそんな様子を見て、銃を手にした彼に対して語気を強めた。

けれど、彼はアーヴィンの言葉に耳を貸す心算は全く無いらしい。「署長はお前さんをこのまま見逃す心算だ。だが困るんだよ。他の署の良い笑い者になっちまうのだけは願い下げだ。ウダツの上からなかったうちの署にチャンスが転がり込んだんだ」

男の銃口がアーヴィンを捉えた。

「な、何すんのよ!」

「止めてください!」

僕とニアが彼の前に両腕を広げて立ち塞がった。

並んで同じ格好をしている傷だらけの僕達に、彼は躊躇する。

そして、改めて僕達二人を見比べて眉を顰めた。

「何だ、お前達その格好は? 何処に行っていた? 後で補導しなきゃならんな」

「二人共止せ」

アーヴィンが僕達に強く言った。

そしてニアに向かって、毛布を投げる。

「きゃん?」

頭から不意に落ちて来た毛布にニアが驚いて首を竦めた。

「ん、もお! ビクつたじゃないのお」

ニアが毛布から頭を出して恨めしそうにアーヴィンを睨んだ。

「ライナスさん……でしたか? ここでそんな物を子供達に見せないで戴けませんか?」

もう一度丁寧に頭を下げて頼み込む。

「子供達を退ける! それとも、子供に護<sup>まも</sup>って貰おうとも思っているのか?」

彼は鼻で笑って見下すように言った。

「んだと?」

聞き捨てならない彼の挑発にアーヴィンは豹変してかっとなる。

「凶星か?」

「擲<sup>ふりさげ</sup>擲<sup>ふりさげ</sup>るなッ！」

二人の間に見えない火花が散った。

ごくりと僕の喉が鳴る。

ニアも銃に怯えながらも固唾<sup>かたず</sup>を呑んで見守っている。

「止めるライナス！」

低く唸<sup>うな</sup>るような声が飛んだ。

「あッ！」

僕は小さく叫んだ。

半開きのドアから低い声の持ち主である髭の署長さんが現れた。

（マズイよ。僕はサイバノイドでここには居ないって事になっているのに）

僕は慌てた。

「署長」

ライナスさんは署長の姿に躊躇する。

「止めるんだ。お前には署の留守を頼んでいた筈だ。人が眼を離しておる間に勝手な事をしておって……全く。オースティンは本時刻を以<sup>も</sup>つて、我々が軍に引き渡した」

「しかし……」

彼は猶も食い下がった。

「……」

髭の署長さんは彼の後ろに立っていた僕を見つけると一瞬だけ眼を見張った。

そして黙ってじつと見詰める。

僕の隣に居るニアに視線だけ走らせて交互に見比べ、困惑した表情を浮べた。

（……どうしよう。バレちゃった）

「……命令だ」

署長さんは僕に視線を投掛けたまま事務的に言った。

そして誰かを入室させるために、一歩下がって身体を引く。

（あれ？ 署長さん、僕の事判らなかったのかな？ 気付いていた



みたいなのに)

僕は取敢えず胸を撫なで下ろした。

彼に代わって緩やかに流れる金髪の女性が入って来た。

僕の胸が休む間も無くドキンと音を立てる。

「エルフィン！」

ニアと僕の声がハモった。

(助かったあ)

僕は緊張から解放される。

「……解りました」

ライナスさんは舌打ちすると、名残惜なごりおしそうに銃を戻して引き下がった。

「良かったあ。一時はどうなる事かと思ったよ」

僕の表情が緩んだ。

(あれ?)

皆の様子が変だ。周囲の空気が一層緊迫している。

訝あやって僕はエルフィンの方を振り返った。

彼女の顔色は蒼白だった。

かなりの緊張が見て取れる。

いつもの優しそうな表情は何処かに消えていた。

「……確かにお引き受け致しました」

止してよ。エルフィンまでもが事務的に喋しゃべっている。

どうして?

「エルフィン、どおして? どおいう事なの?」

ニアが唸うなるように言って彼女を睨みつけた。

「……俺の射殺命令が下りたな……いや、下りたのはもっと前か。で、その執行者がエルフィンって処か?」

アーヴィンが他人事のように口を割った。

余りにも冷静に言うから、僕は事の大きさを把握はあく出来ないでいる。「そういう事だ。すまん。わし等には荷が重過ぎる。悪く思わん

でくれ」

署長さんはアーヴィンに向かってそう言うと、ライナスさんの肩を叩いて彼に退室を促した。<sup>たた</sup>

彼は黙って署長に従う。

「汚い事は軍任せ……か？」

アーヴィンは態と聞えるように、ライナスさんの背に向かって吐き捨てる。

「！」

ライナスさんは署長の手を乱暴に振り解いてアーヴィンに向き直った。<sup>ほど</sup>

「ライナス！」

彼は今にもアーヴィンに殴り掛りそうだった。

数人の警官が慌てて彼を押え付けて拘束する。<sup>こうそく</sup>

「解っています！ 俺だって馬鹿じゃない。こんな奴の為に逮捕されるのはマッピラですからね」

そう言うなり、彼はすぐ傍にあったドアを思い切り蹴って出て行った。

アーヴィン以外の僕達は一様に首を竦める。

ドアはベコツと引っ込んで、壁の中に収納出来なくなってしまうた。

「請求書、そちらに廻しておきますから」

「勝手にしろ！」

アーヴィンの一言に、姿の見えなくなった通路から彼の怒声が返って来た。

すぐに携帯を開く電子音が聞えて何処かに連絡を取っている。

「あ、俺だ。今何処に居る？ 何？」

ライナスさんの声がどん々遠ざかって行く。

「ライナス？ 何処に連絡をしている？」

署長は誰かと連絡を取っている彼を嗜めた。<sup>たしな</sup>

「失礼します」

「ライナス！」

署長の警告とも取れる態度にも、ライナスは意に介さず携帯を持ったままその場を離れた。

「……ライナス？」

繋がっている携帯から、何度も彼を呼ぶ男の声がした。

「ああ、すまない。ちょっとな。で？ 此方こなたに向かっているのか？」  
奇遇だなと思った。ライナスはたった今彼に連絡を取ったばかりなのに。

「指示があつた。あと少しで着く」

（指示？ ……任務中か？）

躊躇ためらいがライナスの口を重くした。

「？ どうかしたのか？」

「あ、いや……生意気なガキがいてな。少しシメて貰おうと思ったんだが……」

相手が笑った。

「お前が？ ……悪いが、冗談は後にしてくれないか？ 切るぞ」

「……ああ。じゃ」

震える手で携帯を切った。

（時間が無い。このままだと奴は……）

アーヴィンの生意気な顔が脳裏に浮かんだ。

最初は、つくづく生意気な奴だと心底嫌っていた。

自分が今まで締め上げて来た容疑者リストの中でも、アーヴィン程の強情な奴は稀まれだった。

軍が捜している人物ならさっさと引渡し、それなりの処分をされてしまえとさえ思った。

あの署長宛のメールを見るまでは

彼が見た連邦のデータが本当ならば、ライナスは十以上もアーヴィンと歳が離れている事になる。

しかし、アーヴィンの態度からはまるで歳の差を感じられ無かった。

数多くの修羅場を切り抜けて来た者だけが持っている何かを、ライナスはアーヴィンから敏感に感じ取っていた。

おまけに今では近親憎悪の様な感情さえ芽生えている。

（俺が銃を向けても、奴はちつとも動じなかった……何故逃げない？ 何故逃げなかった？ あの子供達を人質にすることだって出来た筈だ。）

（なのに……）

アーヴィンの蒼い瞳が強烈に脳裏に焼き付いていた。

その眼は取り乱す事無く、まるでガラスの湖面のように、静かに、そして落ち着いていた。

（どうしてあんな顔が出来るんだ？ ……殺されるのは自分なんだ

ぞ？……）

「クソッ！」

遣り場の無い苛立ちと焦燥感。

携帯を握り締めている手が血の気を失う

（俺は、何も出来ないのか……）

## 第8話 接敵

「貴方って、誰にでも喧嘩吹っ掛けるのね？」

エルフィンが刑事達の後姿を見送ると、呆れたように言って片手で前髪を掻き上げた。

そして気持ちを切り換えて、大きく息を吐き、きゅっと口元を引き締める。

アーヴィンは黙ってエルフィンから視線を逸らせた。

「エルフィン……」

「二人共、彼から退きなさい」

言い掛けた僕の声を遮り、彼女は俯いて静かに言った。  
微かに肩が震えている。

（射殺……命令って……マジなの？ エルフィン！）

僕は状況が把握出来ないまま、その場に呆然と立ち竦んだ。

「イヤよ！」

ニアがエルフィンに気圧されながらも頭を振る。

「退き……なさいって！」

「イヤ！ ニアは絶対に退かないもん！」

ニアが必死になって食い下がる。

「駄目よ！」

今度はエルフィンが銃を手に使っていた。

銃口がニア越しにアーヴィンを捉える。

（ひょっとして、ニアごとアーヴィンを……？）

彼女の真剣な眼差しに、僕は怯んだ。

「……エルフィン？」

銃口を向けられたニアの表情が強張り、瞳が大きく見開かれた。

その瞳の中のエルフィンが一瞬ニアから視線を外した。

彼女の躊躇いが僕達に伝わる。

エルフィンだって判っているんだ。

「エルフィン止め……」

「あの人の指示か？」

言い掛けた僕の言葉に被る<sup>かぶ</sup>ようにして、アーヴィンが口を割った。彼の問い掛けに彼女は無言だった。

（あの人？）

僕は振り返ってアーヴィンを見た。

彼はベッドの端に腰を降ろしたまま、在らぬ方を向いていた。

視線は全く別の所を見ているけれど、彼の全神経は僕達三人に向けられている。

「……いつから気が付いていたの？」

や々間があつてエルフィンが問い掛けた。

アーヴィンは徐<sup>おもむろ</sup>に振り向いた。

「今更答えて何になる？ あんな茶番を仕組んでおいて」

「茶番？」

「そつだ。俺から見れば茶番だ。ドールを遣<sup>つか</sup>った」

「何でも知っているのね？」

「何なら、君のスリーサイズも当ててみようか？」

アーヴィンはおどけて肩を竦<sup>すく</sup>めた。

調子をこいて口元は笑っているが、表情とは反対に彼の蒼い瞳は驚くほど覺<sup>さ</sup>めている。

僕は、アーヴィンとエルフィンがくつついていた事を思い出して顔が赤くなった。

「……セクハラは止めて貰<sup>や</sup>えるかしら？」

エルフィンも気持ち頬が赤くなる。

「こんな時に何言ってるのよ！」

彼女は態<sup>わざ</sup>と早口で捲<sup>まく</sup>し立てた。

そして今までに無いキツイ目付きでアーヴィンを睨み付ける。

「そんな事はないさ。何もかも知っていたのならあんな無茶な事はしなかった」

「あんな事？ ……何を言っているの？ この状況で気でもおかしくなったのかしら？」

「俺が？ ……まさか」

アーヴィンは彼女を馬鹿にしたように鼻で笑った。

彼女の銃口は一瞬たりとも逸<sup>そ</sup>らされる事無くずっとアーヴィンを狙っている。

挑発されたエルフィン<sup>エルフィン</sup>は、口を一字にして猶もアーヴィンを睨み付ける。

（駄目だ。先に僕の神経の方がどうにかなっちゃいそうだ）

辺りの空気がピンと張り詰められた繊細な糸の様だった。

彼女の指に少しでも力が入ればと思うと、僕はぞつとする。

前もそうだった。

オヤジさんが運ばれた病院で、武装警官達に取囲まれて銃で威圧されても、彼等から酷い暴行<sup>ひど</sup>を受けた時も、アーヴィンは怯えた様子を微塵<sup>みじん</sup>も出さなかった。

きっと、悲鳴を上げて涙しながら命乞いすることさえ彼の頭の中には無いんだ。

それが一種のプライド？

（そうするように訓練されたから？ でも、怖い時は誰だって怖いんだよ？ 逃げる事が可能なら逃げ出したって良いじゃないか……こんな事、身体を失ってしまったこの僕が偉そうに言える様なことじゃないのだけど、他人からカッコ悪く映るうと、自分の命は一つなんだよ？ どうしてもっと器用に立ち回れないの？）

僕はアーヴィンのその不器用なまでの真っ直ぐな所が苦手に思えた。

「そこに居るのでしょうか？ 三島さん？ あれ、違ったかな？ じやあ、ドクター山崎？」

不意に彼女の背後にあるドアに向かってアーヴィンは話し掛けた。

「え？」

僕達はアーヴィンの視線の先を辿<sup>たど</sup>った。

ドア越しに人の気配が動く。

僕は眼を疑った。

アーヴィンの言った通り、現れたのは僕達の良く知っているドクター山崎だった。

だけど、ドクターの顔色が悪い。

きっと、何かの病気を患っているんだ。

職業柄、元々あまり表情を出さない人だとは解っていたけれど、こんな異常な状況下でも表情が読み取れない。

僕はドクター山崎が僕達に付くのか、エルフィンに付くのか判断し兼ねて不安を覚えた。

「久しぶりだね。マック、それにニア」

おまけに付け足されてニアが膨れた。

「いつ頃から気が付いていたのかね？」

「貴方だと確信を持ったのは、ほんのついさっきですよ。彼女の腕に仕掛けられた盗聴器といい、三島さん殺害未遂のキヨウの失敗といい、俺にはどれも引つ掛けていましたからね。大体、キヨウ以外の俺を含めた全員がI・Dのコピーまでしてドールになる必要性があったのか。それ自体が疑問でしたよ。単なる復讐ならばキヨウ一人だけで充分だ。逆に一人の方が身軽だし目立たない。なのにリスクを犯してまで六人に拘った理由が解らなかった。

死亡した筈の六人全員が生きていて、元委員会の連中にじつくりと時間をかけて復讐する。

金も時間も掛けた演出ですね。生き残っていた委員会の連中には、さぞや毎日が苦痛で恐怖だったでしょうから……なら犯人は、俺達当事者か、事を知っている者の誰かだ」

「ほお」

ドクター山崎は感心したように漏<sup>も</sup>らす。

「ドールはどれも皆ミューズ・バイオロジカル・テクノ社製。貴方



が以前勤務していたあのミューズ社の子会社だ。最初は、大手のメーカだから貴方との関連性には全く気が付きませんでした。疑問を持ち始めたのは三島さんの件以降ですよ。

キヨウは一度ならず二度までも犯行をしくじっている。いや、出来なかった。そうじゃないですか？

別に、俺やニア達が居合わせたから……なんて理由は関係無い。少なくとも俺の知っているキヨウは、狙ったモノをみすみす見逃す様なお人好しじゃない。それは相手が三島さんだったから出来なかったただけだ。

俺は前に貴方と三島さんが親しい仲だと伺っていました。ここからは俺の推察ですが、キヨウの命を救ったのは貴方達じゃないですか？ そして委員会の連中を消して、最後に三島さんを消せと。けど、キヨウにはそれが出来なかった……」

ドクター山崎は彼の言葉に目を伏せた。

「その、キヨウ……だがな、先程射殺されたよ」

「！」

僕とアーヴィンが絶句した。

僕達の顔色が蒼ざめる。

「ドールを自爆させた容疑で取調べ中に大暴れした。取り押えようとした生身の人間三人とサイバノイド五人の警官を殺害した」

ドキリと僕の胸が音を立てた。

「数年前からの元連邦軍監察委員殺人事件で既にキヨウは起訴事実を概ね認めている。どの道極刑だった。それが少し早くなっただけだ」

（遣ったのはここに居るアーヴィンだ。あの男は遣って無い。けど、その事をどうやって説明すれば良い？ 説明したって誰が信じしてくれる？）

僕はアーヴィンを窺った。

彼は押し黙ったまま俯いている。

その両肩が震えていた。

「？　どお言つ事？　マツク！　ニアは何にも知らないよう」  
ニアが僕に詰め寄った。

アーヴィン達の居る病室を取囲むようにして、武装した何人もの特殊部隊が素早く配置に着いた。

彼等は皆、遠隔<sup>リモート</sup>操作で動いている量産型サイバノイドの人形<sup>ドール</sup>だ。

「配置二着キマシタ」

「了解、指示があるまでは各自待機」

ノイズに雑じってオペレータからの通信が入る。

「302、327了解」

「566、028、734了解」

「了解」

男は確認をすると通信を切った。そして襟<sup>えり</sup>に指を掛けて首を振る。

「あーあ、任務つて言うから来て見れば……何だつて子供のお守り<sup>も</sup>かよ？」

「おい、緩みすぎだぞ」

相方が横槍を入れる。

「病人の小僧相手に何でDのE<sup>ドール</sup>装備なんだ？俺達が直接向かえば良いものを……」

「さあ。上からの指示だ。」

（公費の無駄使いも良い所だ。一体何を考えているんだ。今回の上官は……）

男は、黙って自分達の後ろに控<sup>ひか</sup>えている上官を一瞥<sup>いちべつ</sup>すると、肩を竦<sup>すく</sup>めた。

（俺達を指揮するにしては妙にインテリっぽいし……大丈夫なのか？）

ドールが室内に設<sup>そな</sup>えてあつた鏡をドライバーで外した。

そこには鏡の大きさよりも少し小さい、子供一人が潜<sup>く</sup>れる位の大

きさの穴が空いており、アーヴィン達の室内が隠し鏡となつて覗く事が出来る。

ドールの目を通して、遠隔操作をしているオペレータのコントロールモニタに現状が映し出される。

「俺の所にもアイツと二つ、三つくらい違うのが居るがね。まあ、聞かねえな。親の言う事あ。何を勉強してだか知らねえが、偉そうに説教しやがる。知識だけ詰め込んでそれで全てが解かっているとでも思つて勘違いしているのさ。何様の心算だか」

囁くように小声で言つて、首を横に振つた。

「コイツも同じか」

互いに顔を見合つて苦笑いする。

彼等には、緊張感は全く無い。

「全部E装備にしているな？」

「OK。確認済みだ」

（E装備……空砲での威嚇制圧。時間稼ぎ……か。脅しにしちやあ悪い冗談だ。このグレネイチャの小僧が一体何をしでかしたって言うんだ？）

男はもう一度上官を振り仰いだ。

「おい……」

相方が擦り寄つて小声で囁いた。

「モニタに映っているあの男……」

彼はモニタの片隅に見え隠れしている眼鏡を掛けた背広姿の男を指差した。

「うん？」

「後ろにいる上官そっくりじゃないか？」

「……まさか……？」

言われてこつそりと上官の顔を盗み見る。

そこには、無表情でモニタを眺めているドクター山崎の姿があった。

暫くしてアーヴィンは面を上げた。

その表情は硬く、澄んだ蒼い瞳には何かを決心していたようにも見えた。

「……もう、良いです。早いトコ殺っちゃって下さい」

アーヴィンは自虐的にそう言って微笑み、軽く両手を広げた。

「エルフィン」

「はっ、はい？」

いきなり呼ばれてエルフィンの肩が跳ね上がる。

「良いぞ」

軽いノリで言うのと静かに眼を閉じた。

エルフィンは動けないでいた。彼女の喉がごくりと鳴ったのが聞える。

「良いぞ……って、何が良いのよ！」

ニアが怒り出す。

「そ、そうだよ！ な、何言ってるんだよ！」

つられて僕も怒り出す。

（自分の事なんだよ！ 何でそんなに軽く……）

「二人共聴け！」

騒ぎ出した僕達を見て、急にアーヴィンは真剣な表情になった。

声のトーンも低くなる。

「良いか？ ここで彼女が俺を殺り損なったら、今度は彼女が命令違反を犯したと見なして処罰される。最悪銃殺。彼女に選択の余地は無い」

アーヴィンはエルフィンを凝視したまま身動きもしないで、僕達に向かって淡々と事務的に言い放った。

相変わらず他人事のように。

「そんな……本当なの？」

僕には二人の命を天秤に掛けることが出来ない。

「これ以上、彼女を困らせるな」

（僕達だつて！ 困らせないでよ！）

「アーヴィン……」

（そこまで知っていてどうしてそんな顔が出来るの？）

エルフィンはぐつと唇を噛む。

「待ちたまえ」

見兼ねてドクター山崎が口を挟んだ。

「君は、三島が今何処に行っているのか気にならないのかね？」

「……」

「黙っているのは肯定と採つても構わないかね？ ……三島は今、軍の諮問機関に行っている。君に下された命令の撤回を求めてな」

「はっ、撤回？」

アーヴィンは鼻で笑った。

「今更撤回も無いでしょう？ 俺の知っている限り、命令の撤回は有り得ませんね。絶対に。時間の無駄だ」

吐き棄てるように言い放った。

「かも知れん。だが、無駄な努力だと君は笑うのか？ 君自身の事なのだぞ？ 三島も馬鹿な奴だ。死に急いでいる者の為に、安静にせねばならん己の身体を厭わずに……」

アーヴィンは黙ってドクター山崎を見上げた。

その瞳にはまだ猜疑心の影が色濃く残されている。

「ほぼ君が推察した通りだよ。灘京四郎は私が三島から預かり、蘇生バイオノイドにした。三島の思惑と私の医学的興味とが一致しただけなのだ……」

ほんの数年前の事ではあるが、当時の蘇生技術は現在のそれとはかなり程遠いお粗末なモノだ。

キヨウは自分が誰なのかさえ覚えてはいなかった。彼がりハビリを経て通常の生活に戻るのに一年半懸かったが、その間に記憶を少しずつ取り戻して行った。

記憶が戻って行くにつれて、君が知っているキョウに戻って行った。日々凶暴になって行く彼に、私は何度も条件付けの暗示を掛けたが……結果は君の知る所だ」

ドクター山崎は暗に言葉を付足してアーヴィンの様子を窺ったが、彼は黙って俯いている。

「私のラボから出て行くキョウに、三島は自分を殺せと命じた。別の、もう一つの生き方に期待していた三島だったが、無駄だった事に気付いたのだろう。三島は責任を感じてそう命じたのだ。だが、キョウは黙って出て行った。

キョウが去ってから数日後に死亡した君達五人のI・Dデータがバックアップごと盗まれた。恐らくキョウが遣ったと見て相違ないだろう」

（バックアップ……？ そんな物が何故あったんだ？）

ドールに使用されるダミープログラムではなく、バックアップによるI・Dの複製は、一度に一つしか存在しないI・Dを複写する事が理論的には可能な違法行為だ。

しかし、現実には健康者をI・Dのダビング装置に掛ける行為は、オリジナル本人を殺すのと同価値の意味で扱われている。

ほっだい膨大な容量の個人データをデジタル化して読み取り、複製を興す際、人体に有害な電磁波が一気に読み取り側の身体に逆流して重篤な状態になる。おか体内機能を侵された部分から壊死を起こし、やがてオリジナルは死に至る。

そのデータがいつ作成されていたのだろうか。

アーヴィンは過去に自分と同じグレネイチャが僅か数日で何人も居なくなっていた時の事を思い出していた。

現に自分達のI・D複製は存在していた。

彼等の犠牲はその為のテストと見てまず間違いないだろう。

運悪く順番さえ違っていれば、自分も居なくなっていた連中の仲間入りになっていたのかも知れない。

アーヴィンの眼がスツと細くなる。

「ニアの事といい、マツクの事といい……今度はキヨウまでもか？  
貴方は……人の命を何だと思っっているんだ！ 助けておいて、やつぱり手が付けられないから始末する？ 奴は、奴は二度もお前達に殺されたんだ。同じ理由で！」

「だから次はもつと調節をして……」

ドクター山崎の言葉にアーヴィンは激怒した。

「調節？ 擲<sup>ふざけ</sup>擲<sup>ふざけ</sup>するなよバカヤロウ！ この期<sup>こ</sup>に及<sup>およ</sup>んでまだそんなことを……何度奴を蘇生したとしても同じ事の繰り返しだ！」

「……なら、どうすれば良いのかね」

「俺が知るかよ！ ……いや、知っていたって言うものか。判ろうとしない者に説明したって無駄だからな！」

（何故、もつと奴の言う事に耳を貸さなかった？ 話を聴いて遣<sup>や</sup>れなかった？）

アーヴィンの肩が激しく上下する。

「アーヴィン……」

ニアが僕に擦<sup>す</sup>り寄<sup>よ</sup>つて来た。

僕は黙ってニアの肩を抱く。

僕達はただ黙って彼を見守るより他に無かった。

アーヴィンを宥<sup>なだ</sup>める事も説き伏せる事も出来ない、無力な子供なんだ。

深く息を吐いて、アーヴィンは自分の感情をコントロールしようとしているみたいだった。

「……綺麗事は、もう止めて貰えませんか？」

「何？」

「被告人死亡で何もかもが全てが白紙に戻ってしまったと思ったら当て<sup>あ</sup>が外れていますよ？」

「どういう事かね？」

ドクター山崎は猶も余裕で構えている。

「言いましたよね？ ドールは全員ミューズ・バイオリジカル・テクノ社製だと。しかも、ご丁寧に軍の機密だったインターセプタから違法行為の自爆装置まで装備して……

明らかに軍が関与しているとは思えない。三島さんが何処まで関与していたのか判らないが、あの人はそこまで奴を追詰めるようなマネはしない。

ドールは全て貴方個人の画策かくさくではないのですか？」

ドクター山崎はアーヴィンを見下ろした。

「ほお、君は何故そんな事まで判るのかね？ まるで現場に居合わせていた様に」

「そ、それは……」

言い掛けて口籠くちもった。

返すべき言葉が無い。

「確か君は所轄の拘置所から意識不明で此処へ運ばれたと訊いていたが……私の訊き違いなのかね？」

「……」

「幾ら君がその筋のプロだからと言って、言い逃れ出来るような状態では無かったと思うのだが……どうだね？ 一つ、私が納得出来る様状況を説明して貰えないだろうか？」

（俺の眼を盗んでいたのはこの人か！）

アーヴィンは自分がドールに換装していた時に誰かが視覚に干渉していた事を思い出した。

ドクター山崎は意味ありげに僕とニア、そしてアーヴィンを交互に見た。

その眼はまるで実験結果を期待して待っている科学者の眼だった。あの優しかったドクターは何処に行ったのだろう？

僕は何だか薄ら寒さを覚えてぞっとする。



「この子達と何か関わりがありそうだが？」

「関係ない！」

アーヴィンは彼が言い終わるよりも先に鋭く言い放った。

「実に興味深いのだよ。彼等は」

「ドクター、俺は貴方に命を救って貰った恩がある。だがあの時も俺が被験者だったって事なのか？ 貴方に都合の良い、珍しい被験者だったと？」

アーヴィンの脳裏に、複製に複製を重ねた何体ものニアの実験体の光景が浮かんだ。

彼女達の中には、既にヒトではなくなって終<sup>しま</sup>った者も多数存在していた。

「時として、人で在る事を捨てなければ医師は務まらんよ」

彼の言葉を読み取ってか、静かにドクター山崎は言った。

「何を言っている。止してくれ！」

「止めてよ！」

アーヴィンと僕の声が重なる。

以前にも同じような事を言った人がいた。

その人はある意味で僕の脅<sup>きょう</sup>威となる存在の人だった。

けれど、まさかドクターまでもがこんな事言っなんて……

「あっ……」

不意に僕は頭を抱えて座り込んだ。

アーヴィンかドクターのどちらかの頭の中に浮かんだイメージが直接僕の頭の中に入って来る。

（ナンダコレ？）

水中を泳いでいる大型の魚？……いや、違う。

人魚？人だ！沢山いる。

それぞれが笑って……

あれは……誰？

「ふふ……あはは……」

（！ニア？）

彼女の笑い声が耳に憑く。

「いや！……これ、ニアなの？」

ニアが乱暴に頭を振った。

彼女にも見えているんだ。

これが。

暗闇の中、大きな手が現れて彼女達の首を折って次々に殺して行く。

時には刃物で無惨に切り裂かれ、周囲が真紅に染まった。

それは、獲物を仕留めた時に猟師が一撃で×（しめ）る行為にも似ていた。

悲鳴が耳に残り、血塗れになったニアの手足がびく々と痙攣する。

（嫌だ！ 見たくない！）

眼を固く閉じてても、頭の中に直接イメージされる。

何度頭を振っても同じ事だった。

（……止める……止める、ヤメロ！）

僕の呼吸が激しく乱れる。

（ニアは……僕達は獲物じゃない！）

僕とニアが精神共鳴する。

ニアが耐えられなくなつて悲鳴を上げた。

その右手首にはまだ外していなかった「インターセプタ」があった。

ニアの映った像で構成されている僕の左手首にも同じものがある。同時に光り始めたそれはあつという間に強烈に輝き始めた。

室内の照明器具が一斉に破裂し、窓の二重ガラスが双方とも粉々に砕け散った。

その現象はここだけに留まらず、他の部屋にまで及んだ。

被害を被った周辺の病室から悲鳴があがり、看護師達が対応に慌てて館内が一時騒然となる

「！」

鋭い音と共に、覗<sup>のぞ</sup>いていた隠し鏡に亀裂<sup>きれつ</sup>が奔<sup>はし</sup>った。

隣室で様子を窺<sup>うかが</sup>っていた二人のドールは素早く身体を引く。

「行くか？」

緊張が奔った。

ドールからの視覚映像を見詰めていた男が視線を投掛ける。

彼が操作しているドールのその手には機関銃が握られている。

「待て」

もう一人が首を振り、すぐ後ろで座っている上官<sup>あお</sup>を仰ぐ。

指示は出ていない。

初めて見る僕達の能力に驚いたエルフィンが誤って引金を引いていた。

彼女の銃声に、僕達ははっとして我を取り戻した。

「アーヴィン！」

逸<sup>いちはや</sup>早く僕より状況を把握したニアが悲鳴を上げた。

アーヴィンが左の脇腹を押えて蹲<sup>うつすくま</sup>った。

薄い若草色だった病院の着衣が瞬<sup>またた</sup>く間に赤黒く染まった。

僕とニアが息を呑<sup>の</sup>む。

「く……後生<sup>うしよ</sup>だから、一発で決めてくれよ……外れは、無し……だ」

アーヴィンは苦痛<sup>くゆが</sup>に歪<sup>ゆが</sup>む顔で必死に笑った。

額から汗が噴き出し、呼吸が浅く乱れて不規則になる。

「出……来ない……」

エルフィンが首を横に振る。

「エルフィン！ そいつで俺を撃て！ 早くッ！」

痛みに震えながらアーヴィンが怒鳴った。

「……楽<sup>やす</sup>にしてくれよ」

一瞬見せた綻<sup>すが</sup>るような彼の表情に、エルフィンの身体がびくりと

震える。

僕達の様子をじっと興味深そうにドクター山崎は窺<sup>うかが</sup>っている。  
アーヴィンはそのドクターの視線に気付いて強い不快感を覚えた。  
そしてドクターを睨み付ける。

銃声に驚いて数人の医師達が廊下で誰かと言い争っている声が聞  
こえた。

「エルフィン！」

首を横に振って猶も拒否する頑<sup>かたく</sup>な態度に、アーヴィンは舌打ち  
してベッドの下に左手を滑り込ませた。

自分の血に塗<sup>まみ</sup>れた彼の震える手には、有る筈の無い拳銃が握り締  
められていた。

「いつの間に……」

ドクター山崎は哑然とする。

「付き添っていた警官から拝借<sup>はいしやく</sup>した物です」

そう言いながらアーヴィンは眼にも留まらぬ速さで安全装置を解  
除すると、エルフィンに向かって銃口を向けた。

## 第9話 真実

「これで……良いか？」

アーヴィンの口元が笑った。

『これで俺が撃てる』そう彼の眼は語っていた。

（これって、エルフィンが彼を撃つ為の……正当防衛にするの？  
そんな……そんなイヤだっ！）

二人には被害者と加害者、そのどちらにもなって欲しくは無い。

「駄目だよ！」

僕はエルフィンを庇<sup>かば</sup>う心算でアーヴィンの銃口の前に立ち塞<sup>ふさ</sup>がった。

「退<sup>ど</sup>くんだ！ マック！」

「厭<sup>いや</sup>だッ！ 僕は……僕はもう誰かが死ぬのなんか見たくないよ！」

僕は泣きながら懸命に二人を止めようとした。

「僕は身体を失くしちゃったけど、貴方はまだ生きているんだ！  
だから……」

涙眼で訴えるのに、アーヴィンは突き刺すような視線で僕を見上げた。

怖くなつて僕ははっと息を呑<sup>の</sup>む。

「俺が生きているだと？ ……ハッ！ 今の俺は死に損<sup>そと</sup>ないの抜け殻<sup>がら</sup>だッ！」

アーヴィンは吐き捨てるように言い放った。

「違うよッ！」

「わっ？」

堪<sup>たま</sup>らずニアが彼の首に両腕を廻<sup>まわ</sup>して縋<sup>すが</sup>り付く。

一瞬アーヴィンは身体を強張らせた。

「ニ、ニア？ はっ、放してくれ！」

少し顔を赤らめたが、照れ隠しなのか強い口調で言い放つ。

「いや！ 死に損ないだなんて……そんなコト言わないでよう……」  
不意を衝かれてアーヴィンは慄然とした。  
ほんの僅かな沈黙が流れる

「……まさかとは思うけど、この状態は俺を動けないように拘束している心算なのか？」

ニアは首を何度も振って否定した。

「アーヴィン、凄い汗だよ」

耳元でニアが囁き、吐息が首筋に掛かる。

傷の痛みとは別の何かが心臓の鼓動を速くしていた。

「痛っ……だから、離れろって」

「やだっ！」

「頼むから」

「絶対にイヤー！」

ニアの腕を強引に解こうとアーヴィンは片手を伸ばした。

肩に触れそうになる寸前、その指先が止まった。

ニアの小麦色に日焼けした肌には醜い痣が幾つもあった。

腕だけではない。

身体の至る所にそれは広がっている。

アーヴィンは視線を僕に移した。

ニアと痣の位置が左右対象になっている僕が居た。

場所によつては紫色になって腫上がったっている箇所もある。

「……」

アーヴィンの眼が細くなる。

それはある程度は覚悟していたものの、今回の事件に巻き込んでしまったと言う心苦しさか、被害を被って負傷した僕達への謝罪にも取れた。

「……撃つ気なんて、無い癖に」

エルフィンの銃を持っていた腕が下がった。

彼女は今にも泣き出しそうだ。

「さあ………そいつはどうか？」

ニアに翻弄ほんろうされて困っていたアーヴィンの顔が急に真顔マシになった。エルフィンに向けていた銃口をほんの僅わずかに逸そらし、彼女の後姿を映していた室内鏡に向けて何度も引金を引く。

僕とエルフィンは表情を凍らせたまま全く動けないでいた。

何かが裂けた様な音がして、そこから何者かの血飛沫ちしぶきが散った。割れて飛散した鏡の向こう側にぽっかりと穴が空いている。

アーヴィン達を撮影していた画面が一瞬でブラック・アウトした。

「あの野郎、勘付いた！」

コントロールモニタを覗のぞいていた一人が唸った。

「327 頭部損傷」

相方が状況を伝える。

「接続回線 D 38 からサブに変更」

「了解………327 システム切り替え完了」

モニタに映ったドール 327 の制御機能が赤色から青に変わった。

「了解」

「D 装備なのは、迂闊に銃を持った生身の人間が奴に近付けないからか？」

「………多分」

「殺気が………判るのか？ この若僧に？」

「さあ………そう言う事なんじゃないのか？」

「しかし………相手はドールだ。操作しているこちらの気配までは気付かんだろう？ 普通。余程訓練を重ねないと………いや、積み重ねたとしてもだ………」

「だから野放しに出来ない？ 奴の身柄確保の理由は………まあ、そんな処ところだろうな？」

モニタを見ていた二人がお互いに囁き合った。

アーヴィンの勘の良さに舌を巻く。

「327の状況は？」

それまで黙っていた上官が口を開いた。

「は！ 制御機能に若干のエラーが発生しましたが、操作上は問題ありません！」

「よし、行け」

「了解」

アーヴィンは全弾を撃ち尽すと、ベッドのサイドテーブルに叩き付けるようにして拳銃を置いた。

自分の時計と携帯を引っ手繰る。

そしてニアの肩を引いて自分の身体で庇うと、素早く無防備のドクター山崎の右腕を逆手に捕り、人質として楯にした。

「無駄だよ」

「何ッ？」

ドクター山崎の冷静な言葉にアーヴィンの表情が凍り付く。

次の瞬間、ドアが爆破されて吹き飛んだ。

武装した何人もの兵士が乗り込んで来た。アーヴィンが撃った室内鏡の穴からも銃口が覗く。

彼等のマシンガンが火を噴き、室内を掃射した。

「うあ？」

僕はエルフィンを庇う心算でいたのに、彼女の方が僕より先に動いていた。

彼女が僕の頭を抱えて床に伏せた為、自然に彼女の胸の谷間に顔を埋める状態になる。

（うわああ？）

僕の心臓が爆発する。

エルフィンは僕を庇ったまま上体を起こして彼等に向かって引金



を引いた。

「あッ！」

銃は武装兵によって、利き腕ごと撃ち落される。

「エルフィン伏せてッ！」

僕は歯を喰いしばって彼女の身体を引き倒した。

朝日に照らし出された病院の外壁が純白に光って眩い位だ。

不意に何発もの銃声が病院の建物から木霊する。

「……始まったか」

車のドアに手を掛けた署長は、聞えて来る銃声にその動きを止めた。

眼を細めて最上階にあったアーヴィンの病室を見上げる。

その胸中は複雑だった。

アーヴィンが居た最上階の病室を中心に、窓ガラスが壊れて無くなっている部屋が幾つも見える。

「署長！」

取り乱したライナスの声が彼を引き止める。

「待つて下さい！ 署長！」

「質問は無しだ！ ……署に戻るぞ」

署長はきっぱりと言い切ると、彼を無視して車のドアを閉めた。

一緒に来ていた五、六人の部下も署長に倣って其々（それぞれ）の車に乗り込む。

「……」

ライナスは唇を噛締めてアーヴィン達のいた病室の窓を見上げた。

手榴弾でも使ったのか、病室から黒煙と炎が噴き出して一際大きな爆発音が響いた。

頭上で搬送用の軍用ヘリの爆音が轟く。

（高千穂……頼む！）

ライナスは心の中で、先程携帯で話していた男の名を呼んだ。

そして、眉間に深く皺を刻みながら、祈るような面持ちで覆面車のドアを閉めた。

武装した特殊部隊のドールはマシンガンで容赦無く部屋中を掃射した。

アーヴィンの居たベッドと点滴一式が無残に撃ち抜かれて四散し、室内にあったあらゆる物が粉碎される。

僕はエルフィンを庇ったまま、硬く眼を閉じて悲鳴を上げた。

（このままだと皆が殺される！）

ニアとは反対の左手にしてあるインターセプタが熱い。僕のインターセプタがその効力を発揮しているんだ。

（ニア？）

はっと目を見開いた。ニアのインターセプタが反応した様子が無い。

（間に合うか？）

雪崩れ込んだ武装兵の執った行動に、アーヴィンは瞬時に反応した。

エルフィンが彼等を引き付けてくれたお陰で一瞬の間が取れる。

一度人質としたドクター山崎に軽く足払いを掛けて片手で簡単に引き倒し、同時にニアをもう片方の腕で抱き込むようにして庇って二人の上に覆い被さった。

アーヴィンは彼等の使用している口径に自分の持っている腕時計のシールドでは太刀打ち出来ない事を瞬時に覚ったが、シールドスITCHを時計ごと強く握り締める。

「！」

アーヴィンの背中を銃弾が擦過する。身体が弾けた。

（駄目か……）

諦めがアーヴィンの脳裏を掠める。

ニアの目の前でアーヴィンの血が飛散した。悲鳴を上げて彼の首に追い縋る。

（死なないで！）

ニアの心が直に僕の心に響く。僕は左手首のインターセプタを右手で力一杯握り締めた。

「ニア達を助けて！……動け！動いて！」

耳を劈く銃声に負けないように僕は必死に叫んでいた。

「死んじやだ！お願い！殺サナイデ！」

ニアの右手にあったインターセプタが呼応するように強烈に光った。

黄緑の鮮やかな蛍光色のサイコ・シールドが、既に発動している僕の周囲とニアの居る二箇所に出来る。

その間にも銃弾は部屋中の物を薙ぎ払い、鉄筋コンクリート製の壁を容赦無く削り取った。

（殺サナイデ！）

銃弾の雨に包まれながらも、僕は薄っすらと眼を開けた。

（何かが飛んでる……？）

シールドの外で大人の掌位の大きさの光が不規則に飛び交っている。

それも、もの凄い数だ。

それらが次々に銃口を向けて来た彼等に襲い掛かる。

（これは……僕？……いや、違う。僕じゃない）

僕は顔を上げてニアの方を見た。

アーヴィンに庇って貰っているニアの周りが一段と強烈に光を放っている。

（ニア？……あれはニアが遣っているの？）

不思議な事はそれだけでは無かった。

武装兵の一人が急に仲間を銃撃し始めた。

倒れた一人の手から、コロコロとピンの抜けた手榴弾が転がる

僕とニアの悲鳴がハモった。

「！」

エルフィンとアーヴィンは爆発の衝撃に備えて、僕達を庇っている腕に一層力を籠めた。

銃弾の雨が止み、強烈な閃光が辺りを呑み込んだ。

「おいっ！ 誰が実弾を装備させると言った！」

モニタで状況を確認していた男が慌てて吼えた。

「そんな！ …… 確かに装備Eにして……」

「早くドールを停めろ！」

男は拳で非常停止のハードカバーを叩き割り、レバーを引いた。

「やっている！ …… ええっ？ 停止信号を受け付けない？」

「馬鹿な！ …… 全員死ぬぞ……」

慌てた彼等のすぐ後ろで、銃の弾倉を交換している音が聞えた。

目の前で隣に居た相方の頭に二発の銃弾が撃ち込まれた。

コントロールモニタが血飛沫で染まる。

（え……？）

男は恐怖に顔を引き攣らせ、我が目を疑うようにすぐ後ろに立って居る上官を振り返った。

彼の背後にも同様に頭部を撃たれて事切れた仲間が無残な屍を曝している。

気付くのが遅かったのは、彼等がドールのコントロールに集中していた事と、上官がサイレンサーを使用していたからだった。

「な……」

そこまでだった。二発の銃声で彼の目の前が真っ暗になる。

「動くな！」

突然、ドアが乱暴に蹴破られ、左手で銃を構えた男が入って来た。男はたった今部下を殺戮した上官に、何の躊躇いもなく銃口を向

けた。

上官ははつとして、現われた男を振り返る。

「……遅かったか」

車内の惨状に男は軽く舌打ちした。

粗野な感じの背の高い男だ。

右手首を負傷しているのか白い包帯をしている。

アーヴィン程ではないが、日焼けしたような肌に黒い髪。

そして相手の殺気さえも瞬殺する様な眼光

「レイナ！」

男はパートナーを呼んだ。

「もう！ちゃんとドアを開けてから入ってよ！」

彼女にそうは言われても、男の右手は既に負傷しているので、両手が塞がった状態だ。

悪態を吐いて壊れたドアに苦勞しながらも彼女は車内に入ってきた。

腰の辺りまで伸ばした艶やかなハニーブロンドに、雪のような白い肌。

瞳は鮮やかなアメジスト。

まるで人工的に創り出された人形のような容姿だった。

エルフィンをずっと大人っぽくした女性だ。

ただ、彼女には人の気配と共に、別のもう一種の何かが混在しているように感じられた。

寧ろ、それは獣が持つ研ぎ澄まされた気配に近い。

その為彼女はどこか近寄り難い妖艶な雰囲気を持っていた。

レイナは車内に入るなり、その惨状と血の匂いに顔を顰めて口元を押さえた。

彼女と上官との視線が合う。

「違う、彼も偽者だわ」

刺すような一瞥いちべつを送ってレイナは顎あごを引いた。

「コイツもか？ これで四人目だぞ？ 一体何人ダミーを創れば気が済む？」

男は銃口を上官に向けたまま、うんざりして天を仰いだ。

一瞬、男の気が逸それたと思ったのか上官の腕が動いたが、それよりも早く男の手が反応した。

上官の額ひたいの真ん中に赤い点が刻まれ、力無く崩折くずおれる。

「警告した筈はずだ」

（ダミーに言っても無駄か）

慣れた手つきで銃を納め、倒れた上官に視線を這はわす。

上官はカツと目を見開いたままで事切れていた。

「早くドールを停める！ もうヤバイ事になってる」

「制御コードが書き換えられているわ。E装備が実弾装備に変更されているのに、変更表示のメッセージが出されていない……これ、どう言う事？」

戸惑ったレイナは男を振り仰いで意見を求めた。

しかし、男も彼女と同様で、皆目見当が付かないとばかりに肩を竦すくめて見せる。

指示を受けるドールは、安全装置代わりに通常とは違う指示を入力しても受け付けないように設定されている。

しかし、ここにあったドール総てが変更後の表示を出さないようにプログラムが書き換えられていた。

「マズイぞ。一体でも良い、制御出来ないか？」

「さいわね！ やってるわよッ！」

レイナは目にも留とまらないブラインドタッチでキーを叩く。

（……あつた。一体だけ制御可能だわ。頭部を損傷しているのね）  
モニタにスキヤニングしたデータが表示され、制御可能なドールの識別コードと状態が映し出される。

レイナはすかさずその一体にリンクさせ、ドールを操作した。

制御不能である他のドールを破壊する

現場の状況を映すべく、モニタを切り替える。

「何？ これ……」

映り具合が不鮮明ではあったが、彼女が制御しているドールの視界には幾つもの光の球が不規則に飛び交い、次々とドールを襲っていた。

光と接触した部分の電子機能がバックファイアを起こし、ドールは機能を落して倒れて行く。

「あっ！」

ものの数秒でレイナの手が止まった。

ドールからの映像が消える。

「ははっ、殺られたか」

「笑い事じゃないわ！」

レイナが男の不謹慎さに眉を顰めてぴしゃりと言いつつ放った。

「！」

一瞬の間を置いて、二人の居る車の上空……恐らくはすぐ隣の病院の上階で、何かが爆発音と衝撃が感じられた。

「何？ 爆……発？」

不安そうにレイナは男を見上げた。

たちまち男の表情が曇る。

「……遣ったな」

男は上空の爆発に気を取られながら、上の空で呟いた。

しかし言葉とは裏腹に素早く運転席に滑り込み、エンジンを始動させる。

「掴まっっている！」

レントゲン車に偽装させた軍の車両はその車体を軋ませ、タイヤから白煙を立ててバックで急発進した。

空を切って幾つものコンクリート塊やガラス片が降って来た。

たった今まで軍の偽装車両が停まっていた処にも、ほぼ車両と同

じ大きさの塊が落ちて来る。

レイナが悲鳴を上げ、長い金髪を振り乱してコンソールにしがみ付く。

男は運転席から頭上と車両後部とを忙しく交互に確認しながら、ハンドルを左右に切つて激しく蛇行を繰り返す。

唐突に車両が停止して、レイナの身体が一瞬浮いた。

男は短く口笛を吹く。

「……？」

そつと頭を上げたレイナは、車外から見える、落下して来た残骸に一瞬言葉<sup>タカシヨウ</sup>を失った。

「こちら高千穂。手遅れだった。奴はダミーだ。引き続き、A 2 51へ急ぐ。先程手榴弾に因<sup>よ</sup>ると思われる規模の爆発を確認。至急シュライバーを遣<sup>や</sup>つてくれ」

「了解」

男は襟<sup>えり</sup>に付けていた小型通信機で状況を報告すると、大きく深呼吸をした。

心持ち首を左に傾<sup>かし</sup>げて煙草に火を点ける。

青白い煙が細く棚引き、男の身体に纏<sup>まと</sup>わり付いた。

「岬、これ……」

レイナが彼に振り返つてモニタを見るように促した。

が、彼を見るなり視線が一層険しくなる。

「岬！ 煙草！ 任務中よ！」

「う……はいはい。で？ どうした？」

火を点けたばかりの煙草を面倒<sup>もみけ</sup>そうに車両の内壁で揉<sup>も</sup>み消すと、彼女の向かつている画面を覗いた。

ぐつと顔を寄せて来た岬を避<sup>よ</sup>けるようにレイナは上体を引き、煙草の臭いに顔を背けた。

片手で口元を覆<sup>おお</sup>う。

「止めて、生理的に受け付けないのよ煙草の臭いが」

「ああ？ 生理がどうしたって？」



「馬鹿ッ！」

赤面したレイナの平手が飛んだ。

画面には旧式の監視衛星が映し出されていた。

「……いつからだ？」

左頬に彼女の手形がくつきりと残ったまま、それでも岬は何も無かったように続けた。

「軌道修正は岬が彼を射殺した直後……この上空まで、あと十分も無いわ」

「ダミーが殺られたら即、実行か。なら、コイツが最後の一体だな」  
岬はふんと鼻を鳴らして、床に転がっているダミーの遺体を一瞥する。

「解除にどの位掛かりそうだ？」

「分からない。これは大戦前の旧式A・Iよ。識別コードが現行で使用されているどのタイプにも当て嵌<sup>は</sup>まらないわ。どの位掛かるかなんて……」

レイナは手を休めずに答える。

鮮やかなブラインドタッチで何度も種類を替えて解除コードを送信しているが、衛星は全く受け付ける様子はない。

「ヤバイな。待つてられない……か」

岬は自分の不注意で左の利き手に付着した隊員の血をじっと見詰めた。

「テッド！ シュライバーはまだか？」

岬はもう一度催促をしながら、血の付いた手を車の内壁に擦<sup>こす</sup>り付ける。

「今着いた。お前達の上空<sup>うへ</sup>だ。降ろすぞ」

「了解。シュライバーを降ろしたら、大至急この空域を離脱しろ」

「何イ？」

「十万先から病院ごと狙われるぞ」

車外で相当な質量の物体が上空からふわりと降りて来た。岬の言

つていたシュライバーだ。  
それは救助用ロボットだった。

平たい卵形のずんぐりとしたボディに昆虫の様な節足を六本持っている。

それらの先端には皆同様に鋭い鍵爪<sup>かぎづめ</sup>が有り、爪を収納すれば反対から移動に便利な小型のタイヤが出て来る。

頭部には短いアンテナがあり、正面にはボディとほぼ同じ大きさの巨大な大顎<sup>おおあご</sup>のハサミがある。

大顎は、胴体から脱着可能でワイヤで繋がれており、牽引用アンカーにもなる。

漆黒のボディはそのままでも巨大なクワガタ虫だ。

シュライバーはパラシュート代わりに左右に拡げていた二つの金属翅を閉じた。

昆虫型とはいえ、落下速度を抑える事は可能だが、飛翔する事は出来ないらしい。

シュライバーはギギギと一声鳴くと、まるで動物が身震いするように、身体を左右に振った。

岬は車外を用心して何度も首を巡らしながら、降りて来たシュライバーを確認する。

「行こう」

岬は、モニタに向かって猶も夢中で解除コードを掛けているレイナの二の腕を、いきなり逆手で掴んで軽く引いた。

不意を突かれて、レイナが驚き短く声を上げる。

「何するのよッ！」

もう一発レイナの平手が岬の左頬に炸裂<sup>さくれつ</sup>する。

今のは効いたらしく、一瞬岬は顔を顰<sup>しか</sup>めた。すぐには左目が開けられなくてウインクした状態になる。

岬的意思では無かったが、レイナは彼が擲<sup>ふな</sup>擲<sup>け</sup>しているように思えて、余計苛<sup>はくしゃ</sup>立ちに拍車<sup>はくしゃ</sup>が掛かった。

「……すつげーご機嫌斜めでない？」  
「当たり前だわ！一刻を争うのに何悠長に構えていられるのかしら？一体どういう神経しているのよ？」  
「って、こういう神経ですけど？」  
左の親指を立てて平然と自分を指す。  
岬の受答えが気に入らなくてレイナはツンとそっぽを向いた。

ニアがアーヴィンの首に縋<sup>すが</sup>り付いてすすり泣いていた。

「ニア……無事か？」

ニアの耳元でそつと囁<sup>ささや</sup>く。

「う……ん」

「そうか、良かった」

ほつと胸を撫で下ろす。

ニアが無事ならばマツクも大丈夫だ。  
アーヴィンは身体をニアから退けた。

ニアがゆっくりと起き上がる。

「アーヴィ……ン」

「え？」

「し、しな……し、死なないで」

しゃくり上げながら、ニアは必死で訴えた。

「……」

ずっと以前にも、誰かにそう言われた気がして、胸が熱くなる。

「死なない、で……お、お願い、い……だから。死んじゃ、やだあ！」

「ニア……ごめん」

「へ、変なの。な、何でアーヴィ……が、あや、謝るの？」

「俺がニアを泣かせたから」

「ばかつつ！」

照れ隠しにニアがアーヴィンの背中を叩く。

「痛ってーっ！」

ニア達を庇って撃たれた銃創が背中にあった。

丁度大きな鍵爪で背中を引っ掛れた様な擦過傷だ。

そこを容赦なく叩かれた。

痛みが脳天まで駆け上がり、思わず仰け反る。

その視界にドクター山崎が壁に寄り掛かっている姿が飛び込んだ。  
虚ろで覚束ないドクター山崎の視線がアーヴィンの視線と絡み合  
った。

「……君には礼を言わなければならんようだな？ ニアとマック……  
二人のお陰で計画が随分と変更してしまったが……」

皮肉交じりにそこまで言うと、ドクター山崎は苦痛に顔を歪めた。  
背中から銃弾数発をともに受けている。

「どこの……部隊です？ 貴方にまで容赦無かった」

咳き込んで呻きながらもドクター山崎を見上げたが、彼の平然と  
した表情にはつとする。

「まさか貴方は……貴方まで……」

ドクター山崎の口元が笑った。

「可能性として有得る事だとは思わんかね？ 私はニアの……」

「言っくなッ！」

アーヴィンはドクター山崎の言葉を鋭く制した。そして何度も咳  
き込む。

ニアが驚いてアーヴィンから手を離れた。

ドクター山崎の携帯電話が鳴る。

「……そうか……分かった」

ドクター山崎は手早く用事を済ませると再びアーヴィンに向き直  
った。

「三島からだ。たった今、諮問委員会が君への決議を撤回した」

アーヴィンは喘ぎながら、身体を返して大の字になる。

「遅せえよ……」

呟くように言った。

（撤回？ …… 馬鹿な！ 幾ら三島さんが昼行灯<sup>ひるあんどん</sup>だってそんな後ろ楯<sup>だて</sup>が……）

アーヴィンは四年前に起こった忌<sup>い</sup>まわしい出来事を思い出していた。

（いや、あるのか？ 三島さんには其<sup>そ</sup>れなりの後ろ楯<sup>だて</sup>が…… だから……）

「オースティン、君にはもう一つの選択肢<sup>せんたくし</sup>が与えられた」

苦痛に堪<sup>た</sup>えながらもアーヴィンはドクター山崎を見据<sup>みよ</sup>える。

「一つはこれまでと状況は同じだ。そして、もう一つは軍に……」  
「誰が戻るか！」

ドクター山崎が言い終わらない言葉を、アーヴィンは遮<sup>おさえ</sup>った。

傍<sup>はた</sup>に座り込んで泣いていたニアの肩が、びくつと跳<sup>は</sup>ね上がる。

「私は君がどう選択しようかと構<sup>かま</sup>わん。ただ、君が前者を採<sup>と</sup>ったとして、ニアやマックはどうなるのかね？」

「俺はこの子達の保護者じゃない」

きっぱりとそう言って二人に視線を向けた。

目の前で座り込み、頻<sup>しき</sup>りに毀<sup>こぼ</sup>れる涙を拭<sup>ぬぐ</sup>っているニアと、少し離れたところでエルフィンに抱き締められてぐったりしているマックがいた。

「そうだ。だが、結果としてこの子達に君が「知識」と「術<sup>すべ</sup>」を与えてしまったのは事実だ。もう以前のように三島の養子では居<sup>ゐ</sup>られない」

ニアの心に不安な影が降りた。

（それって、どう言う事なの？ また、マックと二人きりになっちゃうって事？）

「何が言いたい！」

彼のもどかしい言葉に苛<sup>いらだ</sup>立<sup>た</sup>って、アーヴィンは怒鳴<sup>なみ</sup>った。  
だが、傷が痛んで身体を屈<sup>かが</sup>める。

「アーヴィン！ ドクターも、もう止めて！」

見兼ねてエルフィンが口を挟む。

「……ドクター？」

エルフィンはドクター山崎が被弾しているのに気付いて息を呑んだ。

ある程度の医療知識があつた彼女はそれがかなり深手であることを覚り、言葉を失う。

僕はエルフィンにずっと抱かれたまま、半分意識が跳んでいた。彼女の胸に圧迫されて息が出来ない。

（でも、このままなら死んでも良いかな……待てよ？ 僕って一度死んだんだよね？ こんな事考える僕って不謹慎……なのかな）

僕は辺りの空気が掴めないまま、暢気な事を考えていた。

「以前にも、俺は三島さんからある条件を突き付けられた。ごたごたで結局はそれが何だったのかは聞かなかったが、多分今と同じ内容だと思う。俺がここで助かって、どうせまた軍で汚い仕事をさせられるに決まっている！ 俺が承知しない事を見越して、今度はニア達を人質に取引か？ 汚いぞ！」

「君がニア達をそうさせてしまったのだ。私にあたるのは筋違いだ。それに今更取引なぞする心算は無い」

「何だと？」

「既にニアとマックに関して軍は承認済みだ」

駄目だと言いつけたアーヴィンの言葉を無視して、ドクター山崎は続けた。

「これは前々から決っていた事だ。それを三島の奴があれこれと難癖を付けて引き延ばしおって……」

「エルフィンに盗聴器を仕組んだのはやはり貴方か？」

ドクター山崎は肩を聳やかした。

今更何を言っているとも言いたげだった。

「ドクターお願いします。もうお話にならないで早く処置を……」

「エルフィン、君は少し黙っていて貰おうか？」

ドクター山崎はエルフィンをぐっと睨んだ。

そして徐にアーヴィンおもむろに向き直る。

「もう一つ、君には思い当たる節があるのではないかね？ お陰で

防壁をしていなかったサイバノイド二体のA・Iが駄目になったよ」

（何て奴だ。俺が勘付いていた事まで……全てお見通しか）

アーヴィンはドクター山崎の掌てのひらで弄もてあそばれている不快感と憤りいきどおを覚えてた。

「君は軍の任務が汚い仕事だと言っていたが、それは君達が「特殊な例外」をしていたからだ。軍にも規律はある」

「……何を言ってる？ これが「特殊な例外」じゃなくて何なんだ！」

アーヴィンは外部との壁が無くなり、吹き抜けのフロアと化した室内を指差した。

僕達を襲った何人ものドールが、残骸となつて瓦礫がれきに埋うずもれていた。

「今迄、こんな事を俺はやって来た。ドールなんかじゃなく人間を相手に。命令は絶対だった。完遂出来なければ俺が消される。俺達がモノとして扱われても疑問を持つことさえ許されなかった……なのに自分達の手に負えないと覺つた奴等は、自我が目覺めて軌道を逸脱いつだつしてしまった俺達を消した……今度はニアやエルフィンまで巻き込むのか？ あんただつてニア達が居なかったら消されていたんだぞ！ 解っているのか？」

「君はそう思ふのかね？」

ドクター山崎の口元くちぶちが緩ゆるんだ。

「煩うるせえッ！」

（何を言っている？ ドクター、本気で俺達と死ぬ氣だったのか？ それとも、俺の目の前に居るドクターは「あの時のニア」と同じクローンなのか？）

アーヴィンは混乱した。

不意にドクター山崎の上半体が壁伝いに崩れた。

彼の背中と接していた壁には夥おびただしい大量の血痕が付着している。

「ドクター！……被弾していたのか？」

「悪い事は出来んな。私は……自分の野心の為に三島さえも裏切った。これは……天罰かも知れん……」

ドクター山崎はそう言つて笑うと苦痛に顔を歪めた。

「黙っている！ 早く処置をしないと、ヤバイぞ」

アーヴィンもエルフィンと同様にドクター山崎が危険な状態だと覚る。

「構わないでくれ。もう時期彼等がここに来る……それよりも、君に一つ訊きいても良いかね？」

ドクター山崎はアーヴィンに向かって穏やかに話掛けた。

（「彼等」？ また何処かの新手がここに来るつて言うのか？）

アーヴィンは訝いふかつて眼を細めた。

「君は何故未だに銃を携帯している？ 何故危険と隣り合わせの軍事関係のカメラマンなんぞになっているのかね？」

「今、そんな事を訊いている場合じゃ……」

（何を言い出すかと思つたら……）

「目上の者の問い掛けには答えるものだよ。オースティン」

「何、揶揄ふやけた事を……」

ドクター山崎の言いようにアーヴィンはムツとなる。

「私は至つて真面目だよ？」

即答出来ずに、アーヴィンはドクター山崎から眼を逸らせた。

軍にその存在を抹殺されても猶、アーヴィンは身を隠ひそす処ところか銃さえも手放すことは無かつた。

何故自分達が抹殺されなければならなかつたのか……？

アーヴィンは自分が納得出来る真実ほんとうの理由を導き出す為に、敢あえてこの業界を選択した。

もとより危険は承知の上だ。



確信は持てなかったが、その理由如何りゆういかんによつてはキヨウと同じく、  
自分も軍の連中に復讐していたのかも知れない。

それが気付けば、本来の意図していた事とは別の他の事にまで介  
入している自分が居た。

（ドクターの言う通りだ。口では軍に戻りたくないと言っておきながら、自分の遣っている事は程度の違いさえあれ、以前の俺と同じだ）

職業柄、よく傭兵ようへいとも話したことがある。

殆どの者が生活の為だったが、中には『今在る自分の為だ』と言  
った者も居た。

『戦争屋は戦争をするしか脳がねえんだよ。血の臭いを覚えてしま  
った者はそれが忘れられずにいるのさ』

日に焼け、汗と埃ほこりに塗まみれたその髭面ひげつらが誇ほこらしげに笑った。

（俺も……そうなのかも知れない）

「所轄の調書では報道カメラマンとなつてているが、君が今までに取  
材して来た物の殆どがが軍の機密事項に抵触ていしよくするかしないかのギリ  
ギリのものだった。だが、マック達の件であれ程三島が釘を刺して  
おいたのにも関わらず、君は其れを無視して極秘だったミューズ社  
内部を公表した。軍の失態も添そえてな。

軍は君の搜索に本腰を入れなければならなくなった。何人かを内  
偵させたそうだが、いつも肝心の所で逃げられていた。だが、もう

……観念したまえ」

「……相手が悪かったかな」

諦めとも取れる言い方だった。

## 第10話 FCI

「大丈夫？ マック？」

「……うん」

僕は名残惜しなごりおそうにエルフィンエルフィンの柔らかい胸から離れた。

僕は彼女を庇かばっていた筈はずだったのに、いつの間にか僕の方が彼女にしつかりと庇かばわれていた。

「腕……僕のせいで駄目にしちゃったね」

（折角治したばかりなのに）

「どうして？ マックのせいじゃないわ。私の不注意よ」

エルフィンが僕の顔を覗のぞき込んだ。

碧の澄んだ瞳が僕のぐしゃぐしゃになった顔を映し出す。

「だって……だってあの時僕がもっと早くインターセプタを遣つかえたら……」

（この変な力があるのに上手く遣えなかった……情けないよ）  
目の前が揺らめいた。

（……まただ）

僕はエルフィンエルフィンを護まもってあげられなかった自分を悔くやんで泣き出しそうになる。

慌わてて彼女から顔を背そむけた。

「ごめん……へ、変だな。僕って、こんな……こんなに泣き虫だったのかな……？」

鼻を嚙すすった。

恥ずかしいけど、声までが完全に涙声だ。

今までは不自由だった自分の身体を持っていて、総ての感情が諦めモードだった。

どんな事が目の前で起こっても、僕は常に傍観者でしか無かった。「僕のせいじゃない。僕は何もできないんだ」「僕に何が出来る？」

人にしてあげられるコトなんか僕には無いんだ」……そう自分に都合の良い理由をつけて逃げ出し、現実から目を逸らせていたズルイ僕が居た。

でも、そうでもしないと良心の呵責<sup>かしゃく</sup>に耐えられそうになかったから……

（けど、今は違う。僕の中に、一人前に悔しがっているもう一人の僕が居る。しかも、以前の僕よりもずっと後悔ばかりしている気がするんだ。

だけど……きつといつか……）

エルフィンの細い指先が優しく僕の涙を拭い、頬<sup>ほほ</sup>を撫<sup>な</sup>でた。

「……エルフィン？」

「私なら大丈夫よ。すぐに感覚器を切ったもの。バイオノイドの腕は造り物だし換<sup>か</sup>わりはあるもの。それよりもマックが無事で良かった」

エルフィンはそう言って微笑んだ。

「違うんだ。僕なら……」

僕はエルフィンの微笑が素直に受け入れられなくて、首を横に振る。

「ニアさえ無事なら僕は……多分きつと死なない。この身体はニアの映し身だもの」

（良い意味でも、悪い意味でもね）

「マック……」

僕は再びエルフィンの腕に包まれた。

（うわ……？）

また胸がドキドキする。

「ありがとう」

「……え？」

（何？ それって僕に、この僕に言っているの？ 何も……何も出来なかったこの僕に？）

今まで、生きている事自体がお荷物的存在でしか無かった僕の心

に、彼女の言葉が染み込んで行く

一際強い風が吹いて、僕達は病院館内で聞える筈の無い車のエンジン音を耳にした。

それもあり手を加えて改造されている音だ。

（こっちに近付いて来る……外から？）

「うわっ？」

エルフィンに抱き<sup>すく</sup>締められたまま、僕は思わず声が出た。

その車は爆風で崩壊し、吹き抜け状態になっていた外からいきなり現れた。

建物の外壁を垂直に登って来たらしい。

見掛けはタダの改造型スポーツタイプの乗用車なのにどうやって登って来たんだろう

「今度は何だよ？」

アーヴィンが投げ遣りにぼやいた。

ガルウィング式の車のドアが左右に跳<sup>は</sup>ね上がり、中から二十代半ばの男女が降りて来る。

アーヴィンほどではないが、日焼けをしたような浅黒い肌を持つ背の高い男性と、彼には少し勿体ない程の美しい金髪の女性だ。

「あ？ 岬……さん？ それに、レイナさんまで……」

アーヴィンは彼等に見覚えがあつたようだ。

呼ばれた男はアーヴィンに素早く視線で<sup>こた</sup>応える。

「ドクター山崎……オリジナルのご本人ですよね？」

男の声に、ドクター山崎は頭を<sup>もた</sup>擡げて、ゆっくりと<sup>うなず</sup>頷いた。

（……オリジナル？）

アーヴィンを除いた誰もが彼の言葉に疑問を抱いた。

岬は、ドクター山崎の状態を黙って診た。

彼は表情一つ動かさない。

「F C Iの高千穂です。貴方には話を伺わなければなりません」

事務的にそう言つて岬は身分証を一閃させ、ドクター山崎に任意同行を求めた。

ドクター山崎は黙つてもう一度顎を引く。

「時間が無い。ドクター、今がどういった状況かはお分かりですよね？ 貴方の識別コードと解除パスワードをお教え願えませんか？」

岬は丁寧な言い回しだが乱暴な言い方をした。「ドクターに拒否は認めない」そんな強制的な言い方だった。

「やはり来たかね……」

ドクター山崎は切羽詰つた表情を浮べ、顔を歪める。

口を噤んでしまったドクターを、岬はいきなり左の片手で彼の胸倉を掴んで締め上げた。

「俺はあんたの心中の巻き添えはご免だし、させない！」

岬は挑み掛かる厳しい視線をドクターに送つた。

ドクター山崎はその視線から逃れようと顔を背ける。

「……」

岬は掴んでいた手を放した。ドクター山崎はその場に腰が抜けたように座り込む。

ドクター山崎の視線の先にはニア達が居た。

ニア達は訳が解らないまま、座り込んでいるドクター山崎を遠巻きに取囲んでいた。

彼の眼差しは既に今までの余裕は無く、何かに怖じ気付いている様子が窺える。

「わ……解つた」

ドクター山崎は両肩を力無く落した。

そして岬に認識コードと解除のパスワードを伝える。

「レイナ、ドクターと女の子を頼む」

岬は彼女にそう言つと、自分はアーヴィンの方に向かった。

「シュライバー、仕事だ」

岬がその名を呼ぶと、車が現れた病院の外壁からクワガタ虫の口

ボットがごそごそと這<sup>は</sup>い出して来た。

「うわークワガタ虫だあゝ。カックイゝ！」

ニアはロボットの姿を見ると、喜んでべたべたと触りまくった。シュライバーはニアに触られて迷惑そうに左右の触覚らしい器官を動かす。

ニアとは対照的に、虫の嫌いなエルフィンは短く悲鳴を上げて引き攣<sup>つ</sup>った表情を浮べた。

「そんなに嫌がらないで。本当は私だって苦手なの。シュライバー、早くドクターを」

レイナが情けなさそうに肩を竦<sup>すく</sup>めた。

どうやら彼女も右に同じらしい。

彼女はシュライバーにドクター山崎のヴァイタルチェックの指示を出す。

シュライバーはその大顎で器用にドクター山崎を抱えると素早く彼の身体をスキャンニングした。

状況を頭部に組み込まれているモニタに表示すると、腹部から彼に必要な応急処置キットが出て来る。

レイナがそれを受け取り手早く処置を施した。

シュライバーが車の後部座席にドクター山崎を押し込むと、彼女は手際良くシートベルトでドクター山崎の身体を固定する。

レイナは続いてニアとエルフィンに同乗<sup>つな</sup>を促した。

「嫌だ。ニアはここに残るの」

ニアは両の拳を胸の前でぐつと握り、首を振った。

今、ここでアーヴィンと離れれば、もう会えないかも知れないそんな分離不安に襲われる。

「私も……」

ニアにつられてエルフィンまでもがレイナの指示を拒否した。

「気持ちは解らないでもないけれど、貴方達には協力して貰いたい  
の」

「……？ 協力？」

怪訝<sup>けげん</sup>そうにエルフィンが彼女の言葉を聴き返す。

レイナが軽く頷<sup>うなず</sup>いた。

「そう、彼を逃がすの。この混乱に乗じて……<sup>ただ</sup>但し、彼には其れ相応の仕事をして貰う事になっているわ」

「あの、言っている事がよく……」

「解らない？」

（誰？ この人達、二人共気配が感じられない。アーヴィンもそうだけど、彼とはまた違う。まるで動物が本能的に持っている何かをこの人達は持っているわ……誰なの？）

エルフィンはレイナの余裕のある態度に吞まれながらも一步も引こうとはしない。

寧ろ、彼女を探<sup>むし</sup>っているようでもあった。

「だって、貴方達は軍の……」

（多分、私よりもずっと上の人達…… F C I ってあの男の人が言っていたけれど、それって連邦の中央統括機構？ でも、私と同じ軍の人達がアーヴィンを逃がす……って どう言う事なの？ 彼に射殺命令を下していたのは軍なのに……？ しかも、こんなにタイミング良く……まるで命令が覆<sup>くつがえ</sup>されるのが判っていて、待機していたみたいに……）

エルフィンの問い掛ける視線に、レイナは力強く頷いた。

「私達は彼にきつかけを提供するだけよ。逃げるか逃げないかは彼が判断して決める事だわ。だから、私と一緒にここから離れて」

紫の瞳が優しく微笑む。

「どおして？」

ニアは口を尖らせた。

「時にはそういう協力の仕方もあるのよ。ニアちゃん」  
流石に衛星から病院ごと狙われているとは口が裂けても言えない。

「ニアを知っているの？」

「まあ、上辺<sup>うわへ</sup>だけのプロフィールくらいなら」

「ニア、この人の言う通りだわ。此処は従いましょう」

エルフィンがニアの肩を軽く加減して掴んだ。

微かにその指先に力が籠る。こも

彼女の握力にニアは驚いてエルフィンを振り仰いだ。

（何かあるの？）

ニアの視線の問い掛けに、エルフィンは黙って頷く。

「その方が得策だね。私達にとっても、アーヴィンにとっても」

「アーヴィンの？」

「ええ」

（ごめんねニア……アーヴィンとはもう会えない事になるかも知れないけれど……）

「……解った」

「よし、良い子だ」

岬はニア達の反応に満足そうに頷いた。

そして蹲うつくまっているアーヴィンの傍そばに片膝を着く。

「オイ、立てるか？」

アーヴィンは震えながらも頷き、齒を喰いしばって上体を起こした。

「まさか……貴方が来るとは思いませんでしたよ」

「俺もだ。ライナスが心配していたぞ」

アーヴィンの動きが停まった。

訝いぶかって岬を見上げる。

「あの人が？……まさか」

目線を合わせば突っ掛かって来たライナスだ。

彼に対しては、お世辞にも良い印象は持っていない。

「ま、アイツも不器用な奴だからな。どういった態度を取ったかくらい、お前を見ていれば判るよ。にしても……この前はよくも遣ってくれたな？ お陰で一時俺は部署からお払い箱にされたんだぞ？」

岬は一段と低い声で恨みがましく凄すこんで見せた。

「な、何の……事ですか？」



心当たりがあつたアーヴィンが、しまったという表情を見せる。  
「惚<sup>とほ</sup>けるな。幾ら取材とはいえ、洗い浚<sup>せう</sup>い書き立てやがって……まあ、それでレイナと逢う事が出来たんだ。今回はチャラにしてやるさ」

アーヴィンは安堵の大きな息を吐いた。

様子を窺<sup>うかが</sup>っていた岬が表情を崩して苦笑する。

彼の傷の状態を診た岬は、シュライバーを呼んで必要な医療器具を入力した。

シュライバーの腹部から出た処置キットの中から数本のアンプルを取り出す。

「貴方には何度か会いましたけど、こうして助けて貰うのは二度目ですね？」

「そう……だったか？ 悪いが、野郎を助けた事なんか一々覚えていない」

処置の手を休めずに岬は惚<sup>とほ</sup>けた。

「嘘が下手ですね」

「そうか？ だが、まだ助かったと思って貰っちゃ困るな」

彼の言葉にアーヴィンの表情が固まった。

アーヴィンのそんな様子を見て意地悪<sup>ひそ</sup>そうに笑うと、岬はニア達に聴かれないように一段と声を潜めた。

「後、数分もしない内に上空に監視攻撃システムを搭載した衛星が来る。目的地のここへ到達するのと同時に攻撃を仕掛けて来るようセツトされてしまった」

岬は彼の傷口付近の神経に局所麻酔を打ちながらそう言った。

まるで他人事のように淡々としている。

「……取敢えず痛みは麻痺させた。これで暫らくは動けるな？ 弾の摘出は後だ。察する処、銃が暴発して命中しましたって感じたが急所は外れている……運が良いな」

アーヴィンは黙って顎<sup>あご</sup>を引いた。

「で、識別コードと解除パスワードは聞いているが、実際に当てに

はならない。何せ、自分のダミーで自分自身をお前達諸共消そうと  
していた奴だ」

「やっぱり……」

アーヴィンは自分の勘が当たっていた事を覚った。

「どうする？」

岬はアーヴィンの顔を覗き込んだ。のぞ

「目標の攻撃設定の解除か自爆。若しくは他の衛星からの爆破。時  
間的余裕があれば、地対空迎撃システムの作動」

岬はアーヴィンの回答に頷いた。うなず

「幸い、この病院はGPSからの裏情報を持つパーソナルA・Iを  
所有している。アーヴィン、キツイだろうがもう少し付き合って貰  
うぞ？」

岬は振り返ってニア達に付いて行こうとしていたマックを呼び止  
めた。

「マック、君も協力してくれ」

「はい？」

呼び止められて僕は驚いた。

思わず自分の事を指さして確認をする。

「そつ、君だ」

岬さんは大きく頷いた。

「え、ええーっ？ 僕？」

呼ばれて僕は萎縮した。いじく

いきなり遣って来た見ず知らずの人なのに、どうして僕の名前を  
知っているんだろう。

「少し怖い思いをさせてしまっが、君なら大丈夫だろう？ 俺のこ  
の手ではまともなキー操作が出来ない」

岬さんはそう言って白い包帯を巻いている右手を軽く挙げて僕に  
見せた。

（僕の正体を知っている……？）

怯えて警戒する僕の視線に気付いた岬さんは、顎を引いて少し笑った。

（あれ？ この人、さっきから見ていると随分怖そうな人だなと思わなかったのに……優しいそうに笑う事も出来る人なんだ）さっきまでの僕の猜疑心が解かれて行く。

「職務上の権限ってヤツでね。少し君についても調べさせて貰った。君ならアーヴィンの補佐として十分だ。勿論、このシュライバーもサポートする」

岬さんは顎を杓ってその「シュライバー」を呼び寄せ僕に近付けた。

「うひい……？」

悲鳴が声にならなかった。

僕はニアと違って大の虫嫌いだ。

それが目の前で大人が四つん這いになった位の大きさに拡大されて動いている。

シュライバーはギギギと鳴いてその大顎を振った。

## 第11話 秘密

「その制服、中々似合っているな」

聞き覚えのある男の声にアーヴィンは振り返った。

そこには松葉杖を突いた三島が立っていた。

彼は慌てて外していた詰襟つめえりを正しながら起立する。

三島はそれ以上の礼は無用だと、軽く片手を挙げた。

「もう、起きてても宜よろしいのですか？」

「お前こそ、良いのか？」

「若いですから」

さらりと言い返した。

三島はアーヴィンの言葉に一瞬ムツとする。

「……厭味いやみを聞きに来たのではないぞ？」

咳払いをして苦笑しながらも、杖を支えに覚束おぼつかない足取りで近寄って来る。

アーヴィンは席を譲った。

「すまん。まだ暫くは立っておられんな。失礼するよ」

三島はアーヴィンの座っていた席に腰を降ろした。

そして徐おもむろに彼を見上げる。

「よく……よく思い留まってくれたな」

そう言っグレーの瞳を潤ませた。

「助かった……と言っべきでしょう？」

アーヴィンは自嘲じちやう気味に笑う。

「しかし、あの後お前は逃げようと思えば逃げられた筈だ」

「それしか他に手が無かっただけです……自分は二度もニアに助けられました。その借りがあるだけです。助かったのが奇跡だ。正直、残りの人生はオマケだと思っていますよ」

「護るものが出来たか」

「は？」

アーヴィンは三島の言葉を聞き返し、首を傾げた。

「足枷<sup>あしかせ</sup>……の間違いじゃありませんか？ それとも、猫の鈴ですか？」

「それは違う。護るべきものがあつてこそ、人は尚一層強くなる。

逆にそれが弱みとなつて他人から付け込まれてしまふ事も勿論あるがな。プラスに捉えるか、マイナスとして捉えるか。どちらを選択するかはお前次第だ。ま、精神面での話だが……」

「そんなものですかね？」

（……何が護るものだよ）

言われているこちらが気恥ずかしくなつた。

「ところで……昨日も二、三人医務室に運ばれたと聞いて気を揉<sup>も</sup>んだが……ドクターが感心しとつたぞ。皆単なる脳震盪<sup>のうしんとう</sup>や脱臼<sup>だつぎゆう</sup>だつたそつだな？」

「大袈裟<sup>おおげさ</sup>なんですよ。大した技も掛けていないのに……あんなの寸止めの十歩手前だ」

アーヴィンは不満そうに膨れつ面でそつばを向いた。

「それじゃ業務の方はどうなつとる？」

「業務ですか？ 順調とは言い難いですね。何せ、相手は最年少でも自分より三つも年上。上は二回以上です。自分とは親子みたいなので居るんですよ？ しかも大半が自分よりもガタイもデカイと来ている。初日早々彼等から洗礼を受けましたよ。お陰でシフトが滅茶苦茶だ」

「お前を「教官」として認めない」……か？」

三島の顔が曇る。

「自分達よりも年下の、場合によっては息子以上も歳の離れているお前に指導される者も居る。彼等にとっては屈辱<sup>くつじよく</sup>だろうな？」

「そうですね。少し時間が必要かと……」

「何だ。もうネを上げているのか？」

「いえ」

アーヴィンは屈託<sup>くつたく</sup>の無い笑顔を三島に向けた。

「それを訊いて安心した。彼等は軍のマニュアルしか知らん連中ばかりだ。上辺でのシミュレーションを何度完璧にこなしたとしても実戦経験の有るお前とでは比べ物にはならんよ」

「自分はまた同じ持ち場に就かされるのだと思っていました」

「あの時の二の舞はもう御免だからな。ただ、非常時の際には……」  
「解っています」

三島の言葉にアーヴィンは即答した。

「そう、再々非常時が無い事をわしも願っておるよ」

アーヴィンは軽く顎を引いた。

「世間から非難されている事であれ、身を以って熟知している者は、それを見極める眼もまた兼ね備えて持っておる。まあ要するに、餅は餅屋と言う事だ」

（つて、俺は餅屋かよ？）

もう少し、マシな喻え方は無いのかと恨めし気に三島を見て、アーヴィンは肩を竦めた。

「アーヴィン「殺す術を以って、生かす術に換えよ」……わしが言いたいのはそれだ」

アーヴィンの蒼い瞳が大きく見開かれる。

三島は満足気に彼を見上げた。

「……で？ 今日自分の陣中見舞いですか？」

アーヴィンは三島がその一言の為に態々（わざわざ）来たのでは無い事を見抜いていた。

「おお、その事だがな」

三島は表情を綻ばせて言った。

（……やっぱり）

三島がこれから自分に吹っ掛けようとしている難題を想像して気が重くなる。

「来月からお前に助手を就けようと思ってな。色々適任者を捜しておったのだよ」

「はあ。助手……ですか」

（何だ。そんな事か）

ホツとした。尤も、陣中見舞いなどは元から予想してはいない。

「お前の……」

「つと、待ってください」

厭な予感に、彼は片手を軽く上げて言い掛けた三島を止めた。

「結構です。お断りします」

強い口調で言い切った。

「勘が良いな。相変わらず……そうか。まあ、いずれにせよ彼女達はお前の指揮下に入る。精々面倒を見てやれ」

「つて……冗談でしょう？」

「わしが冗談を言う様な者かどうかはお前が良く知っている筈だ」

三島は真顔で言ったが、その眼は微妙に笑っている。

「……」

（いつも言っている癖に……）

「あ、居た々」

「アーヴィンだあ」

聞き覚えのある、女の子達の弾んだ声はずが通路から聞こえた。彼は声の方へと顔を向ける。

「お昼行こうよお」

「あ、いや……」

アーヴィンは彼女達の誘いを遠慮した。

「行つて来い。わしなら構わんよ」

三島はニヤリと笑う。そして、くるりと椅子を回転させて彼に背を向けた。

（三島さん……）

三島の心遣いを覚って、アーヴィンは表情を和らげた。

「は……失礼します」

三島の背中に向かって姿勢を正し、軍の正式な敬礼をする。

「ねえ、奢おしってえ」

甘えた猫なで声がする。

「どうしてそうなんだよ？　　ってか、誘った方が奢らないか？　　普通――」

迷惑そうなアーヴィンの声が遠去かる。

その遣り取りを背後で耳にした三島は、軽く肩を揺すって表情を綻ほころばせた。

『では、君はオースティンを再び軍に迎えると言っのかね？』

三島は黙って頷いた。

彼を取囲んでいた委員達は皆、一様にどよめく。

『静かに！』

委員長が静せいじふく肅を求める。

『君は我々が非公式に抹殺した者が今更それを無条件で受け入れる  
とも思っているのかね？現に、彼のメンバーから復讐目的の殺害  
事件が発生した。犯罪の模倣もほう、違法なサイバノイドの悪質改造……  
一時は社会問題にまでなり、未だにその影響は各所に波及しておる。  
大体、君のその受けた傷も彼等に因よるものではないのかね？』

委員長は、ベッドの上で上半身を起こし点滴をしたままの状態  
で答弁をしている三島を見下ろした。

左足に二発。内一発は三島の大腿骨を砕いていた。

腹部にも三発の銃弾を受けている。

鎮痛剤で痛みを散らしてはいるが、とても自力で立つ事が出来な  
い。

『それこそ、軍の内部に爆発物を持ち込むものだ。』

『オースティンが彼等と同じメンバーであつた事実は認めます。け  
れど、彼等と同じ道を歩む事は断じて無い。私が保証します。万が  
一その危険性が見出されれば、一切の責任と、私に対するどのよう  
な処分でも甘んじましょう』

『ほお。随分な言いようですな』



委員の一人が三島を見下すように言い放った。

『私は部下を信頼しております』

『今は手配犯だ。奴が君の部下になれるとは決まってはおらんよ』

『軍を舐めて貰っては困る。何を甘い事を……』

委員達からは口々に三島を非難する言葉が出る。

『君は F C I 統括部門だけでなく第 8 課の部長も兼任しておる。

これ以上、敢えて危険な橋は渡らぬ方が賢くはないかね？』

『そうだ。態々（わざわざ）取扱注意の「核」を保持する必要は無い』

『「核」がそんなに危険ですか？ 兵器としての「核」を想定した場合でしか考えてはおられん様だ。平和利用としての逆もある。彼を指示、指導する側次第だ。何もかもがオースティン達の責任だと勘違いされては困る』

三島を諭そうとしていた者も何人かはいたが、それでも三島は静かに反論した。

『勘違い？ 黙って聴いていれば……』

『口を慎みたまえ。我々が間違っていたとでも言うのか？』

『過去の事を蒸し返すのは止めて貰おう。第一、当時我々はそこには居なかった。居たのは殺された連中と三島君、君ではないか！』

委員達はそれぞれがそうだと頷いた。

『否定する心算は無い。本当に処罰されなければならなかったのは彼等ではなかった』

『どうやらオースティンを買被り過ぎておられる』

一人が三島に同情するかのように首を横に振った。

『訊けば君の部署にはつい先日、エレメンタルまが紛いの獣けだものまで招き入れたそうだが？』

『……何の事でしょうか？ 仰おっている意味が判りませんが？』

三島は惚とぼけた。眉が僅わずかに動く。

『惚けおって……バイオノイドやサイバノイドならいざ知らず、そんな恐ろしい獣まで君は部署内で飼っているのかね？』

『その「獣」とか言うのは別問題にして戴こう。彼等は優れた能力で貴方を日々陰で護っている者達ですぞ』

『はっ、汚らしい。いつ気が変わってその刃を向けるとも限らない輩に護って貰わなくとも結構だ。それとも何か他の目的で飼っているのかね？』

『要するに、我々以上の能力を持った者であればその気になればいつでも欺ける。我々に従う必要など無かるう？ 何故そう思わんのかね？ それとも君は足枷になるものでも遣っているのかね？』

『何をどう誤認されたのか判りませんが、意味の無い部下への中傷は謹んで戴こう』

三島は恫喝とも取れる彼等の言葉を毅然とした態度で撥ね付けた。あくまでシラを切り通す心算か！』

『論議の方向が違って来てはおりませんか？』

三島は平然と言い放った。

『何い？』

収まりがつかなくなり、血相を変えた何人かが乱暴に起立する。

『まあ、待ちたまえ……』

『委員長』

手元のディスプレイに秘書官の顔が映り、自動で議会議室の扉が開いた。委員長に秘書官が足早に近付く。

『少し待ってくれ』

委員長は議会のメンバーを見回すと、秘書官に耳を傾ける。

（遅い……山崎は何をやっている）

三島は自分の腕時計を睨み付けた。

そして、鳴らない携帯に苛立ちを募らせる。

身動きが取れない自分の為に、ドクター山崎は代役を買って出てくれたのだ。

時間的に見ても、アーヴィンにとっくに出会っている筈だが……？ 秘書官との遣り取りに、何度も頷いた委員長は正面へと向き直った。

『先程オースティンの身柄を確保した。処分の方は此方に任せて貰おう』

ぴくりと三島の肩が上がる。一瞬、エルフィンの顔が脳裏を過った。

『では、どうあつても……？』

『元よりその心算だ』

委員長は素つ氣無く言い放った。

『お、お待ち下さい！ では何故委員会を招集されたのです？』

『君も判らん男だな。時間稼ぎだよ。過去、委員会の決議に撤回は認められなかった。それが何故だか判らない君ではあるまい？』

委員長の傍に居た一人が口を挟んだ。

三島の頬に赤味が差す。

『前例が無いから有り得ない……ですか？ 委員長、それで貴方は承認されるのですか？これ以上無駄に時間を延ばすのであれば……』

『君の権限でオースティンをどうにかするのか？』

委員長は机上で両肘を着き、憔悴<sup>せうすい</sup>しきった表情で手を組み三島を見下ろす。

『越権行為だぞ！』

一人が机上を叩いて立ち上がり、三島を罵<sup>ののし</sup>った。

『人一人の命を護れなくて、何が正義だ！ 貴方方は我々が遣った四年前と同じ事をまた繰り返すお心算か？』

『口が過ぎるぞ！ 三島君！』

『委員会に対する冒瀆<sup>ぼうとく</sup>だ！』

またもや三島に対しての非難が沸き立つ。

『落ち着きたまえ。我々は既にオースティンに対して、射殺命令を下しておる。もう手遅れだ。今更論議して君の履歴に傷を付ける必要はあるまい？』

『……では、オースティンが助かれば命令の撤回を承諾して戴けますかな？』

委員長は三島の余裕に満ちた表情を見て、自分の目を疑った。

『……助ければの話だ。まさか君が事後承諾の心算で既に手配をしていたのか？』

『そんな賭けの真似を……お止めください。委員長！ 三島君、君も憤<sup>つし</sup>みたまえ！』

数人が委員長の席に詰め寄った。

『いいえ、私はまだ何もしてはおりません。ただ、オースティンは非公認であれ、特殊部隊に籍を置いていた事をお忘れですか？ 私が動くのはこれからです』

三島の瞳の奥に、揺るぎ無い確固とした何かを委員長は見出していた。

「『履歴』……か。もうとつくの昔に傷だらけになっておるわい……」

三島は渋い顔でその言葉を何度も小声で反芻<sup>はんすう</sup>した。

「……お前か」

振り返らずに静かに口を開く。三島の背後で気配が動いた。

「ドクター山崎の死亡が先程確認されました」

一瞬、三島の細い眼が大きく見開かれた。

「……そう……か」

（やはりわし等には処置させては貰えなかったか……）

溜め息混じりに肩を落とした。

（公判の日程さえ未定だったのに）

「彼が得た知識は今後軍の中央データに登録されます」

「必要なのは奴の知識だけであって、人格では無い……か」

親友を失ったやるせなさを振り解こうとでもしているように、三

島は軽く首を横に振った。

「ご胸中<sup>きょうちゅう</sup>、お察<sup>さつ</sup>します」

沈んだ声が返って来る。

「自分が死ねば無条件でA・Iの一部に組み込まれる。以前から、奴はそうなる事を望んではおらなんだ……持って半年、自らの死期

を覚っていた山崎はいつその事、自分が関与したニア達と共に文字通り消える心算だったのかも知れんな」

（だからわしの代わりを買って出たのか……山崎？）

危険を承知で自分の代理を申し出たドクター山崎の真意が掴めなかった。

研究所や重要なセクションに何人ものダミーを忍ばせ、彼が得た過去の機密データを削除していたのも、彼が亡くなった今にしてみれば頷ける。

「良かったのですかね？ ……これで」

「さあ、わしにも分かん。ただ、奴が望まなかった事態になってしまった事は確かだな」

三島は深い溜め息を吐いた。

「引き続きオースティンへの監視を続行しますか？ 本人、自分が監視されている事にとくに勘付いていますが？ ……ま、これじや監視の意味がありませんがね？」

男は首を傾げて肩を竦める。

「いや、その件はもう構わん。忙しいのに済まなかったな。持ち場に帰ってくれ」

三島は男の視線に気付いた。

顔を上げてゆっくりと振り返る。

岬が三島を穏やかに見下ろしていた。

「だけど……よく、あの諮問会を説伏せましたね？」

「わしにもそれなりに貯金は持っている心算だよ。尤もお前達の件と今回の件、立て続けで底が尽きたかも知れんな？」

三島は冗談交じりに苦笑した。

つられて岬も苦笑する。

「オースティンとフィリニツクはともかく、あのニアって娘、遣えるのですか？」

岬は心許無そうな表情をする。

「さあて……わしにも判らん。アーヴィンとエルフィンの二人に任

せてみるさ。ニアにはマックもついておる。どうやらあの娘は未知数の可能性を持つておる。勿論マックにも」

「人格特定可能な精神だけの少年……俺には専門外だが、医学的に見てもマックとかいう彼の存在は興味深いですね？」

「焦らずに見守ってみようと思つとる。遣える、遣えないと言つ次元の問題は、それからもつと先の話でも構わん」

三島は余裕のある笑みで岬を見上げた。

「おい、聴いたか？」

軽く笑いながら、岬は背後を振り返つた。

「へっ？」

突然僕に振つて来たから、心構えが出来ずに拍子抜けひょうしぬた返事をする。

（ぼ、僕？ …… どうして解つたのかな？）

ドアの陰に隠れて姿を消していた僕が居た。

ニアがアーヴィンと昼食に行った時、僕はこっそりニアから抜け出していたんだ。

「ほら、隠れてないで出て来いよ」

岬さんは笑みを絶やさずに、隠れていた僕の真正面に來て歩を停めた。

（どうして？ 姿を消しているのに……それとも見えるの？ 僕が？）

「フェアじゃないな？」

その言葉に、僕は渋々実体化する。

そこには岬さんの能力に怖じ気付き、表情を強張らせていた僕の姿が在つた。

「おいで」

岬さんは僕の背後に廻り込み、軽く僕の背中を押した。

僕は仕方なくオヤジさんの居る椅子の処まで連れ出される。

盗み聴きしていた後ろめたさと、隠れていたのに意図も簡単に見付けられた恥ずかしさで居た堪れなくなった。

「何驚いている？ ニア達が来た時から、ずっと居ただろ？」

岬さんは僕が居た事を当たり前のように言つてのけた。

（誰にも気付かれないようにそつとオヤジさん達を見ていたのに……）

僕の事に気付かなかったのはオヤジさんだけだった。

オヤジさんは背を向けたままで僕達の遣り取りを黙って聴いている。

「ど、どうして……？」

「気付くさ。俺達を見ていただろう？ 気配がするんだよ」

「……嘘」

（何でそんなことまで……）

確か、僕がニアと同化した時もアーヴィンが僕を見付けた。

この人も彼と同じニオイがする。

並みの人間では到底察知出来ない動物的な鋭い勘を持っている。

「……どうした？ ニア達と一緒に行かなかったのか？」

オヤジさんは僕的能力に改めて驚いていたのをはぐらかすように、椅子をくると回転させて僕達の方へと向き直った。

「オ……ヤジさん……あ、あの……その……」

僕は心の中のもやもやとしたものが拭い切れず、言葉に詰まってモジモジした。

（ああっ！ もう！ 馬鹿！ 馬鹿！ 僕はオヤジさん達の会話を盗み聞きたりして…… 一体何をしているんだろう？ でも、やった後で悔やむから後悔って言っただあゝ）

僕の頭の中は混乱して、もう支離滅裂だ。

「どうしたね？」

オヤジさんはもう一度そう言つて、僕に優しく微笑んだ。

僕に対して少しの疑いも持っていないかのような澄んだ瞳が向けられる。

「……」

僕は薄汚い自分を見られたくなくて思わず顔を逸らせた。

「訊いていただろう？ 今の話。まだ不安か？」

押し黙ってしまった僕に、岬さんは問い掛けた。

（口先ではどうとでも言えるんだ。特に大人は。心の中では僕の事をどう思っているのだから解りはしないんだ。利用するだけ利用しておいて……あのアーヴィンだって何年か前は大人達に利用されて殺されていた筈だった……そうさ。でも……）

僕は顔を上げてオヤジさん達を見た。

「俺も君と同じ年の頃そうだった。少し人を疑う事を忘れた方が良いのかも知れないな？」

岬さんは僕の心が読み取れるのか、諭<sup>さと</sup>すように穏やかに言った。

「岬さん……」

「ウン？」

「岬さん……僕の事、変だと思わないの？」

「何言ってる？」

岬さんはチョツと困ったみたいだった。

「身体が無いんだよ！ 僕は……きつ、キモイ……とか思わないの？」

「マック！」

オヤジさんの鋭い一声がとんだ。

目の前がぼやけた僕の瞳に、オヤジさんが椅子から立ち上がったのが見えた。

そこから先は僕がぎゅっと目を閉じたから解らない。

「だって……だって僕は……」

（幽霊なんだ。僕は！）

突然、オヤジさんの腕が僕を抱き締めた。

「！」

「いる！ お前ならここに居るぞ！」

（オヤジさ……）



「お前はここに居る。居て良いんだ。自信を持て。他の者と違うからと言って諦めるな。諦めて自分を見失うな……解るなマック？」

オヤジさんはもう一度その言葉を嚙締めるように言った。

自分でも、何故此処に残ったのか判らなかった。  
でも、本当は……その一言が聴きたかっただけなのかも知れない。  
僕の心がじんわりと温かくなつた気がした。

「オヤジさん……」

僕の頬に涙が毀れた。

「もう、良いぞ」

腕組みをして、何かを待っているように静かに眼を閉じていた岬さんが口を開いた。

（……え？ 誰に言っているの？）

僕は声の掛けられたドアの方を振り返る。

「もお、息が詰まっちゃったよお」

そこには昼食に行った筈のニア達が居た。

エルフィンもアーヴィンも一緒だ。

「？ お前達、食事に行つたのじゃ無かつたのか？」

驚いていたのは僕と、僕をしつかりと受け止めてくれたオヤジさんだけだった。

「え？ ええ、まあ……」

アーヴィンが口籠る。

「判つたか？ 皆、君の事が心配なんだ」

「そうよ。悲劇のヒーローは止しなさいよ」

岬さんの言葉をエルフィンが継いだ。

「あん、もお！ 混む時間帯になっちゃったじゃないの。マックのせーだ」

「そう言つなつて」

時計を一瞥したニアが口を尖らせて軽く頬を膨らませた。  
アーヴィンがニアを諭す。

「行きましょ？ マック。サイバノイドの身体が厭なら無理に換装しなさいとは言わないわ」

「はぁ〜ん。アンタ、あの身体が厭でオヤジさんにゴネてたのぉ？」  
エルフィン言葉に納得したニアが僕の心を見透かしたように言い放った。

「なっ、ち、違うよ」

（どうしてそうなっちゃうんだよ？）

今度は僕が膨れた。

「そんなんじゃないんだ。そうじゃなくって……」

「はいはい。アンタお腹が空いているからナーバスになっちゃっているのよね？」

「違うって！」

僕は剥きになって否定した直後にはつとした。

大体、ニアの身体の映し身である僕が空腹にならないのを知っているのはニア本人だ。

聞く耳を持たないニアの頑なな態度に、皆が僕の事を氣遣って、態と話の方向をずらせている事に気が付いた。

「お昼、行こ？」

「な？」

ニアの言葉にアーヴィンが目配せする。

（……皆……）

「さ、一緒に行ってこい」

オヤジさんの温かい手が力強く僕の一步を後押しした。

## 追伸

「今度こそ行っただか」

三島はマック達の後姿を見送りながら、やれやれといった表情で

再び椅子に腰を降ろした。

「……岬」

「はい？」

「わしは……自分は間違った事は遣ってはおらんと信じとる。立場が違っても同じ人間だ。立場が違うから人の命を奪うのが許されるとは思ってはおらん……ま、こんな考えは軍にとつては……統率すべき者がそんな甘い思想を持つておるのは……却<sup>かえ</sup>って危険な存在なのだろうな」

溜め息混じりに三島は漏<sup>も</sup>らす。

「諮問会で相当堪えたんですね……でも、部長が居なければ、アーヴィン達は勿論、俺達もここには居ませんでしたからね。どうしたんです？ 珍しく弱音を吐いて」

「総てが大団円で終わることが出来るのならば、わしもこうはなるまいて」

「お年のせいですかね？」

岬は惚ける。

「何を言つとるか！」

剥<sup>む</sup>きになった三島の様子に、岬はくすつと笑みを漏<sup>も</sup>らした。

「貴方の眼を信じますよ」

（全てを受け入れる貴方の心眼<sup>め</sup>を……）

トール      デリー

ト第2章      完

第11話 秘密（後書き）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3371c/>

---

ドール      デリート      2

2011年10月22日03時13分発行